

187  
366

從容錄講話

上卷之一

019546-001-9

187-366

從容錄講話

高田 道見 / 述

M38-39

ABG-0314



從容錄講話

上卷之二

墻外道見筆錄

從容錄

東都 佛教館發行

明治  
38 3 15  
丙寅

世無

家子一粒

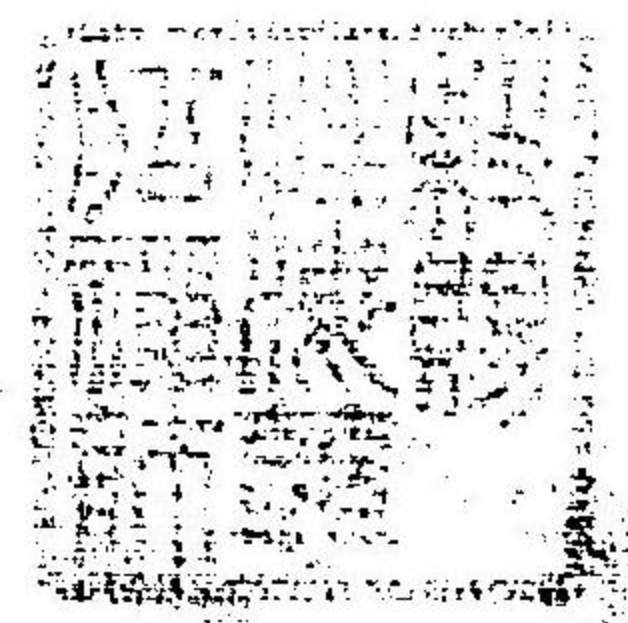
世無家子

永平悟由



符 玉  
凡 煙  
成 一  
聖 心

和平世道



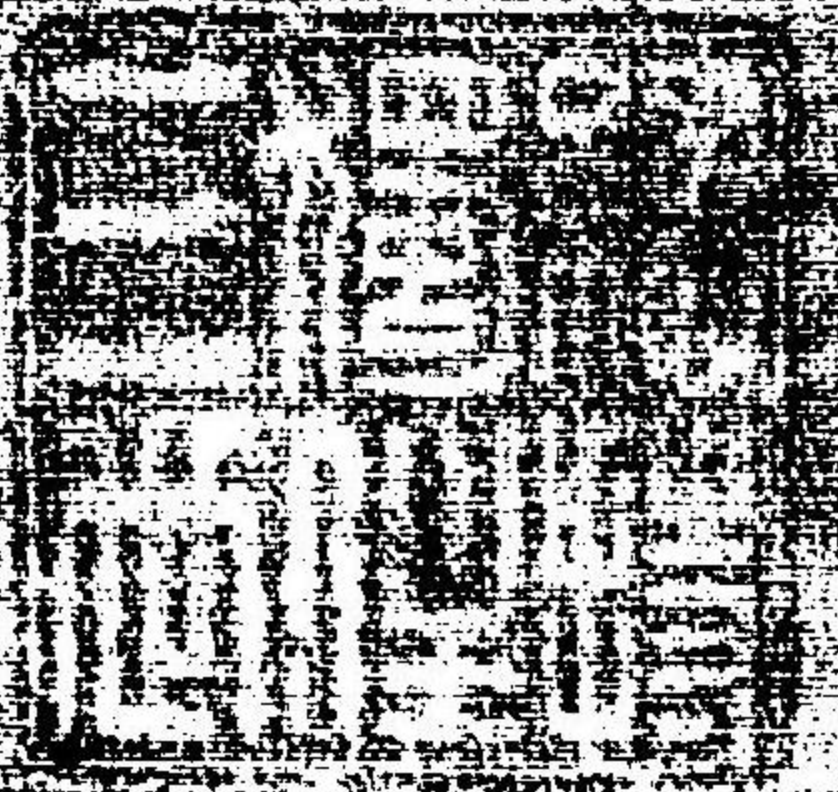
轉凡成聖  
玉理一也

魏楷魏碑



魏楷魏碑  
魏楷魏碑  
魏楷魏碑  
魏楷魏碑

恩  
特  
准  
以  
平  
也



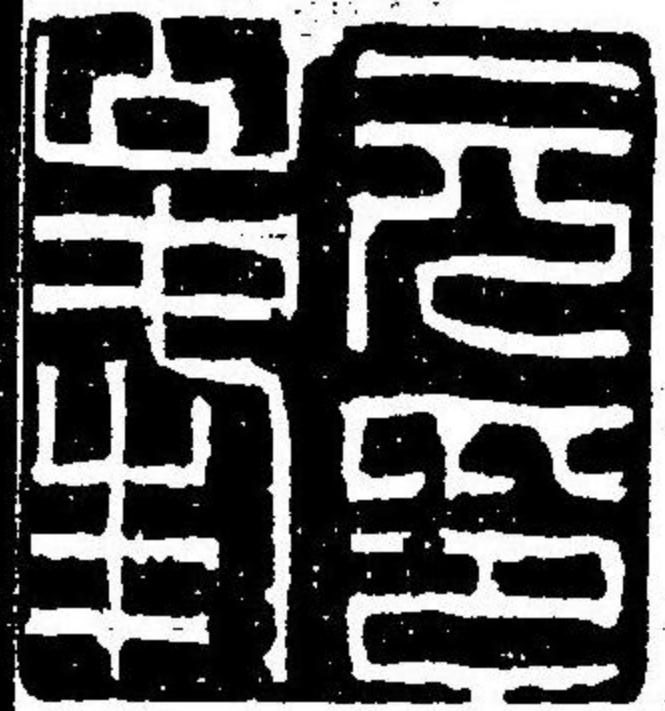
印

之  
經  
就  
荒  
何  
彼  
均  
意  
時  
杳  
第  
末



尚書方叔

元峰杜子



天童宏智禪師略傳

明州天童宏智正覺禪師は温州李氏の子なり、母夢みらく五臺の一僧環を解き與へて其の右臂に環すと乃ち孕めり、遂に齋戒す、生るゝに及て右臂特に起ること環状の若し、七歳にして口に數千言を誦す、祖の寂父の宗道、久しく佛陀の遜禪師に參ず、嘗て師を指して其父に謂て曰く、此子道韻勝るゝこと甚し、塵埃中の人に非ず、苟も出家せば必ず法器と爲らんと、十一にして淨明の本宗に得度す、十三にして五經七史に通ず、十四にして晋州慈雲寺の智瓊和尚に具戒す、十八にして遊方す、其祖に訣して曰く、若し大事を發明せずんば誓つて歸らずと、汝州香山に至るに及び、成枯木一見して深く器重せらる、一日僧の蓮經を誦するを聞き、父母所生眼悉見三千界といふに至り、瞥然として省あり、即ち方丈に詣して所悟を陳ぶ、臺上の香合を指して曰く、裏面是れ甚廢物ぞ、師曰く是れ甚廢の心行ぞ、山曰く汝が悟所又作廢生、師手を以て一圓相を畫して之を呈し、復た後に拋向す、山曰く泥團を弄するの漢甚廢の限りかあらん、師曰く錯、山曰く別に人に見えて始めて得ん、師應諾す、諾して即ち丹霞

當女方教

元峰杜子



天童宏智禪師略傳

明州天童宏智正覺禪師は温州李氏の子なり、母夢みらく五臺の一僧環を解き與へて其の右臂に環すと乃ち孕めり、遂に齋戒す、生るゝに及て右臂特に起ること環状の若し、七歳にして口に數千言を誦す、祖の寂父の宗道、久しく佛陀の遜禪師に參ず、併て師を指して其父に謂て曰く、此子道韻勝るゝこと甚し、塵埃中の人に非ず、苟も出家せば必ず法器と爲らんと、十一にして淨明の本宗に得度す、十三にして五經七史に通ず、十四にして晋州慈雲寺の智瓊和尚に具戒す、十八にして遊方す、其祖に訣して曰く、若し大事を發明せずんば誓つて歸らずと、汝州香山に至るに及び、成枯木一見して深く器重せらる、一日僧の蓮經を誦するを聞き、父母所生眼悉見三千界といふに至り、警然として省あり、即ち方丈に詣して所悟を陳ぶ、臺上の香合を指して曰く、裏面是れ甚麼物ぞ、師曰く是れ甚麼の心行ぞ、山曰く汝が悟所又作麼生、師手を以て一圓相を畫して之を呈し、復た後に抛向す、山曰く泥團を弄するの漢甚麼の限りかあらん、師曰く錯、山曰く別に人に見えて始めて得ん、師應諾す、諾して即ち丹霞

に造る霞問ふ、如何か是れ空劫已前の自己、師曰く、井底の蝦蟆月を吞却す、三更借らず、夜明簾、霞曰く、未だ更に道へ、師擬議す、霞打つこと一拂子して曰く、又道へ借らずと、師言下に釋然たり、遂に作禮す、霞曰く、何ぞ一句を道取せざる、師曰く、某甲今日失錢遭罪、霞曰く、未だ汝を打得するに暇あらず、且く去れと、霞大洪を領ず、師賤記を掌る、後に命じて衆に首たらしむ、得法の者已に數人、四年にして回通に過ぎる、時に真歇初めて長蘆に住す、僧を遣はして邀へて至らしむ、衆出て、迎へ、其の衣冠穿弊するを見て、且く之を易んとす、真歇侍者をして易るに新履を以てせしむ、師却けて曰く、我れ鞋の爲に來らんや、衆聞て心服す、説法を懇求して第一座に居す、六年にして出て泗州の普照に住す、次に太平、圓通、能仁、長蘆を補す、天童屋處湫隘なり、師至り創開して一新す、衲子争ひ集る云々

紹興丁丑九月、郡僚及び檀越に謁し、次に越帥趙公、令謁に謁して之と別を言ふ、十月七日山に還る、翌日辰巳の間沐浴して衣を更へ、端坐して衆に告げ、侍者を顧み、筆を索めて書を作り、育王の大慧禪師に遺ひして後事を主らんことを請ふ、仍て偈を書して曰く、夢幻空華、六十七年、自烏煙沒、秋水連天、筆を擲ちて逝す、龍を留む

ること七日、顔貌生けるが如し、全軀を奉じて東谷に塔す、僧臘五十三、其の生前遺す所の髮齒、設利之を綴ること珠の如し、宏智と證す、塔を妙光と曰ふ、台元第十四、普燈第九に詳かなり

### 萬松行秀禪師略傳

順天府報恩寺萬松行秀禪師は河内の人、族蔡氏なり、氣骨凡ならず、幼にして便ち超然として出世の志あり、父母之を難かる、然れども終に世を以て相奪ふべからざるを知る、因みに携へて刑州の淨土寺に送る、禮贊允に落髮して、乘具す、後、力を決して參究し、囊を擔ひ、燕に距り、潭柘を歴て慶壽に過り、勝默老人に參ず、老人曰く、此道を學するは金を鍛るが如し、滓穢不淨なるときは、即ち精金顯はれず、君が眉宇の間を觀るに、大いに物の有るあり、此物一番寒骨に徹するに非ずんば、放下すること能はず、子後に自から老僧が多言に在らざることを見んと、且つ長沙の自己を轉じて山河大地に歸するの話を看せしむ、半載所入なし、默曰く、我れ只備が遲會せんことを願ふこと之に久し、一口忽ちに省あり、玄沙未徹の語に於て、尙ほ未だ透らず、次に雪

巖の滿を破の大明に參ず、言下に忽ち悟て曰く、恁麼に近きことを得たり、從前の伎倆一火にして燼す、始めて勝默爲人の處を知る、雪巖に依ること二年、盡く其の底蘊を得、巖衣偈を付し、勉むるに大法を流通せんことを以てす、是れより兩河三晉皆師の名を欽む、是に於てか法門隱然として倚て、以て重きを爲す、尋て淨土に歸し、萬松菴を寺中に構ふ、耆宿敦く開法を請ふ、師之に應ず、次に中都の萬壽に住す、金の明昌癸丑、章宗詔して禁庭に入り、陞座せしむ、帝躬自ら迎禮し、法を聞いて感悟し、錦綺の大僧伽衣を賜ふ、承安丁巳詔して大都の仰山棲隱寺に住せしめ、以て開山玄冥頭席を繼がしむ、次に錫を報恩の洪濟に移す、元の太宗庚寅、復た勅を奉じて中都の萬壽に主たり、晩年從容菴に退居す、數々鉅刹に遷り、大いに洞上の宗を振ふ、道化極めて盛なりと稱す、併て宏智の百頌を拈撥して從容菴錄と曰ふ、又請益錄を著して碧巖の後塵を踵ぎ、寶鏡の重垢を開く、甚だ宗門に補ひあり、師天資敏利、百家の學淹通ぜざることなし、三たび大藏を閲して首尾熟貫す、祖燈錄六十二卷、辨宗說等若干卷あり、淨土仰山洪濟萬壽の四刹、皆錄あり、世に行はる、元の定宗元年丙午、後の四月五日を以て疾を示す、七日偈を書して曰く、八十一年只此の一語珍重す、諸人切に錯つて

舉すること莫れ、遂に逝く、世壽八十一、宋の乾道二年丙戌に生る、僧臘六十、通玄門外に茶毘す、舍利無數、諸方の門人分けて塔す、續燈正統第三十五に詳かなり



三國傳燈一覽

印度佛祖

過去佛

- 第一、毘婆尸佛
- 第二、尸棄佛
- 第三、毘舍浮佛
- 第四、拘留孫佛
- 第五、拘那含牟尼佛
- 第六、迦葉佛

現在佛

釋迦牟尼佛

- 第一祖、摩訶迦葉
- 第二祖、阿難陀
- 第三祖、商那和修
- 第四祖、優婆塞多
- 第五祖、提多迦
- 第六祖、彌遮迦
- 第七祖、婆須密多
- 第八祖、佛陀難提
- 第九祖、伏駄密多
- 第十祖、婆栗濕縛
- 第十一祖、富那夜奢
- 第十二祖、馬鳴
- 第十三祖、迦毘摩羅
- 第十四祖、那伽闍刺樹那
- 第十五祖、伽那提婆
- 第十六祖、羅睺羅多
- 第十七祖、付伽難提
- 第十八祖、伽耶舍多
- 第十九祖、鳩摩羅多
- 第二十祖、闍夜多

第二十一祖、婆修盤頭——第二十二祖、摩拏羅——第二十三祖、鶴勒那  
第二十四祖、獅子菩提——第二十五祖、婆舍斯多——第二十六祖、不如  
密多——第二十七祖、般若多羅

東土祖師

第二十八祖、善提達磨——道副——道育——尼總持  
第二十九祖、太祖慧可——第三十祖、鑑智僧璨——第三十一祖、大醫道信——  
第三十二祖、大滿弘忍——北宗神秀——嵩嶽惠安——蒙山道明——資州智  
休——第三十三祖、大鑑慧能

◎青原下

第三十四祖、青原行思——  
第三十五祖、石頭希遷——  
第三十六祖、藥山惟儼——  
京兆戶利——興國振朗——法門佛陀——大洞  
濟——潭州大川——長髭曠禪——招提慧朗——

◎南嶽下

第三十四祖、南嶽懷讓——  
第三十五祖、馬祖道一——  
第三十六祖、百丈懷海——  
潯山靈祐——五峯常觀——石霜性空——百  
丈涅槃——古靈神贊——平田普岸——

汾陽石拔——木空和尚  
天皇道吾——

龍潭崇信——江潭寶峯——德山宣鑑——高

亭閣——瑞龍惠恭——泉州瓦棺——

威濟資國——

白兆子圓——白兆懷楚——保壽匡祐——

雪峯義存——

岩頭大藏——羅山道閑——靈山慧宗——玄

泉山彥——瑞岩師彥——

雲門文偃——

香林澄遠——智門光祚——雪竇重顯——天  
衣義懷——

長蘆應天——法雲法秀——法雲惟白——

慧林宗本——本覺守一——長蘆宗頤——

双泉師寬——

福昌善重——夾山惟俊——夾山遵——

長慶大安——大隨法真——靈樹如敏——

靈雲志勤——

仰山惠寂——定山神莫——九峯慈惠——双

峯和尚——香巖智閑長平山和尚——吉

州志觀——

無着文喜——西塔光穆——南塔光涌——

南泉普願——鹽官齊安——麻谷資微——金

牛和尚——章敬懷暉——魯祖寶雲——

華林善覺——中邑洪思——龐居士——

石堂惠藏——東寺如會——盤山資積——

鎮州普化——大梅法常——新羅迦智——

杭州天龍——金華俱胝——

歸宗智常——華嚴智藏——五臺智通——

嵩山天恩——末山了然——

長沙景岑——陸亘大夫——耳贊行者——鄂

州芋萇——趙州從諗——西禪和尚——

洞山自室

洞山守初

雙泉都大師——德山緣密——德山紹晏

——德山志元——欽山悟勤——德山慧

遠——報慈山高

翠岩令參——太原孚上座——長慶惠稜——

翠岩從欣——保福從展

延壽惠輪——歸宗道詮——九峯道詮——

——保福可壽——隆壽無逸

玄沙師備——雲峯至德——天龍明真——羅

漢珪琛

法眼文益——清溪洪進——龍濟紹修——清

涼休復

清涼泰欽——羅漢行林——雲居道齊——靈

隱文勝——瑞岩義海

歸宗義居士——功臣覺軻——天台德詔

光孝惠覺——多福和尚——嚴陽善信

第三十七祖 黃檗希雲

第三十八祖 臨濟義玄

第三十九祖 興化存拜——三聖慧然——寶壽

沼——灌溪志閑——定上座

第四十祖 南院慧禹——守嚴侍者——潯州水

陸——鎮州大悲

第四十一祖 風穴延沼

第四十二祖 首山省念

第四十三祖 汾陽善昭——葉縣歸省——浮山

法遠——大乘慧果——大愚守芝——瑯琊

慧覺——洞山子圓——雲峯文脫

第四十四祖 慈明楚圓——法花金果

第四十五祖 黃龍惠南——百丈惟政——蔣山

保心——蔣山贊元

第四十六祖 晦堂祖心——真淨克文——覺範

慧洪——兜率從悅——興化仁岳——定林

惠臻——本覺寂珠

第四十七祖 黃龍惟清

第四十八祖 長靈守卓

第四十九祖 育王介繼

第五十祖 心聞曇資

第五十一祖 徑山從理

第五十二祖 虛庵懷敞

(日本) 建仁榮西——建仁明全

慈明楚圓——下——揚岐方會——保寧仁勇

白雲守端——五祖法演——圓悟克勤——

——育王端俗——道場法全——伊菴有權

太平慈勤——佛燈守珣——閑福道寧——

——月菴善果——大洪祖證——月林志觀

——無門慧開——法燈覺

——大慈宗泉——黑谷源空——虛丘紹隆——應

永壽智覺

羅漢守仁——百丈道恒——報慈玄覺

丹霞天然——翠微無學——投子大同——木童

和尚——光義性空——叢山老仁

大顛寶通——三平義忠——木性和尚——馬頰

本空

第三十七祖 雲巖曇成

百岩明哲——稗樹惠省——濃州高沙彌——

——刺史李朝居士——船子德誠——夾山善

會——洛浦元安——京兆臥龍——永安善

靜——洞溪戒定

道吾宗智——石霜慶諸——漸源仲興——

緣清和尚

大光居誨——張拙秀才——九峰道虔——

新羅清院——同安常察——木州吉山

第三十八祖 洞山良价——神山僧密——杏山

監洪——幽溪和尚  
 第三十九祖 雲居道膺——白水本仁——龍牙  
 居遁——九峰普滿——洞山道詮——幽樓  
 道幽——吉州木山——寶蓋山和尚——九  
 峰道玄——青林師虔——石門獻繼——石  
 門惠徹——石門沼遠——道吾契證——白  
 馬遁儒——華嚴休靜——曹山本寂——疎  
 山匡仁——雲泉歸仁——護國守澄  
 欽山文遂——天童威啓——鹿門處真  
 谷隱智儼——谷隱契宗——金峰從志  
 洞山道延——曹山光惠  
 第四十祖 道安同丕——稀山章禪師——杭州  
 佛口——歸宗濬權——水西南臺——楊州  
 豐花——大善慧海——南岳南臺——晉州  
 太梵——玲瓏除音——歸崇懷輝——雲居  
 懷岳——藥山忠彥——永光真禪師——新

菴曇花——天童威傑——崇岳——臥龍  
 祖光——無準師範——圓福法身——雪  
 岩祖欽——東福圓爾——圓覺祖元  
 △運菴普岩——虛室智恩——南浦紹明——  
 大燈明超——關山惠玄  
 △無明慧性——蘭溪道隆——南浦德儉——  
 寂室元光  
 佛照德光——徑山如瑛——天竺法照——靈  
 隱普濟——三寶能仁——談山覺安——  
 波若寺懷鑑  
 △無……範——雪岩祖欽——費隱通容——  
 雪峯互信——黃粟隱元——道者超  
 元——鐵心道印——默菴玄光——鐵  
 眼道光  
 △道者……元——木菴性瑄——即非如一  
 獨昭性圓——慧門如沛——佛國

羅雲泉——雲居山昌——鼎州德山——雲  
 居道閑——朱溪禪師——贛州廣濟  
 第四十一祖 道安觀志——遠州仰山  
 第四十二祖 梁山緣觀  
 第四十三祖 太陽警玄——梁山儼禪師——藥  
 山和昱——羅門德珍  
 第四十四祖 投子義青——興陽清澗——福嚴  
 審承——羅溪顯如——白馬歸喜——乾明  
 機聰——雲門靈雲——雲頂海鵬——大悲  
 禪師  
 第四十五祖 芙蓉道楷——大洪報恩——洞山  
 雲禪師——龍蟠曇廣  
 第四十六祖 丹霞子淳——淨圓法成——寶峯  
 惟照——元易石門——天寧禱補——天寧  
 齊疎——洞山紋禪師——梅山已禪師——  
 鹿門自覺——青州一辨——大明寶——玉

高泉——獨湛瑩——黃粟悅峯——寶  
 茶翁日海  
 △東……爾——永明順空——無關普門——  
 安國以一——無學祖元——高峯顯  
 白——佛德本光——天龍疎石  
 ○南嶽……讓——西域堀多三藏——南陽慧忠  
 龍州法海——遍擔撓了——壽州智通  
 信州智常——永嘉玄覺——婺州  
 玄策——荷澤神會——河北智隍——  
 司空本淨——泗西志徹——洪州法遠  
 吉州志誠



山體——雪巖滿——萬松行秀——大傳高

世則居士——資聖南禪師——普賢善峯

淨固自覺——無明惠經——鼓山永覺

東阜心越

第四十七祖 眞歇清了——天童正覺——大洪

慶預——洪平禪師——善權法智——雪竇

嗣宗

第四十八祖 天童宗珙——龜山義功——興學

北山法通——長蘆妙覺

第四十九祖 雪竇智鑑

第五十祖 天童如淨

日域祖師

第五十一祖 永平道元——無外義遠

第五十二祖 孤雲懷辨——永光詮惠——永光

經豪——曹海和尚——法明了然

第五十三祖 徹通義介——寒巖義尹——寶慶

寂圓

第五十四祖 燈山紹瑾——明峯素哲——祇陀

大智——無外智洪

超山開越——通外義哲——天桂經補——海

翁順補——無德良悟

福州光智——明堂融曠——白峯玄的——月

舟宗胡——肥山道白——德翁良高

第五十五祖 峩山紹碩——太源宗信——梅山

開本——如仲天闍——天桂傳尊

第五十六祖 通幻寂靈——石屋津梁——無端

祖環——實峯良秀——大徹宗介——竹居

正獻——器之爲範

覺隱榮本——鼎庵宗梅——竹翁宗松

東岩善譽——木中圭抱——不盡善策

光山善智——天庵善傲——白翁長傳

呼鑑音膺——分外恩鋪——要山智玄

月庭要傳——不滅湛然——吳雲實音

晦堂義賢——愚谷養道——香林雪點

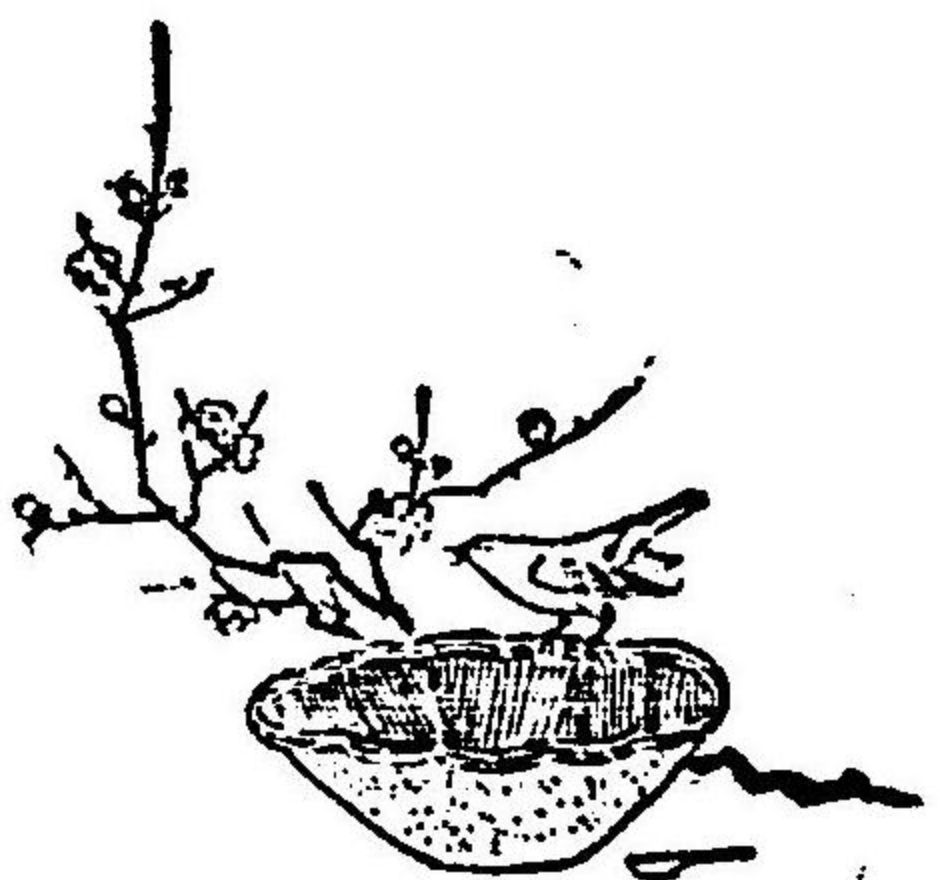
海外靈洲——鳳山玄瑞——智道默音

雷光默心

塔外道見

青原南嶽以下の系統は固より畧系にして審細なりと云ふべからず且く先人の調製せしものに依り茲に概畧を掲ぐるのみ

三國傳燈一覽(丁)



### 從容錄講話例言

◎本書の標題具さには萬松老人、天童覺和尚、頌古を評唱する從容庵錄といふべきもの今は且く其略に從ひしのみ世に靈瑞本と稱するものあり、宏智禪師頌古又は天童覺和尚頌古報恩老人著語と題す今の世に専ら用ひらるゝものは是なり然れども萬松老人の手に成れる示衆および著語を加へたるゆゑ單に頌古とし著語と題するは其當を得ざるに似たり而して又之を單に從容錄と稱するも固より穩當ならず何となれば萬松老人の評唱を省きしものなればなり然るに本書の盛に行はるゝに至りたるは天童頌古の力に依るもの多しと雖も亦以て萬松の手腕に由らずんばあらず是れ茲に從容錄講話と名けたる所以なり

◎蓋し惟ふに萬松の評唱を除き示衆と著語とを存置して從容錄筆削と稱したるは上州茂林寺梵丁和尚の手に成れるものなり然るを常陸安祥寺の太淳和尚これを校訂して單に從容錄と稱す世に雲山藏版といへるもの是なり而して靈瑞本と稱するものは尾州名古屋萬松寺靈瑞和尚の校閱に係るものなりとす

◎謂ゆる萬松老人評唱天童覺和尚頌古從容庵錄といへるものは老人の參徒湛然居士從源なるもの前後九回の懇請を爲し七年にして漸く成れりといへり時に居士歎じて云く其れ片言隻字も咸く指歸あり結欵眼を出して高く今古に冠たり萬世の模楷と爲るに足れり人天に師範となり造化に權衡となる者に非ずんば孰か能く此れに與らん哉予行宮の數友と且夕是書に游泳す大寶山に登り華藏海に入て互珍奇物廣大悉く備れり左に逢て右に遇ひ目富て心快くが如し世間の語言を以て其萬一を形容すべけんやと遂に法弟と謀り之を刊行して世に傳へたり時に明の萬曆丁未の年なりき本錄六卷あり之に訓點を附し本朝にて翻刻せるもの世に行はる

◎碧巖集と本書とは支那日本に於ける禪門唯一の活文字にして此二書に通ぜざるものは未だ以て禪學者と稱するに足らず苟くも禪文學に達せんとするものは必ず此二書の蘊奥に熟達せざるべからず殊に洞上門下に於ては小沙彌に至るまで本書を携帶せざるものなし然るに之が文意と句義を解するの難き久參の禪辭と雖も亦大いに困む所なりとす古來一二の辯解有りと雖も尙是れ難解

難入たるを免れず故に禪學者の之が爲に光陰を徒消すること尠少ならず予の不肖なる之を能く通俗に講話して無造作に心開意解せしむるの筆力に乏しと雖も且く後進の爲に一線路を通じたるのみ

◎抑も予が此書の解義に困められたるは二十餘年來のことにて最初之れが講究に従ひたるは廿三歳の時なりき其の提唱を聞くや耳聾の如く其の之を辯ぜんとするや口啞の如く其の之を味はんとするや恰も蠟を嚼むが如し如何にして之を領會せんかと註疏辯解を見るも鐵壁銀山の足攀づべからざるが如く都て所得なかりき其後再三知識に就て其提唱を聴きたれども尙ほ牆壁の在る有りて祖門の堂奥に達すること能はず因縁ありて禪門に蕪染しながら此宗乘字義に達せざるは恨事の中の一大恨事なり願くは速に心華開發して本地の風光を詠めしめたまへと三寶の聖境に祈誓して遊參夜參に日も亦足らざりき然るに四十一歳に至り初て前日の鐵壁を破り銀山を崩し去りたるの思ひありき其の歡喜や譬ふるに物なし恰も衣内の寶珠を得たるが如し謂ゆる最後の牢關を打破したるものなる乎是に於てか晩學の爲に本書の落草談を著はして三寶の大海

に回向せんと誓ひたり

◎然るに予は三十二歳の時より通佛教唱道の別願を起して日夜文壇布教に全力を傾注するの故を以て禪門の宗乘を提唱するの暇なかりしが止む無き事情に迫り洞門の學術雜誌に主幹たらざるを得ざる事となりたれば是れ好箇の機会なりと思惟し自から發願して本書の講話を起草し月刊の和融誌に掲載し始めたり斯くて三十三則まで該誌に其筆録を載せたりしが或る事情の爲め遂に其主幹を辭すると共に文壇事業は倍々繁雜を極め重大の任務は我身の上には纏はり來りし爲め江湖の要求頻々なるにも拘はらず續稿は一時中絶となりぬ然れども中途にして止むるは予が本願に背くを以て其間殆ど二年遺憾の日月を送りたり

◎然るに明治三十七年の初秋豫州の佛國山に轉住するの止む無きに至り山門整理の爲め且く東都を去りて彼地に錫を轉ずる事となりたれば此機會を利用して深夜靜に本書の續稿に取掛りぬ是に於て乎諸縁を放捨し萬事を休息して一意専心この筆録に勉めたり然れども住持事繁しければ容易に稿を進むる能は

ず依て今は先づ半百則の脱稿を期し且く發願の半邊を成就して去る明治三十二年以來の責を塞く事とせり而して那半邊は近き將來を期し必ず江湖の希望に背かざらんことを誓ふ

◎天資穎邁の人に在りては難解難入なる本書も敢て難解とするに足らざれど予の如き宿業の味劣なる性質の暗愚なる者に至りては一則の公案一頌の解頌と雖も決して容易の業に非ず然れど廣き世間に於ては拙者よりも尙ほ智識の幼弱なる人も多かりければ其れ等後進の爲に慈悲落草自から其の醜を忘れたり先進氣銳の智者宜しく之を諒せよ

◎祖録を解することは人々の識見に依りて一準ならざるは言を待たざるに由り必ずしも予の解頌を以て是とすべきにあらず天桂面山鼎三等諸師の所解各々別なり別なれども宗乘の軌道に外れざる所に亦興味の津々たるものあり故に予は予の見る所を以て之を解したるのみ故に高識の活眼より照らさるゝときは誤謬妄解の點定めて多からん蓋し夫れ本講話および先人の見解を透過して更に越格の高見を立つる人あらば眞に予が仰ぐべきの師表なり予は其人の速

に出頭し來らんことを庶幾ふ

◎世の邪僻に墮する禪學者或は云ふ禪は參すべくして講すべからず古則公案は參すべきものにして講すべきものにあらずと是れ學道の者をして愚暗に誘引するの妄言なるのみ凡そ文字語言あるもの講ぜずんば争てか其理趣を知るべけんや一代藏經是れ文字なり古則公案是れ語言なり正法眼藏是れ文字なり涅槃妙心是れ語言なり即心是佛是れ文字なり非心非佛是れ語言なり講ぜずんばあるべからず講じて講ずべからざる所正に是れ解脱の文字なり參じて參すべからざる所是れ解脱の語言なり理盡き詞窮つて語言を絶すといふと雖も心念思慮の有らん限り文字語言なき能はず文字語言ありと雖も究竟解脱の境界に至らむ乎文字語言の性空なり性空なるが故に終日説て口に過なく終夜書て筆に跡なし何を以てか講ずべからずと謂ふや此古則は佛祖の公案なり佛祖の逸話なり隱語謎語の類にあらず故に天童萬松縱横に之を説話し天桂面山無盡に之を語話す予の之を婆説するもの果して何の過誤かある學道の人知らずんばあるべからざるなり

◎世に或は不立文字教外別傳を謬解して文字を撥斥し學問を排除して専ら默然打坐のみを勤むる者あり是れ人をして邪解愚闇の空坑に墮落せしむるの妄言に過ぎず若し謂ふ所の如くならば三世諸佛の弟子に非ず歷代祖師の雲孫に非ず只是れ空見外道の眷屬なるのみ其者或は有語中の無語なることを知るに似たれども未だ以て無語中の有語なることを解せざるなり本録の講話甚だ沓泥滯水に流るゝの誇りなきにあらざるも本是れ無語中の有語なれば盡言細語悉く是れ第一義天に登るの階梯たらずんばあらず

◎天桂面山等諸師の問解辯註は一も其の本文を掲げず故に本録と註疏との二書を見ざれば示衆本則著語を領解すること能はざるの不便を感せしめたり然るに本講話は其の冠註を省きたるのみにて他は悉く此中に收めたるがゆゑ字々句々の領解に便なるのみならず他の別本を備ふるの要なし其の冠註にある事蹟にして必要欲くべからざるものは悉く講話の中に收めたり且つ著語の如きは漢文を伸べ書となして何人にも容易に讀み得らるゝやうに勤めたり

◎本講話を總振假名附とせざりしは讀者の中根以上なるを思ひてなり其の通俗

を旨とすと雖も本書を繕くほどの人にして振假名を便りにするが如きは殆ど一二もなかるべし只佛書を読みつけざる在家篤信者の爲に讀み癖のある文字にのみ勤めて振假名を施したるなり

◎本書の印刷は嚴密を旨とし再三講者自から之を訂閲したれども或は多少の誤植なきを保しがたし讀者宜しく焉を諒せよ

◎大貧元峯老師は予が慈恩師にして師の東都萬年山青松寺に現董たりし日即ち明治十八年の秋より同曆二十七年の春に至るまで其の巾瓶に侍し親しく提撕を蒙れり尙其巾瓶を辭してより今日に至るも常々師の近傍に在りて時々其の慈誨を辱うしつゝあり是れ予が特に題字を懇請せし所以なり師本年寶壽六十六又四萬年を辭して寺前に閑居せらるゝと雖も元氣益々快活にして年來の布教に精進せられ化緣彌々隆盛なり

◎永平現董性海慈船禪師は本年七十二歳の高齡を以て本書の題字を賜り又總持現董直心淨國禪師は本年八十五歳の寶算を以て同く題字を賜りぬ是れ予が終天萬生の光榮なり特に記して其の厚恩を謝す

維時明治三十八年二月吉祥日

豫州佛國山瑞應幻住 塙外道見沙門謹識



從容錄講話例言(了)

從容錄講話上卷の目次

第一則	世尊陞座の話(說法)	一
第二則	達磨廓然の話(帝王)	三
第三則	東印請祖の話(帝王)	四六
第四則	世尊指地の話(伽藍)	六四
第五則	青原米價の話(問法)	七八
第六則	馬祖白黒の話(祖教)	八七
第七則	藥山陞座の話(說法)	一〇五
第八則	百丈野狐の話(因果)	一一五
第九則	南泉斬猫の話(猫犬)	一三六
第十則	臺山婆子の話(尼女)	一五三
第十一則	雲門兩病の話(法身)	一六七
第十二則	地藏種田の話(田地)	一八七

第十三則	臨濟瞎驢の話(遷化)	一九九
第十四則	廓侍過茶の話(龍甃)	二一七
第十五則	仰山挿鉄の話(田地)	二三二
第十六則	麻谷振錫の話(瓶錫)	二四五
第十七則	法眼毫釐の話(對機)	二五七
第十八則	趙州狗子の話(猫犬)	二六七
第十九則	雲門須彌の話(遊山)	二八七
第二十則	地藏親切の話(悟道)	二九九

從容錄講話上卷の一目次終

# 從容錄講話

(上卷の二)

墻外道見筆錄

天童正覺禪師頌古百則

萬松行秀禪師示衆著語

第一則 世尊陞座の話

## 示衆

示衆云閉門打睡接上上機願鑿頻申曲爲中下那堪曲祿木上弄  
 鬼眼睛有箇傍不肯底出來也怪伊不得

上々根機の人を接待して佛祖の堂奥に引入するには閉門打睡ぢやと云はるゝけ  
 れど、マサカ熟睡大躬て學人を接する人もあるまい、ソコで閉門打睡とは世尊の掩



室や維摩の默然や達磨の面壁を形容したものである。魯祖といふ人は學人が何ぞ問話し來るあれば直に面壁せられたといふ。徳山和尚は吾宗に語句なく一法の人に與ふるなしと云はれ、瑩山和尚は上根の坐禪は諸佛出世の事を語らず、佛祖不傳の妙を悟らす、飢來れば喫飯し、困じ來れば打眠すと云はれた。又佛は止々不須説我法妙難思、唯獨自明了、餘人所不見とも仰せられた。此等はみな閉門打睡の端的である。閉門打睡ではあれど默の時説、無語中の有語で、此中には却々無盡微妙の深味がある。ソコで道元禪師は道本圓通争てか修證を假らん、宗乘自在何ぞ功夫を費さん、況や全體適かに塵埃を出づ、誰か拂拭の手段を假らんと云はれ、六祖大師は本來無一物、何れの處にか塵埃を惹かんと云はれ、圓覺經には衆生本來成佛と云はれ、大智和尚は元來大地に衆生なしと云はれた。又馬鳴大士は當に知るべし一切の法は説くべからず念すべからず、故に名けて真如と爲すと申されたけれども、無住の本より一切の法を建立するといふのであるから、實は閉門打睡の處に甚深微妙な法味がある。花も霜の時が面白い、上士は一決して一切了ず、上々根機の人はこの無爲無言の境界を愛するぢや。

さはあれど盲目千人、暗眼一人の世の中、斯様に高くとまつて澄し込て居る譯にも行かぬから、泥滯水慈、悲落草して、願望頻申の死摸様を爲さなくてはならぬ。有と説き無と説いて、憐兒忘醜の化他門に下らなくてはならぬ。若し佛の極意を云はば拈華陞座、事は済て居る。祖師の眞意を云へば、麻三斤、喫茶去てよいのぢや、けれども中根下根の衆生に對しては、佛も四十九年の間、語言三昧に入らせられ、祖師も亦拈蓮、塵拂、横説縦説せられた。さて願望とは雲門和尚が有時、僧を願視して、望といふた、僧纒かに擬議すれば、咳といふ、ソコで後學の者が、偈を爲つて願望の頌と云ふたと、石門の林間録に記してある。頻は急ぐの義、申は容をのばすこと、これは爲人接衆の手段として、棒を行じ、喝を行じ、或は説き、或は喚ぶなどの摸を爲し、様を爲す事である。

さて此の願望頻申の死摸様ですら、最早第二第三の慈悲落草であるに、何ぞ夫れ、曲祿木上に眼をムギ口を張り、是が鬼眼睛ぢや、爾して凡聖迷悟有無得失の無駄口を利くに堪へらるべきや、如何にしてもこの萬松には堪へられぬ心地がする。萬松は斯様に思ふが、尙この萬松座下は申すに及ばず、天下後世に於て、萬松が斯くいふも

尙是れ多口の阿子無駄口をたたくとて承知せぬ者が出て来るならば此上もなき幸ひぢや決して其者を怪みはいたさぬ却て其人を待ち居るのである待て居ても出て来るものがなければ止むを得ないから此にその古例を示さうと云はぬばかりの意氣込に聞ゆる

本則

舉世尊一日陞座今日不文殊白槌云諦觀法王法法王法如是知  
是行世尊便下座別日再  
心行世尊便下座商量

●舉世尊一日陞座 世尊は十號の一にて釋迦牟尼佛の事ぢや釋迦牟尼佛は一切世間の中に於て最尊最上肩を齊うすべき人がないから之を世尊と崇めたものぢや一口とはある口といふこと陞座とは説法する高座に世尊が坐るばかりなされた事ぢや近來は西洋の流義が這入て佛者も往々立て演説などいたすけれど佛法本來の法式は必ず座講である而も高座の上に坐禪をして説くべきぢや左もな

ければ倚子に腰を掛るといふのが其の規則である故に佛者は成るべく古風を貴ぶが宜いと思ふそれは兎も角陞座は必ず説法の爲ぢやが説法とて舌頭をもて説き立てるばかりが説法ではない身業の説法口業の説法意業の説法といふ事がある即ち今日の説法は身意二業の説法とでも申すべきぢやサア此處ぢや世尊が高座の上で端坐黙然として八萬の大衆を凝視せられた當時はドンなものであらうそれは永平祖師の仰せられた如くもし人一時なりといふとも三業に佛印を標し三昧に端坐するとき遍法界みな佛印となり盡虚空悉く悟りとなるゆゑに諸佛如来をして本地の法樂を増し覺道の莊嚴を新にす及び十方法界三途六道の群類みな俱に一時に身心明淨にして大解脱地を證し本來の面目現ずるとき諸法みな正覺を證會し萬物ともに佛身を使用してすみやかに證會の邊際を一超じて覺樹王に端坐し一時に無等々の大法輪を轉じ究竟無爲の深般若を開演すとある今もその如く佛は一言だも口を開きたまはねど聞く耳を以て聞くときは究竟無爲の深般若を開演し無等々の大法輪を轉じて御座あるのぢや是は何も昔しばかりではないその聞音は今尙ほ耳邊にある様に思ふが諸仁者は何と聞かれましたかナ

▲今日便リヲ著ケズ 今日ハ斯クも有り難キ説法であるに其時の大衆は悉くみな無眼子でドウもその好便宜を得なかつたかと此の萬松は考へる惜い事であつた然るに天童和尚が再び世尊に代りこの有り難い聖默然を紹介せられたのぢや萬松座下の者は申すまでもなき事ぢやが天下の諸仁者はドウぢや活眼を開いて世尊陞座の眞面目を徹見するがよい今日の説法を聴くがよい

●文殊白槌云……

たが其中の一人なる文殊師利菩薩ばかりは世尊陞座の當躰を見て取られ聞いて取られ間に髪を容れずカツチリと槌を打ち鳴らし在座の面々へ告報せらるゝやう三世十方番々出世度生せらるゝ大覺法王の説法を諦観するに何れも皆この通りである現在釋迦牟尼法王の説法も亦この通りであるから更に疑ひを生ずるな世尊極意の所はこの陞座默然の當躰にあるとてまたカツツと打たれたれば世尊がスーッと高座より下られた

▲知ス他ハ是レ何ノ心行ゾ

萬松著語して諸人ドウぢや文殊大士の心術が分つたかナドウぞ文殊の様な耳目を具して貰ひたいものぢや篤と文殊の心術を

穿索して見よと穿索して見れば大いに得る所がある

●世尊便下座

流石は七佛の師ともいふべき程の文殊大士であるから世尊の心術をテツキリと見て取られ法王法如是とキツパリ白槌せられたマツカ文殊と始めから申合せをして置かれたのでもあるまい申合せの狂言ならばチツトも面白くことはなければども八萬の大衆は定めしイツもの通り老婆心切の説法があるであらうと思つて居た所へ世尊が不意に何とも口を開かれなかつたそれを文殊大士が氣を利かして間に髪を容れず直に白槌報告せられたその手際が如何にも面白いのである若し文殊が居なかつたならば世尊も途方にくれらるゝて存つたらうけれど其處は凡智を以て推測せらるゝものではない佛の説法はおのづと此んなものぢやと信知すればそれで宜い

▲別日ニ再ビ商量セン

イヤ斯様に一段落がついて見ればどの様に商量して見度と思つても仕方がないからそは他日親しく商量するより手段はない併し何を商量するのであらうかそは山雲海月なか／＼長からう

頌云

一段眞風見也麼特莫教入眼 綿綿化母理機梭了差 織成古綿  
含春象若拙無 奈東君漏泄何節陰無曲狗

●一段眞風見也麼 以下は頌と申して梵語では伽陀といひ唐では偈とも頌ともいふ此れは讚歎の意義になる天童正覺禪師が頌文を作りて本則を讚美せらるゝので禪師の巧妙なる手腕は空前絶後と稱すべきであるが予の未熟なる文筆と宗乗とは逆も作者千萬分の一だも書き顯はすことが出来ぬであらうけれど仁に當つて他に譲り難い  
さて一段の眞風とは何の事であらうか此れは無論世尊陞座の正當端坐默然の當躰無言無說無示無識の脱躰露現せる眞實如々の法である眞風は少しも虛妄のなきフリアイ徧界不藏の面目千聖も萬祖も説盡することが出来ぬのであるが諸人これを見て取たか何うぢや

▲眼ニ飄入セシムルコト莫シ特地ニ出ヅルコト還テ難シ

天童が見るやと云はれたからとて別に見るべきものがあると思ふたならば最早一種の見病となるぞ若し一法でもヒヨツと眼中に飄入したならば何うして容易に出すことは出来ぬぞ古語にも一法を見ざれば如來正に名けて觀自在と爲すところある其處が即ち無見取心是である

●綿綿化母理機梭 綿綿とは相續不斷の貌化母とは能生の義である機はハタのこと梭はヲサとて右から左へと織成すところの器械である化母の機織姫が間斷なく梭を左右の手にもて一反の錦を織りつゝある一段は一反の義眞風は有りの儘の模様といふほどの文意である

底意は世尊陞座文殊白槌の端的は聖默聖說即ち身業の説法である眞如實相徧界不藏の眞模様は雨竹風聲柳綠花紅山高水長無始無終に綿々と相續不斷に造化の機織姫が從晝至夜萬象森羅を織成して居るではないか何れの所に迷悟情量の音沙汰がある衆生本來成佛ではないか法華經に諸法從本來常自寂滅相と説き華嚴經に刹々衆生說三世一切説と述べさせられ彌陀經に水鳥樹林念佛念法とあるも

皆綿々たる一段の眞風である、今時の批評學者は萬有神教ぢやからと云ふであらう、去りては又一心の化母が一切唯心造て鬼も佛も時々刻々に造り出して、出息入息念々不斷に如是經を轉じ、如是相を現じつゝある

▲參差蹉了絡ヲ交フ 字彙に十縷を緒と爲すとある、成る程天童の言はるゝ通り參差とタガイチガイに機梭を理めてをる、その文彩その模様は綿々と糸を交へた丈あつて如何にも立派なものぢや、世尊の陞座下座出息入息は一々皆現成公案である、豈世尊のみならんや人々も亦復その通り

●織成古錦含春象 以上は世尊の陞座を頌し以下は文殊の白槿を頌じられたのである、世尊の陞座は立派に織成した古地の錦とも形容すべきほどのもので、其處に得も云はれぬ春の象を含んでをる、併し春の象として是れぞといふほどの見るべきものはないけれど、柳櫻の中にチャンと春芽を含んでをる如く、見えぬ所を見て取つたのが文殊の智眼である、一心に十界を含める如く、陞座默然の當體にはチャンと萬象森羅を含んでをる、謂ゆる默の時説で、無言無説の深般若を開演せられてある

▲大巧ハ拙ノ如シ 桃紅李白古錦春象と織成したのは大いに巧みな様ではあるが、さて其が細工目の見透されぬ所は拙のやうである、拙のやうな所にまた無限の妙趣味が含まれてある

●無奈東君漏泄何 東君とは青帝とも、東皇とも申して春の神といふこと、春の神として別に人格的の者があるといふのではない、局り春陽の氣候を形容したまでのこと、時節が到來すると、獨手に花が咲き芽を吹く、古歌に△染出す人はなければ、春來れば柳は緑り花は紅るそれを漏泄と申したのである、春暖の氣候になれば、如何に咲かすまいと思つてもおのづと咲き、吹かすまいと思つてもおのづと草木の芽が吹き出づる、文殊が諦觀法王法王法法如是と口を開かれたのは、夫れと寸毫も差はぬ春象を含める古錦、即ち世尊陞座默然の當體は、不變眞如とも、根本智とも申すべきもの、任運無功用に漏泄せし東君の白槿文殊の振舞は、隨緣眞如とも、後得智とも申すべきものである、一は聖默一は聖説默の時説、説の時默これて公案圓明である、兩手完全である、法王法如是まことに面白い

▲陽陰曲テ狗フ無シ節氣相饒サズ 一陰一陽晝往寒來ほど公平無私なるも

のではない、四時の氣節の間に髪を容れぬ、お説の如く文殊は作家の漢であるから間に髪を容れず自槌せられた、若し文殊の自槌が無かつたならば、世尊も嘆かし手持無沙汰であつたかも知れぬ

### 第二則 達磨廓然の話

#### 示衆

示衆云、卞和三獻未、免遭刑、夜光投入、鮮不按劔、卒容無卒、主宜假、不宜眞、差珍異寶、用不著死、猫兒頭拈出看。

さて達磨大師が禪門の開祖であるといふことは誰れ知らぬ者もない事ぢやが、ドウして達磨が禪門の開祖であるかと疑ふ人は甚だ稀ぢや、何故かといふに、若し達磨が禪門の開祖であるならば、その本師たる般若多羅尊者も禪祖であると云はなくてはならぬ、達磨は付法藏の第二十八祖、般若多羅は同じく二十七祖である、さればその前々の二十六人もみな禪祖と云はなくてはならぬのみならず、第一釋迦大

師が禪祖の根本であると云はなくてはならぬ、然るに釋迦や迦葉や馬鳴や龍樹を禪祖の様に思はないで、達磨大師のみを禪祖の様に思ひ込んだのは、チト不審を入れて見なくてはならぬ、譯ぢや、然しながら此の議論は別の問題として、來日に付在すると致さう、要するに達磨が摩騰法蘭の如く始めて支那へ來られたことならば、彼れの如く四十二章經を見た様なものでも翻譯し諄々として化導し、最後に本性をあらはし、直指單傳の佛法を弘通せられたであらうけれど、已に達磨の渡來せられた時には、名相の佛法が充分に弘まり、武帝の様な教相熱心の人が出來てある位ぢやに依て、設ひ顯教にもせよ、密教にもせよ、教相佛法を弘通するの必要がなかつたのである、ソコで其の當時は支那と天竺との消息もよく分り、佛法がドゥ云ふ正合に發達して居たといふ位なことは、よく／＼知れ切つて居たに相違はない、左もなくして初めから達磨の様な手段を取られて、たまつた者ではない、あれほど佛法が弘まり人物が出來て居て、第一武帝に開眼をして遣うと意氣込んで來られたのぢやけれども、開眼が出來なかつたので、達磨も實は武帝を買ひ被ぶられたのである、之を今の世に譬へて見るに、世間の學者紳士が偶々佛法を聞かんことを求むるに

當り彼等が齒には立たぬ様な六ヶ敷いものを與へて嚙ましめんとするに、世間學では一應の眼が開けて居るにもせよ、佛法には甚だ幼稚にして、まだ齒が生へて居ないにより、嚙み砕くことも吞み込むことも出来ぬから、一返か二返かて閉口して、逆も佛法は分らぬとて止める様なものぢや、佛法は應病與藥、臨機應變であるから、其人相應なる法味を與へなくてはならぬ、然るに折角武帝を濟度致さうと意氣込て來られたけれども、方木間孔に投ぜず武帝を見損はれ、仕方がないから、魏國の嵩山に引籠り日々坐禪をして居られ、神光といふ人が達磨の眞珠なることを見て取られ、ヤツと西來の目的を達せられたのである。

ソコで此の示衆は達磨と武帝との出會を譬喩に事寄せて拈提せられたので、その拈提者は支那萬松山の行秀禪師である、禪師は非凡な人で、その拈提が一々皆非凡である。

●卞和三獻未免遭刑

とは昔し支那國に卞和といふ人があつた、ある時荆山の崑岡谷に於て璞を拾ひ、これを楚の靈王に獻じた、璞とは明珠の含まれてある石の事ぢや、スルト靈王が之を見てこれは凡石である、民の分際として上を僞るとは

不埒千萬な奴ぢやとて片足の筋を削られた、卞和は思ふに、これは必ず明珠を含まれてある璞石なるに相違なきも、之を見て取る眼がないから仕方がないと、時節の到るを待つて居た、其後間もなく武王か天子の位に即かれたから、武王ならば見て取る眼があるであらうと思ひ、再び之を獻上いたした、スルト又武王も靈王と同じく、見て取る眼がなかつたと見え、これは凡石ぢや、凡石を以て璞石と僞はるは甚だ無禮な奴ぢやとて、また片足の筋を削られた、卞和は忠節を以て獻納するのであるけれど、その誠意が届かぬから仕方がない。

其後文王が即位せられし時、卞和氏が璞石を抱き荆山の下に於て哭いて居るといふ事が上聞に達した、時に文王が之を召出し、其方は何故荆山の下に於て痛哭して居るのであるぞと問はれたれば、卞和の申しけるやう、イヤ私は靈王や武王に足を削られたのを怨む譯では御座らぬが、この眞玉を以て凡石と爲し、臣の忠實を以て濫りに慢事とせられたのが悔しくてなりませぬと答へた、ソコで文王も卞和ほどの眼はなかつたものと見え、直に以て璞石とは信じられず、半信半疑を以て、兎に角汝が左様にいふならば、試みに剖らして見やうとて、その能者をして剖解せしめた。

れば果して眞玉であつたといふ事ぢや、若し眞玉でなかつたならば首ぐらゐ刎ねらるゝであつたかも知れぬ、ソコで卞和と三比獻じて未だ刑に遣ふことを免かれずと拈じられた、後來趙氏連城壁山來傳天下といふ八釜しい者になつた、其事は史記の蘭相如の傳に委しく書き記してある、此の事は他日趙州狗子の話の講説をする時、叮嚀にお話し申すであらうが、兎に角秦王が一箇の壁と十五城とを交換した位ぢやから實に廣大無邊なもぢや

●夜光投人鮮不按劍

夜光とは夜光珠とて燈光の如く眞黒闇にてもピカピカと照り輝くといふ事ぢや、古語に、明月ノ珠、夜光ノ璧、暗ヲ以テ人ニ道路ニ投ズレバ、劍ヲ按ジテ相呵ザル者莫シ、何トナレバ、因無フシテ前ニ至レバ也とある、眞黒がりの夜、出し抜けにヒヨイと夜光珠を人の眼の前に放擲出すときは、大抵な者が妖怪であるかと、ビックリして劍を持たる者は劍に手を懸けるであらう、其他護身の具を持たる者はそれに必ず手を掛けるに相違はなからう、若し夜光珠なることを疑はなかつたならば、劍に手を掛ける様なこともなからうけれど、知らなければ仕方がない、天桂の辨に、隋城ノ斷蛇ハ、祝元暢ガ爲ニ夜光ノ珠ヲ投ジ恩ニ報ヒタレドモ

思ヒガク無イコトレバ、劍ヲ按ジテ疑ハレタ如ク、今日ノ達磨モ、廓然無聖ノ不識ノ無功德ノト、兩回三度叮嚀ヲ盡サレタレバ、趙璧、夜光ニモマサツタ無價ノ寶珠ナレドモ、無知盲昧ナル武帝ニ出逢テ對朕者ハ、誰杯ト難題ヲシイ、挨拶ニ逢タハ、卞和ガ刑ニ逢ヒ、斷蛇ガ劍ヲ按ゼラレタト、丁度一般ジャとある

なるほど左様ぢや、靈王、武王文王などは眞珠を見るの眼がなかつたから、武帝が達磨を見るの眼がなかつたと同様ぢや、又卞和が璞を抱いて荆山の下に哭して居たのは、廓然無聖、不識、無功德の眞玉を獻じたれども、武帝の嘉納がないから止むを得ず、魏の少林山に寓居し、この無價の眞珠を見て取る眼のないのは、残念な事ぢやと心潜かに痛哭して居られたのと同様ぢやといふ意味である

又達磨の廓然無聖は、明月、夜光の眞玉なれども、武帝の如き未だ第一義天の日月に照されざる眞黒闇を歩いて居る人の面前に思ひがけもなくヒヨット投げ出された者ぢやに依て、武帝が驚愕して、睨に對する者は誰と劍を按せられたのである

●卒客無卒主、宜假不宜眞

卒客とは達磨のことよ、卒客とは倉卒な客人といふ事ぢや、これは古語に、有倉卒客無倉卒主とある、倉卒な客とは思ひ掛けもなく迂



ツかりして居る所へヒヨコツト俄かに入込んで来た客人の事である。卒主とは倉卒な主人といふ事ぢや、此んなお客の来た時に二汁五菜の御馳走を並ぶる様な手ぬるい事はいらぬ、即席料理でアツサリと待遇すればそれで宜い、然るに浮遊ばかり立派に飾り立てるものぢやに依て、卒客は退屈して直に忌味を生じ、感觸々々して居る間に歸つて仕舞やうなこともある。

達磨の様な卒客の来た時には、夫れ相應の挨拶を爲なければならぬ、然るに東譚第一義はドンなもので御座らうか、寺を建て僧尼を供養いたしたが、その功德はドンなもので御座りませうかと云ふ様な、二汁五菜の献立ばかりを飾り立て居るものぢやに依て、達磨も此んな主人と相手になつて談話をしては居られぬ、馬鹿く敷いと思つて、梁國を去り、魏國へ往かれたのである、それをば卒客に卒主なしと萬松が歎かれたのである、謂ゆる卒主とはドンなものであらう、達磨が滅に垂んとし多くの門人を集め、各々所見を呈露せよと云はれたとき、各々所見を述べた最後に、可神光大師が一言も述べず、只三拜してツ、ト立たれたれば、達磨が其方は我が髓を得たぞと申された、これが卒客に卒主と云ふやうな譯のものである、然るに武帝

と達磨とは九切方角が違つて居るから卒客に卒主なしぢや

ソコで武帝の様なものは假に宜うして眞に宜しからず、三乘一乘の方便門をば眞面目に信じて、これ程有難いものはないと思ひ切つて居る、假ばかりぢやから權教といふことサ、然らば此に眞といふは實教のことかといふに、その實教といふも詮じ詰めて見れば、矢張方便門に過ぎない、故に今眞といふは直指單傳拈華微笑の當躰である、この當躰が廓然無聖とも不識無功德とも唱へられたので、麻三斤乾屎橛、相樹子喫茶去、喫粥了、三十棒ともあらはれたのである、然るに武帝はその廓然無聖、不識無功德の眞實義を會得しなかつたから、眞に宜しからずと申されたのである。

●差珍異寶用不著 夫れ眞に宜しからぬから、武帝を見た様な、吾な武帝に限つたことではない、武帝の様に教相の言句や名相の佛法に執著して居る無眼子は、この眞實無價の佛乘單傳直指の法門なる差珍異寶をば用不著逆もく用ゐること、は出来ぬであらう、世間並の珍寶ならば誰にも用ゐらるゝけれど、並み外れの異寶であるから用ゐることを知らぬ。

●死猫兒頭拈出看 用ふることが出来ねば死んだ猫兒の頭を見た様なもの

ぢや併し死猫兒頭には直段が附かぬから却て無價の寶珠であるかも知れぬ法華經の提婆品に八歳の龍女が佛に珠を献じたとあるその珠の價は三千大千世界に同じとあるから趙氏連城の壁と比べ物にはならぬ趙壁は十五城と交易したのであるから價が定まつたけれど三千大千世界とあるからには殆んど無價と申さなくてはならぬ遠磨の廓然無聖は死猫兒頭と同じく無價の寶珠であるある時一僧が曹山和尚に向ひ世間何物か最も貴きやと問ひたれば山の答へに死猫兒頭と申された死猫兒頭はドウして貴う御座るかと問ひ詰めたれば人の價を著る無しと答へられた事がある表面から見れば何でもない話しの様なれどこの言中に響きあることを知らなければならぬ教外別傳の一句言外領畧の宗旨は三乗とも一乗とも顯教とも密教とも價が附かぬから死猫兒頭である廓然無聖不識人者活眼を開いて看よとの序分である

### 本 則

舉梁武帝問達磨大師不且起來如何是聖諦第一義且向第磨云  
廓然無聖剗心帝云對朕者誰鼻孔裏磨云不識見帝不契方木  
遂渡江至小林面壁九年家無滯

●舉梁武帝問達磨大師　この九字は正覺禪師が天下の人々に告げらるゝところの呼出してあるこの武帝諱は衍字は叔達といふ人支那の傳記は何れも奇怪な事が書いてあるが梁書の中に武帝の事を記して衍の母の張氏は菖蒲に花を生ずるを見たが傍人は之を見ざりき其母この花を吞て衍を生む生れて異光あり狀貌殊特兒たりし時能く空を踏て行く居る所の室中には常に雲氣あり長じて英達文學あり和帝の時梁公に封ぜらる在位四十八年壽八十六とあるから何れ暗君てはなかつたものと見える此時は佛法が支那に渡つてから四百四五十年にもなるものぢやに依て教相佛法だけは十分に弘まつて居たので印度より續々三藏法師が渡來し支那にも高僧大德が輩出して名相の佛教は却々盛んであつたものと見えるソコで武帝も深く佛法を崇信し自から袈裟を搭けて放光般若經涅槃經など

を講釋せられ、天華亂墜して大地が黄金に變じた様な奇瑞もあり、施餓鬼法會、盂蘭盆供の法なども、この武帝から始まつたと申す事ぢや、殊にまた天下に詔を下して多くの寺をも建てさせ、多くの人に度牒を賜うて佛門に入らしめられた。斯程の人であるから、世人が之を佛心天子と申したとある。この武帝の普通八年は即ち大通元年、此年改元になつたぢや、その九月廿一日に達磨大師が南天竺より支那の廣州に着船せられ、廣州の刺史蕭昂といふ者に始めて面會せられた。時に蕭昂が印度僧の達磨といへる豪傑らしい物凄いな坊様が参りましたと武帝に奏上いたしたれば、武帝がその上表を覽て大いに欣悦せられ、それは珍らしいお客ぢや、兎に角まあ禁裏へ迎請して珍談を聞き度いものぢやと、使節に詔をたまひ、大師を禁裏へ聘請し、武帝に面會せられたるが、十月の一日であつた。武帝は前に申した通り非常な佛學者ではあるけれど、佛法の本國より傳道師として態々渡來せられた人でもあり、且つ年配も百二十歳からの高齡であり、繪にも書いてある通り鬚髮茫茫として一見凡僧ならぬ風格に驚き、これはドゥッして却々容易ならぬ聖僧であるとして十二分に敬意を表し、あらゆる山海の珍味を盡して供養し、且つ來意を問はれたるに、達磨

の仰せけるやう、此方は佛世尊より二十八代の嫡嗣で御座るが、この支那國には是れまで佛語のみ傳はりて、未だ佛心を傳へた者が無い様に存するに依り、我師般若多羅の命に依りて、三歳の愛き年月を費し、波濤十萬里を航りし漸くまあ無事に此土へ着船いたしたとは傳記に書き記してなければ、多分此んな意味の挨拶があつたらうと考へられる。ソコで武帝も佛法の天狗で是れまで胸中に疑問はあつたれど、尊を屈して自から聞く程の師もなかつたから、我が師と仰ぐは此人であるぞと、充分に敬意を表し、言語を卑うして、色々從前の疑問を問詰せられたが、其中で傳記に書き留めてあるのは只一二である。されば今の本則にある問答を爲すの始めに斯様な問答があつたと傳へてある。

朕即位以來、寺ヲ造リ、經ヲ寫シ、僧ヲ度シ、メルコト勝テ、紀ス可カラス、何ノ功德カ有ル

佛心天子とも云はるゝ位な人であるから、造寺寫經の功德が分らぬこともあるまい。何故かといふに、其事はお經の中に委しく説いてある。説いてあるから、是は結構な事ぢや、功德になると信じたから、無數の造寺寫經度僧を致されたのである。然る

に殊更此事を擧て問ふた武帝の心事は何だか底黒い所があるやうぢや併しその  
 功德がも經には説いてあるけれど實際ドウであらうかと半信半疑の點が有たか  
 も知れぬ或はまた達磨がドンな答へをするであらうかと多少は試験して見る心  
 根もあつたらう、兎に角武帝は造寺寫經度僧などの佛事を以て、此上もなき佛法の  
 功德と思ひ、多少は自慢の心もあり、旁々以てそれを誇り顔に問はれたものと見え  
 る、ソコで達磨は武帝の一言でその五臟六腑を見て取り、何も知らぬ世人は佛心天  
 子と崇めて居る様子ぢやけれど、未だ佛心は夢にだも明めて居ないはといふ事が  
 直に念頭に浮んだから、これは一ツ濟度しなればならぬ眞箇の佛心印を知らせ  
 て遣らなければならぬと思はれたものぢやから

磨曰ク並ニ功德無シ

と劈頭第一に武帝の膽玉を抜き取られた時に武帝は達磨の一言下に於て多年養  
 ひ得たる膽玉を引抜かれたものぢやに依て愕然仰天し、イヤこの坊様は飛でもな  
 い事をいふ、怪しからぬ断見であるとなマゲこれは一本打込まねばならぬと思ひ  
 帝曰ク何ヲ以テカ功德無キ

と其聲に應じて問ひ詰められた達磨は武帝の磨つた膽玉を抜き取て新しい膽玉  
 を入替へてやる積りであるから間に髪を容れず、その無功德なる所以を左に

磨曰ク此ハ但タ人天ノ小果ニシテ有漏ノ因ナルノミ、影ノ形ニ随フガ如ク、有リ

ト雖モ實ニ非ズ

イヤサ九切功德が無いと申すのではない、有りはすれどもそれは有限の功德にし  
 て無限の功德ではない、造寺寫經も佛説であるから虚妄と申す譯ではないけれど  
 それは佛が小機の衆生の爲めに三界有漏の福報を説かせられたので、權教の方便  
 門といふもので御座る、即ち人間天上に生れて暫時の福樂を得る世間有漏の小因  
 小果にして佛果菩提に至る出世間無漏の大因大果の法とは天地雲泥の相違て御  
 座る譬へば影の形に随ひ響の聲に應ずる様なもので、果報が有りはすれども眞實  
 のものでは御座らぬ、永嘉の玄覺大師は達磨の佛心印を證してのち、その證道歌に  
 於て、住相の布施は生天の福、猶ほ箭を仰いで虚空を射るが如し、勢力盡きぬれば箭  
 却つて墮つ、來生の不如意を招き得ん争てか如かん、無爲實相の門とて達磨門下の  
 宗風を顯揚せられたと斯様に扣き付けられてはドウあつても然らば眞の功德無

限の功德は如何様なもので御座るかと問はずには居られぬから

帝曰ク如何カ是レ眞ノ功德ナル磨曰ク淨智妙圓ノ體ハ自ツカラ空寂ナリ是クノ如キノ功德ハ世ヲ以テ求メラレサルナリ

と左様で御座る陛下若し佛法眞實の功德を求めんと思召さば先づ人天有漏の福因を修するを止め淨智妙圓なる佛性の本體を徹見し空寂無相なる無爲實相の法門に入て御修行なさるが肝要で御座る是くの如き眞實無限の大功德は逆も世間有漏の福因を以て求め得らるゝものでは御座らぬとて武帝を導いて直指論的の大道に踏入りしめんとその赤心を吐露せられたけれども惜しい哉武帝は未だ根機が其處に至らぬから聲の如く啞の如く達磨の親言が一向胸に落入らぬ如何か是れ眞の功德とまでは打込て見たけれど從來會て夢にだも聞いたことのない説法であるから小學の兒童が大學の科程を聞く様なもので何の事だか風波離分らぬソコで萬松老人が著語して申された

▲清旦ニ起キ來ツテ會テ市ニ利アラヌ 達磨は賣手武帝は買手商人が朝ばらから早起きして市に代物を擔ぎ出しドツか善きお客が來て賣物を買うて呉れ

いば宜いがと待構へて居る所へ懐の淋しいお客が何ぞ善き代物を買度いものぢやと思つて出掛けて見れば幸ひに商人が出て來たから何ぞ善き品物を持て來たかとその商人に出會てドウぢやな己れは此んな品を以て居るが、前直段をつけて見て呉れといふたれば商人が一言下に二足三文の直段をつけ其んな物は一向に役に立たぬとソコで買手が商人の代物の直段を問ふたればステキもない高いことを云ふた時に買手は懐が淋しいから是は逆も手に合はぬと思つて賣手の相談を止めた様なもので商量は爲て見た様なもの、賣買の相談が出来ぬから双方俱に得る所がない得る所がないから利益にならぬ様なもので武帝が買手になり達磨が賣手になつて摺た揉だと商量はして見たけれどもドウも武帝の懐が淋しいものぢやに依つて達磨持參の佛性の明珠を買取ることが出来なかつた其上に人天有漏の魚目を留めて眞珠と誤まつて居たところを達磨の爲めに看破せられ散々に冷かされた武帝の方に於ても得る所がなく達磨の方に於ても得る所がなかつたから市に利あらずと評された流石は萬松老人ぢやこれは却々穿つた評語で趣味津々の所がある

●如何是聖諦第一義  
 ソコで武帝も茫然自失馬鹿が鐵砲を放した様な面附であつたかと思はる、其時帝が思ふに是れ切て問答を止めても餘り興味がないから今一ツ問端を發して見やう、最う一發放して見やうぢやが、この老僧は却々以て答話の句調が氣高いから、逆も普通一般の問端では行くまいに依て佛法結局の第一義諦を持出したら宜からうとてこの問端を開かれた問意は聖人の諦らめられた第一義の所はどういふもので御座る、この問語は餘程敬意を表したものでちや、貴下は西天廿八代付法藏の祖師であれば、今の世界に肩を齊うする者なき聖僧であるかと存するが、その貴僧の諦了せられてある第一義の佛法は如何なるものであるか、その蘊奧極意の所を承はり度いもので御座るとの事ぢや  
 且く教相に依らば、聖人所證の境を聖諦とも第一義諦ともいふ、又眞諦を第一義とし、俗諦を第二義ともいふ、眞諦の所には一法をも立せず、俗諦の所には萬法を立するのである、或は眞俗不二なるを中諦とし第一義とすることもある、この非眞非俗の中道が教家の極則極妙の所である、故にこの極妙對玄の處を拈じて達磨に問はれたのである

されど是くの如く言端語端に涉りて聖凡の沙汰をするのは最早第一義でないから萬松が著語して  
 ▲且ク第二頭ニ向ツテ問フ と申された、已に夫れ武帝の問端が第二義門頭であるから、達磨は更に一頭地を超え、この閃電光中に向つて一線路を通じ、武帝をして萬仞懸崖の處より蹴落された  
 ●磨曰廓然無聖 イヤ武帝どの、迷悟凡聖の音沙汰あるは第二義門頭の事に對待の法で御座る、第一義絕對の處は廓然とホガヲカにして、その聖人といふものすら有りは致しませぬぞや、已にその聖人が無いのであるから、その聖人の諦めた法のあらう筈はないとて、法の本法は本と無法なることを示された、この無法の法が諸法の本源絕對第一義の處である、ソコで萬松が著語して  
 ▲劈腹剗心 イヤ早や達磨は武帝の爲めに腹を劈き心を剗つての婆心片々ぢやと申された  
 達磨は斯くも眞情を盡して腹一杯の處を吐露せらるれども、武帝は達磨の答へられた眞意が分らぬものぢやに依て

●帝云對朕者誰  
 イヤ貴僧は無聖ぢやと云はるゝけれど現に此方に對面して居る其許は何人であらう即ちその第一義を諦めた聖人では御座らぬかと下らぬ理屈を云ひかけた武帝は實に狂狗土塊を逐ふともいふべきである又指を標して月と作すともいふべきであらう土塊に噛みついたり天上の月を見ずに指に目をつけたからとて何の役にも立たぬ何故なれば只達磨の語尾に付き廻つて言外領畧の宗旨を知らぬからである

▲鼻孔裏ニ牙ヲ認ム  
 牙は必ず口中にあるべきものを鼻の孔の中にあると思ふは九切り方角外れの考へぢや言を承けては須らく宗を會すべしであるから他の言葉尻に付き纏ふたならば逆も廓然無聖の第一義諦を會する事は出来ぬ武帝は他の答語を會せず何處へまでも語尾に付きまはるから更に慈悲落草し武帝の初問に答へて

●磨云不識  
 と武帝が餘りに下らぬことをいふから更に一棒頭を與へてイヤ最う陛下とは話しが合はぬ不識識りませんと刻ねつけられた様にも聞ゆるが又廓然無聖第一義の當體は無言無説無示無識にして諸の問答を離るゝと云はれ

た様にも聞ゆる、兎に角この不識と云はれた言中には無限の意味が含まれてある、ソコで萬松が著語して

▲腦後ニ腮ヲ見ル  
 と申された腦は腦髓、腮はアギトと訓するので古語に、腦後に腮を見れば與に往來すること莫れといふこともあり、腦後に腮を見れば人觸犯し難しともあつて腦後に腮を見た様な骨組のある人は油斷がならぬから餘り近付かぬ様にせよといふ事がある、それを萬松が達磨に用ゐてイヤどうも達磨が識らないと云はれた言葉は、腦後の腮を見た様で何だかこ氣味が惡いやうぢや

●帝不契  
 ドウしても武帝と達磨とは拘子定規で、その所見が違つて居るか、らピッタリと契合しない、ドウも提燈と釣鐘との様なもので釣合がわるい、始めから終りに至るまで話しが合はぬ、ソコで萬松は著語して

▲方木ハ四角窟ニ入ラス  
 なるほど契はぬも尤も千萬ぢや武帝が教相屈執の方木ハ四角窟廓然の圓窟に(九孔)陥り込む筈はないと申された

●遂渡江至少林面壁九年  
 因縁の熟せぬといふものは仕方のないものぢや、武帝も徒らに問端を發せられたのではなく、達磨も武帝をなぶりに來られたので

はない武帝もドウにかして佛法の極意が知り度いと思ひ達磨もドウぞ佛心印を傳へ度いと思はれたけれど時節因縁が到來しなかつたからドウく梁の國を去り揚子江を渡つて魏の國の嵩山少林寺に至つて九年の間面壁打坐して心印傳授の時節を待たれた後に慧可大師を得て心印を傳授せられた著語に

▲家ニ滞貨無ケレバ富マズ 家に財貨を留めて置けばこそ富貴になるそれをドウシくと運び出すときは貧乏になる如く梁國に於ても魏國に於ても餘り口を開かず黙つて居られたのは何れ子孫を富ます積りであつたものと見えると申されたのであるが如何にも左様ぢや達磨は餘り説法せられなかつたけれど黙は雷の加くてその子孫が大唐四百餘州に廣がり日本六十餘州の津々浦々までも廣がつて末代の今日に至るまで達磨の門風が隆んである

さて今の本則には餘計な事であるが本則に因んで一言申し置きたい梁の武帝は達磨の去て後寶誌和尚に向ひあれは全鉢ドンな坊様であつたらうなと問はれたれば誌公の云く陛下還て此人を識るや否や帝曰く識らず誌公云く此は是れ觀音大士が佛心印を傳へたまひしなりと時に帝は大いに之を悔む使者を發して引

戻さんとせられたけれども最早劍去つて船を刻む様なものソコで武帝は非常に達磨を追憶し自から碑文を撰して(原漢文)

嗟呼之ニ見ユレドモ見エズ之ニ逢ヘドモ逢ハズ今モ古モ之ヲ悔井之ヲ恨ム朕ハ一个ノ凡夫ナリト雖敢テ之ヲ後ニ師トス

と申された此の碑文には無限の意味が含まれてある武帝の赤心片々である復次に讀して(原漢文)

心有ナレバ曠劫凡夫ニ滞リ心無ナレバ刹那に妙覺に登ル

と申されたこれは武帝と達磨との境界を對比して達磨大師の廓然無聖不識の處を讚歎せられたのである且く道へ天下の諸人者は有心であるか無心であるか凡夫であるか聖人であるかこの凡聖迷悟の範圍を超脱して廓然無聖の第一義天に逍遙するのが衲僧家の本分にして參禪學道の端的である

頌云

廓然無聖 一廻飲水 來機逕庭 而赤不得 非犯鼻而揮斤 好手手中



失不迴頭而墮甌不往寥寥冷座少林老不默默全提正令對自說  
 秋清月轉霜輪高着河淡斗垂夜柄誰敢繩繩衣鉢付兒孫莫安從  
 此人天成藥病使天行已過須知

●廓然無聖　この一則の公案の眼目は達磨が梁の武帝に答へられた廓然無聖の一句にあるゆゑ、此に先づその公案を拈出し置き而して宏智が滿腹の意見を吐露しやうといふ意氣込である否な宏智はこの廓然無聖を以て、直指單傳の差珍異資ぢやと讃歎せられた死猫兒頭の如く價の附かぬ寶珠であると申された位であるから拈出して見せられた許りでは氣が濟まぬ、ソコで更に此の本則を提起し、思ひ存分に武帝と達磨との出會を評頌せられんとする所である

▲一廻水ヲ飲デ一廻噎ヲ著ク　噎は咽の痛むこと、飯が咽喉に塞つて息が碌々に通はぬ貌である、天童が廓然無聖と公案を再び拈起せられたが、萬松の目から之を見ると、一たび水をグツと飲んだは善けれど、其水が咽を越し切らずエツとむぜびて吐出した様ぢや、併しその吐出すのはドウぢやといふに、母親が甘露の様な

水を口に入れて飲みかけたが、餘りに味がよくて呑み切る事が出来ぬ、といふは吾子の可愛さにドウぞ之を吐き出して可愛吾子に飲ませて遣り度いとて、一廻飲みかけた水をエツと吐き出した如く、廓然無聖の甘露水が餘り旨さに之を吐露して天下の諸人者に飲ませ様との親切と見える

●來機逕庭　逕庭とは隔遠の貌なりと字彙にある、莊子の逍遙遊に、大に逕庭有て人情に近からずともある、機は機物機根とて佛教では衆生といふことにも使ひ、單に人といふことにも使ふ、今來機といふからには、お客といふほどの意味ぢや、武帝と達磨とを並べて見れば、達磨がお客で武帝が主人の様ぢやけれども、この公案から見れば、達磨が主人にて武帝がお客である、故に來機といふは武帝の方に係る、逕庭とは俗に謂ゆる摺り違ふといふことになる、今日天童が武帝達磨兩人の出會を見るに、武帝が見る所の佛法と、達磨が見る所の佛法とは、丸切方角が違ふて居る、ソコでお客の武帝どのは廓然無聖不識の挨拶に、磨玉を潰してモウ二言と出なかつた、否な達磨の宗旨は、銀山鐵壁の様で、寄ても附けなかつた、夫といふのも是れまで佛の方便説ばかりを見て居たものぢやに依て、諸の方便門を離れ、直指單傳の

大道を丸出しにせられたからの事である、この大道は素より四通自在にして、凡塵迷悟の高下や、生死涅槃の沙礫はない、萬里一條路平坦坦少しの岐路もない、此んな大道は夢にだも見た事がないから武帝を始め天下の佛者が残らず逕庭であつた、イヤ昔も逕庭であつたらうが今も矢張逕庭であらう、天下の諸仁者ドツてあるな、廓然の大道が分りましたか、聞きたい者ぢや

▲面ノ赤キハ語ノ直キニ如カズ 天童の仰せは御尤ぢや萬松も實は斯様に思ふ、武帝も初めから知らざるを知らずとして正直に問はるれば宜いに己は佛心天子ぢや兎に角一國の帝王であるといふことを鼻にかけ、知りもせぬ事を知つたらしく聖諦第一義はドツて御座ると物知顔で問ひかけた者ぢやに依て、達磨も腹一杯の處を打明されたけれども、耳聾に對つて音樂を聞かせた様なもので一向に聞き取る事が出来なかつた、ソコで達磨も愛想をつかし、此んな人間と連も話しは出来ぬと思ひ、二たび面會をも爲さず臂を掉て魏國へ往かれたは武帝に取て實に赤面の至りである、故に孔子も知らざるは知らざるとせよ是れ知れるなりと諷められたこともある、實に孔子に對しても慚愧千萬ぢやと評された否なこれは武帝

許りてはない、天下古今僧も俗も兎角この物知顔が爲たいものぢやが知らぬことは知らぬといへば赤面することもなけれど、知らぬことを知つた振りして、赤面しなくてはならぬ様なことは随分あり勝なものぢやと武帝に事寄せて天下後世の者を暗に諷めた萬松の老婆心である

●得非犯鼻而揮斤、失不廻頭而墮甌

揮斤と墮甌とは故事である、揮斤の事は

莊子徐無鬼の篇にある話にして、莊子が惠子といふ人の墓を過ぎる時その從者に語つたので、多分これは寓言であらうが先づ斯うである、郢の國の人が其の鼻端へ聖漫とて白土をば蠅の翼ほどのものを塗りつけ、匠石といふ腕利の名人に斧を以てその聖を斲らしめんとて、此事を申入れた、スルと匠石が此旨を領じ、委細承知致しましたとて、斧を揮りあげ腕限りの力を出し、フツと風の音の聞ゆる程にして、その聖を斲つた、流石は名人ぢや斯程にして聖を斲り盡したけれど、鼻端に少しも傷をつけなかつた、又郢人も卓立たなりに少しも容色を失はず平氣で居たと云々、又墮甌の事は後漢書列傳の五十八にある話し、そは如何といふに孟敏といふ人が大原といふ處に居候をして居た時、甌を荷て路を歩くと、不圖した拍子に地に墮

して破つた大抵の人はあゝ惜しい事をしたとて、その破れた物を織ぎ合せて見たりなどする者ぢやけれども、この孟敏は後をも振返り見ずして去るから、郭林宗といふ人が夫を見て貴公はどうして其様に後をも見ずして去るのぢやと問ふたれば、孟敏が答へて申すに「アニ最う飯が破れて仕舞たのぢやから再び振り返つて見た所でドウせ駄目であるから視ないのである」と答へた、ソコで郭林宗がこれは却々見込のある男ぢやと思ひ自分が資本など興へ勸めて學問をさせたといふ話し、飯はコシキと訓するので底に穴でもある食物を炊ぐ器と見える

以上は故事、天童がこの故事を應用せられた趣意は那邊にあるかといふに、郭人を武帝に譬へ匠石を達磨に譬へられたので、武帝が達磨に向ひ、朕即位以來寺を建て僧尼を度すること無數其功德如何、如何なるが是れ聖諦第一義と問ひ掛けられたのは、郭人が聖を鼻端に塗り付け、匠石をして之を斲らしめんとした様なものである、時に達磨が無功德、廓然無聖不識と答へられたのは、匠石が腕力を揮つて鼻端の聖を斲り落した様なものである、ソコで郭人の容色を失はなかつたのは、武帝が達磨の答意を會得しなかつた様なものぢやとの事である、なる程達磨が揮斤の妙手

段を以て武帝の機嫌を傷なはぬ様に「バツと佛見法見法執法愛の聖漫を斲り取らうとせられたのは大に得る所あらんとの意氣込であつたから、得は鼻を犯すに非ずして斤を揮ふと頌せられたけれども、武帝は蛙面水鹿角蜂で平氣の平左衛ボカンとした面色、聖を斲られたのぢやけれども、斲られたことに氣が附かなかつた、廓然無聖、無功德、不識と遣られた手際は實に鋭い勢ひである併し、達磨の手際は如何にも巧みてあつたけれども、武帝が朕に對する者は誰を抔とて一向に契當なきゆゑ、これは逆も話しの手相にならぬ人物であるとして、再會をも爲さず、揚子江に舟を浮べて魏國の嵩山少林寺へ赴かれたのは、丁度孟敏が飯を喰し破つて後をも振り向かず、サツサくと去つた様なものであるとて、矢張達磨が武帝に思ひを掛けずサツサと去られたのは能く武帝の五臟六腑までも見て取られた流石は碧眼の胡僧である、と讃歎せられたのである、即ち武帝は到底駄目ぢやと見限られたのは、失である、故に失は頭を廻らさずして飯を喰すと頌せられた實は、失は飯を喰して頭を廻らさずと讀めば意味が一層明瞭に能く分る、茲に得失の二字を以て武帝と達磨との相見を評頌せられたは實に天童の好手腕である

▲好手手中ニ好手ニ誇ル  
 ソコで萬松老人が著語して左様く天童の申さるゝ通り、達磨の匠石は甘いものぢや、達磨の手際でなくては、あの様に上手な答へは出来ませぬ、

▲已に往クヲバ答メズ  
 萬松が思ふに達磨が早く見切て往かれたのも一時の好方便ぢや、それを悪いと咎めはせぬ、何故なれば夫れ武帝も其んなに無眼子でないから、達磨が如何にも速かに去られたのを遺憾に思ひ、後に嗚呼之に見ゆれども見えず、之に逢へども逢はず、今も古も之を悔む之を恨むと申された、故に去られたのも好方便であつた

▲寥寥冷座少林  
 それから達磨大師は魏國に往かれて何んなことを成されたのであるかといふに、寥寥と物靜かに、禪道佛法の熱氣熱喘は一點もなく、少林寺に九年の間、面壁冷座せられたのである、然るに南山の道宣などは達磨の達磨たる所以を知らず、歴史を編むに方り、達磨をば習禪の部に列ねた、さすれば達磨は九年面壁して坐禪の稽古を爲し、悟りても開きたい、生死をも透脱し度いと考へてあ

ると見たのであるけれども、それは非常な見損ひといふものぢや、吾本來此土、佛法救迷情の一句を見ても、何の爲に九年面壁打坐せられたのであるといふ事が分らなくてはならぬ、故に冷座の冷の字に高く眼を着て、達磨の坐禪は悟を貪り證を求むる普通尋常の坐禪でないといふことを會得しなければならぬ、併し面壁九年とは申しながら、其間に幾多の門人を接待提携せられたのであるといふことを忘れてはならぬ

▲老テ心ヲ歇メズ  
 イヤ萬松が思ふに、達磨が百二十歳になつて此の東土に來られ、武帝に面會されて後魏の少林寺に根機よくも九年面壁の行持を爲されたは、何やら望がタツブリとありさうな、ドウも安心して居られぬものと見えるといふは、傳法救迷情といふ大慈悲心が深いからの事である

●默默全提正令  
 已に夫れ面壁坐禪であるから、黙々とダマリ切て、多くの俗男女に向ひ轉迷開悟、離苦得樂の說法談議を開かれたともない、只從上佛祖の正令を全提せられたのである、正當の法令とは何であらう、蓋界を超越して佛祖の屋裏に太尊貴生なるは結跏趺坐なり、外道魔黨の頂額を踏躪して佛祖の堂奥に箇中

人なることは結跏趺坐なり、佛祖の極の極を超越するはたゞこの一法なり、初祖菩提達磨尊者西來のはじめより嵩嶽少室峯少林寺にして面壁跏趺坐禪のあひだ九白を經歷せり、それより頂額眼晴いまに震旦國に遍界せり、初祖の命脈たゞ結跏趺坐のみなりとは永平高祖が正法眼藏王三昧の卷に證明せられてある、故に面壁打坐は佛祖屋裏の正令にして而も全提である、此中に三乘十二分教も宇宙法界の真理も皆含まれてあるから、之を全提と申されたのである、左はあれど萬松は之を評して

▲猶自カラ兵機ヲ説ク 萬松が思ふに黙却て雷の如しといふ様なもので、その黙々全提はドウも謀を帷幄の内に廻らして勝つことを千里の外に決するといふ様に、何となく參謀本部の中で兵機兵法を談説して居らるゝ様に見受ける

◎秋清月轉霜輪 扱てその正令を全提せられた面壁打坐の當體を申して見やうなれば、四期の中で秋の空は最も能く澄み渡つて清らかである、この清らかなる秋の夜、八月十五日の満月が東山の上より出て任運無罣礙に霜の如く眞白な輪圓を移し轉じて西山の方へ傾くその光景は如何であらう、實に物の比倫に堪ふ

るなし、我をして如何が説かしめんと自知自得するより外はない、眞如實相の月輪は無明長夜の闇を照すとは、實に正身端坐の正當正面であらう、佛性の戒珠心地に印するといふも此事である

▲高ク眼ヲ着テ看ヨ 卑い眼から見ると習禪の様にも見える、壁觀婆羅門の様にも見える、何か深思熟考して居る様にも見える、けれども高い眼から見るときは、如來最上乘の三昧王三昧に安住して無盡法界を遍照して居らるゝ仲秋満月の様に見ゆるが、諸人はこれを何と見られたかナト

●河淡斗垂夜柄 天上に銀河のある譯ではなけれど、天の色が銀の様に白くなつて、何だか河でもありさうに思はるるぢや、時に北斗星の光線が杓の柄を見た様に、劍先を垂れて居る様に見える、この澄み渡つた秋の空は實に冷しくして熱氣がない、ドウも凡聖迷悟有無得失の論議商景あるは如何にも熱氣微々として物苦しいけれど、達磨の境界は遠くその熱喘を離れてサモ潔白な生涯である、時に萬松が傍から

▲誰カ敢テ承攬セン 天童その様に面壁打坐の消息を讚歎して天下人に知

らしめ様と心配せらるゝけれど惜い哉誰も點頭する者はあるまいなぜかといふに唯獨自明了餘人所不見で却々結跏趺坐の王三昧は佛魔も窺ふことは出来ぬ

●細繩衣鉢付兒孫

達磨の面壁九年は太公望が直鉤を渭水に垂れて西伯といふ金鱗を釣り揚げられた如く神光といへる斷臂の尤物を得汝は吾が髓を得たりとて西天二十八代細々綿々と相續不斷に授受し來りたる所の佛衣佛鉢を兒孫の神光に付囑せられた神光は即ち慧可ともいふソコで達磨を震旦の初祖といひ慧可を二祖といふ太祖正宗普覺禪師とは此人の事であるこの二祖から六祖までは一脈連綿であつたが六祖より二派に分れ或は五派にも十派にも分れ十四流日本の禪といふやうになつた

▲莫妄想

イヤ天童尊前は何を云はるゝのぢや素より人々具足個々圓成の佛法で授與往來に涉る物が何處にある衣鉢の遺物に佛心印が附隨しては居ないぞ西來の直指元言なし一言半句として付囑すべき物はない然るを付囑したなどゝ申さるゝがそれは尊前の妄想ではないかそんな妄想を諸人に教ふるは眞平御無用ぢや

●從此人天成藥病

イヤ早や達磨が佛衣佛鉢を付囑せられてから付する物があり傳ふる法があると心得て直指單傳以心傳心の藥が遂に人天の大病となつて五祖六祖の時から衣鉢與奪の争ひが起るやら南頓北漸繞路直截等の禪病が却々癒えぬソコで伏牛の自在禪師が有時即心即佛は是れ無病に藥を求むるの句非心非佛は是れ藥病相治の句と申された事も有る様な者でドウも藥病相對して廓然無聖の本地に安住する者が少ないとて廓然無聖は元來文字言句の上に於て論量すべきものではないぞといふ事を示された

▲天行已ニ過グ使者須ク知ルベシ

イヤ天童和尚尊公は飛でもないことを言はるゝ天下の者が殘らず藥病に成つたと言はるゝけれど萬松の座下などには其んな病人は一人もない悉く無病息災であるこの天行云々とは蓮生録に除夜行癩の使者ありて人間に降る黃紙を以て天行已過の四字を朱書して門額に貼すといふある行癩とは疫病を流行せしむる惡鬼神の事故に天行とは疫病神のことになるソコで天行已過の四字を門口に張て置けはその癩病を煩ふことはないといふ支那人の妄想である使者須く知るべし最う當家に用事はないからサツサと外へお

出てとは、萬松が又廓然無聖の端的を呈露せられたのである

### 第三則 東印請祖の話

#### 示衆

示衆云、劫前來兆之機、鳥龜向火、教外別傳一句、確智生花、且道、還有受持讀誦分也無

今日の示衆は本則にある如是經の端的を拈提せられたのであるが、この如是經は却々八釜敷いお經であるから、梵字にて書き記すことも出来ねば、漢字に翻譯することも出来ぬ、ソコで三藏法師も摩騰法蘭も之を世に流布する事が出来なかつたのである、それはその等サ、一代藏經即ち三乘十二分教に收むることが出来ないゆゑ、釋尊が別に之を大迦葉に傳へられ、迦葉は之を阿難に傳へ、阿難は之を商那和修に傳へ、夫から展轉相續して二十七祖般若多羅に至り、多羅より二十八祖達磨大師に傳へ、大師が之を支那に持來りて慧可大師に傳へられたので、教者法師の夢にだも知らぬお經であるから、之を教外別傳の一句と申さなければならぬぢや

サア此のお經はドンなお經であらうか、華嚴經の中には、大經卷有るか如き、三千界に等し」と申してある、さて其の大經卷はドンな處に收めてあるかといふに、同くその華嚴經に「二微塵の内に在り」と申してある、その微塵を破れば中より大經卷が現はれて普く衆生を饒益すとある、左すれば今の如是經も矢張この大經卷と同じ性質の様だ、その微塵とは何のこと、大經卷とは何のとであらう、先づ華嚴經では微塵を衆生に譬へ、經卷を佛智に喩へてある、然るに今この如是經は佛智も猶ほ窺ふことの出来ぬほどの者であるから、萬松老人が劫前未兆の機、鳥龜火に向ふと出かけられた劫とは梵語の劫波といふ事にて、是れは時節といふ義になる、時節は必ず遷り變る所のもので、始めがあれば終りがある、始終あるものは必ず差別的のものであるが、今この一機は空劫以前の品物であるから、有無とも迷悟とも事理とも黑白とも兆しのなき一物であるのぢや、儒教では之を太極といふであらうが、佛法では之を一圓相とも、向上の一竅とも、向上宗乗中の事とも、空王那畔の最大事とも、非心非佛非思量の境界ともいふ、この一機は衆縁にも涉らなければ、陰界にも居せぬ、全軀機とはドンな意味であるかといふに、古語に「千鈞之弩不爲鼯鼠發機」とある如

く主發を機なりと注して射的者が茲と等とを喰ひ合せて今にも切て放たんと眼を著る所を機といふ故に之を諸佛の妙機祖師の玄機ともいふべきや、永祖は坐禪箴に佛佛要機祖祖機要と仰せられた、達磨大師の傳へられたのは只この一機である、同案察和尚が之を十玄談の中に祖意と題して「祖意如空不是空、玄機如石豈無功、三賢尙未明、斯旨十聖那能達、此宗」と云ひ、又玄機と題して「迢迢空劫莫能收、豈爲塵機作繫留、妙體本來無處所、通身何更有蹤山」と述べられたのも亦この劫前未兆の機である、

之を空劫以前の消息、天地未開の一機、父母未生以前の自己といへば夢にだも見る事が出来ぬ様にあるけれど、其んな遠方に有る譯のものでもない、又あまり近くにあるといふ譯のものでもない、其處は諸仁者の著眼に任す、ドウも夫れ未兆の一機であるから何とも彼とも言端語端に涉られるものではない、その未兆の機を譬へて見やうなれば、烏龜の火に向ふた様なものである、烏は黒いといふ意味ぢやけれど、單にその色が黒いといふのではない、目の見えぬ盲龜といふ事である、又火といふも熱いといふ意味ではなく、赤いとか白いとか明るいとか云ふ意味、即ち黒白

明暗の熟字である、然るに盲の龜が火に向ふたのであるから、火が赤いといふことを知らぬ、左すれば黒、白、未分、明暗、不到といふ事になる、此の未分と云ひ不到と云ふは迷悟事理の差別なき佛向上非思量の處ぢや、是が絶対無差別の如是經である、此の如是經は教外別傳の一句であるが、この一句には千萬無量の活句を含んで居る、諸の三藏法師が三乘十二分教をば傳來したけれど、此の一句が傳はらなかつたから、達磨大師が之を傳へられた故に教外別傳ぢや、この教外別傳の一句を物に喩へて見やうなれば、確菫に花を生ずるが如きものであるとの事ぢや、この確はウス菫はクチバシと訓するので、石確のふちといふ意味になる、石確の縁に咲た花を見たら様なものぢやとは、隨分妙な譬へてはある、これは臘月火中の蓮といふ譬へと同じやうぢや、臘月火中の蓮や、石確の縁に咲た花は名のみ見て其實を見ることは出来ぬ、教外別傳の一句なる如是經も名のみ見て之を文字語言に現はすことは出来ぬ、文字語言に落ちぬから、固より見聞覺知の邊際に落ちぬ見聞覺知にあらざるがゆゑ、迷悟凡聖有無得失の色香がない何故かといふに、是れは少林千古の春色にて陰陽不到の別天地なるからの事ぢや、大智禪師が「枯木乍開、花一點、喚回空劫已前春」



と云はれたことがある、それも矢張確誓の花と同じ物ぢや、この確誓の花も亦劫前未兆の玄機である、諸佛諸祖の要機である、この玄妙なる要機が、般若多羅尊者の常轉如是經であるが、且く道へ受持誦讀の分ありや、我が萬松座下は勿論、一天四海に此經を受持する分上の者があるか、誦讀する分上の者があるか、兎に角本則に就て謹聽するが宜からう

ドウぢや此經を受持する事が出来ねば、僧とは云はれぬぞ、此經を誦讀するのが眞箇禪人の行持ぢや、金剛經にも、一切諸佛の阿耨多羅三藐三菩提の法は皆此經より出づとあるが、眞箇金剛不壞の經は劫前未兆の處にある、その受持誦讀の様子が分らなければ、且く般若多羅尊者の轉經を見たがよい

本則

舉東印土國王請二十七祖般若多羅齋 往々口賃口 王問曰、何不看經、無功受祿 祖云、貧道入息不居、陰界出息不涉、衆緣常轉、如是經、百千萬億卷 上來講讀 無限勝因

●舉東印度國王 印度は天竺の異名ぢや、昔は東西南北中の五天竺に分れて居たから東と申したまでの事サ、印度といふは梵語唐には月といふ、故に月氏國といふ事もある、其故は諸の賢聖が軌を繼ぎて凡を導き、人を御することは、月の萬物に照臨するが如くなるが故にとある、又印は鑑なりとも申して、世界の文明は印度が最初にて印鑑となるから印土とも申したのである、國王は堅固といふ人

●請二十七祖般若多羅齋 大迦葉を印土の第一祖として、その第二十七代正傳の祖師で、その傳記も委しけれど、今はその必要がないからお預り齋するとはお齋を供養したので、國王の事ぢやから、嚙御馳走があつたらう、日本などでは年忌葬祭の時なくては滅多に僧侶を供養せぬけれど、彼上に於ては、屢々請待してお齋を供養するものと見える、其時には必ず石經とてお經を讀む、或は追善の爲に回向を頼んだともいふけれど、それは推量までの事サ、然るに普通の僧侶はみな咒願回向をするのに、尊者獨りは御馳走になつた許りて一向に讀經回向がない、ソコで王が怪んで其故を問ふたのである

●往々口賃ヲ賃ヒ去ル也 往々とはドレモ〜といふ事、口賃とは口の借財

といふ事、償ふとは返す事、下の僧も下の僧も、齋の振舞に逢へば、口の借財をした  
様なものであるから、その代りに必ず讀經回向して、その口借を償ひ返して去り行  
くが、其奴等はみな無眼子である、國王は常に其例を見聞して居るから、此の坊様も  
經陀羅尼を誦むであらうと思ふて居たけれど、一向にその様子が見えぬものぢや  
から、試みに問うて見たので、強て頼んだのでもあるまい

●王問曰何不看經 誠に鹿齋にてお口に契はなかつたて御座りませうが、そ  
れは兎も角、此に一ツの間ひがあります、他の坊様はみなお經を轉讀なされますが、  
貴僧に限りて轉讀なされぬのはドウ云ふ譯で御座りませうかと不審した

▲功無フシテ祿ヲ受レバ寢食安カラズ 己れが徳行の全缺を計つて供養に  
應ずべきもの、己れに何の功力もなくしてお齋の祿米を受けたならば、寢るにも寢  
心地が悪い、喰るにも喰べ心地の悪いものぢやが、二十七祖が平氣な顔して居らる  
ゝのは並々な者に出来る譯のものではない、平氣な顔して居らるゝのは大いに其  
の料簡がある、何時も無看經でもなかつたらうけれど、此日に限つて無看經なのは、  
矢張この堅固王を濟度してやらうとの魂膽、是も亦如是經の轉讀である

●祖云貧道入息不居陰界

貧道とは道徳の貧しい此方て御座ると嫌遜卑下

した言葉ぢや、陰界とは陰處界として五陰十二處十八界の三科を畧した言葉である  
〔五陰とは色受想行識十二處とは眼耳鼻舌身意の六根と色聲香味觸法の六境とて  
ある十八界とは六根と六境と六識とである〕この陰界は心意識の運轉念想觀の測  
量とて是非善惡の妄想界であるから、此方の入息は、決して此の妄想界には居ら  
ぬ、此方は、觀自在と同じく五陰は皆空なりと照見して、一切の苦厄を度し、一切の  
顛倒夢想を遠離して、大涅槃の境界に安住して居りますから、御不審は御無用ぢや、  
決して無駄喰は致しませぬ

●出息不涉衆緣

入息が陰界に居らぬ位ぢやから、出息も亦衆緣萬事の境界

に涉り、五塵六欲の街に遊ぶ様なことは御座らぬ、拙僧は是くの如く三昧境に入て  
居りますから、別段に看經する必要は御座らぬ、看經の必要はこの三昧境に入ら  
しめんが爲めてある、この三昧に遊化して、一切の萬境に執著せぬのが究竟無爲の  
深般若である

●當轉如是經百萬億卷

拙僧は世の無知なる坊様とは違ひ、お齋に逢ふた

ときのみ名聞らしく看經こそ致サね、從容至夜、常住無間斷に、是くの如き甚深の般若波羅密多經を轉讀して怠りませぬ、却々一卷や二卷ではない、百千萬億無量無數の大經卷を轉じて居ります、その音聲は三千大千世界に響き亘つて居る筈ぢやが、失禮ながら陛下の御耳には達しませぬかと手強い御返答ぢや、これでは王も定めて成る程と受持讀誦の分上がなくてはならぬ筈ぢやがドウだか知らん

▲上來ノ講讀ハ限リ無キ勝因ナリ  
イヤドウも萬松思ふに二十七祖の講經讚歎の聲は、國王及び諸人の爲めには限りもなき殊勝の大事因縁ぢや、此んなお經の講釋は般若多羅尊者を請待したればこそ聽かれたのである、誠に億々萬劫難値難遇の好因縁ぢや、この好因縁に由て必ず無上正等菩提を得らるゝてあらうから、能く耳を洗うて聽聞せらるゝがよい、萬松延引ながらお勧め申す

頌云

○雲犀玩月璨含輝、暗通一線木馬游春駿不羈、百花叢裏過眉底  
一雙寒碧眼、不離越看經那到透牛皮、也過明白心超曠劫、一威音前英

雄力破重圍、射透兩妙圓、樞口轉靈機、何曾寒山忘却來時路、暫在  
如人拾得相將、須是手歸、須是常

天童もこの常轉如是經が餘程お氣に召したものと見え、存らん限りの詞を盡して讚歎せられた、此頌は始めより終りに至るまで般若多羅尊者の境界を讚められたのである

●雲犀玩月璨含輝  
尊者の謂ゆる入息不居陰界と申された所を形容して見やうなれば、彼の雲犀が月を玩弄すれば其の角に光輝を含むが丁度あのやうなものであらう、雲の字を或は靈の字に作るもあるけれど、其の確かな證據は、犀の角から矢張まあ雲犀として置させう、是は只月といふ字に因みて、黒いといふ意味に用ひたものであらう、何故かといふに格物論に、犀ハ狀水半ノ如シ、猪頭アリ、大腹卑脚、三脚三蹄ニシテ、黒シ一孔ニ三毛アリ、江海ヲ行ケハ水之ガ爲ニ開ク云々、とある、故に色の黒い獸類にして水中を自由に遊ぶものと見える古詩に、犀ハ月ヲ照ゾニ、四テ紋角ニ生ジ、象ハ雷ニ驚カサレテ、花牙に入るとある、故に雲犀は黒犀の義であら

うと思へるその月を玩ぶとは水獸であるから天月が水中に浮ぶを見て彼の猿猴が水中の月を捉へんとするが如く何の分別もなく水月を玩弄すれば其の透き徹つた角に水が付いて月が映るさうすると其中に月の光が璨然と立派に含む尊者の境界は内その昏沈に墮せずして此の光明藏三昧に住して御座る之を常寂光と云ふべきであらう或は又之を淨極り光通達し寂照にして虚空を含むともいふべきであらう

▲暗ニ一線ヲ通スレバ文彩已ニ彰ハル 諸人も暗にドコともなしに一線路

を我が心地上に通じて見たならば般若多羅尊者に限つた事はない誰でも本来本法性天然自性身の文彩莊嚴が固より璨然と輝いて居るドゥちや見えたり

●木馬游存駁不羈 又出息不涉衆緣といふ尊者の境界を形容して見やうなれば無心の木馬が春の野に遊んで如何にも勇ましい有様に似て居るとの事涅槃經の中に木牛木馬木男木女とて無念無想の境界を形容した文字がある今も其意を用ひて木馬と申されたのである有思量の春駒なれば春草の野邊に遊びて青草が喰ひ度いといふ念も起るが今は非思量の駿馬であるから如何に六塵五欲の存

野邊に遊んでもその青草が一口喰べ度いといふ妄念分別は起らぬ又愛憎偏念の細に縛り羈されて自由のならぬ鈍馬とは事變り流水聲の中流水を聞かず白雲堆裏に白雲を見ずといふ境界實に洒々落々として外その散亂に走らぬ尊者の境界ちや

▲百花叢裏ヲ過レドモ一葉身ヲ沾サズ イヤどうも天童の申さるゝ如く百花爛漫たる草むらの中を行けど一葉の露だも其身を沾さぬ如く諸緣萬境の中に遊べど更に一物の爲めにだも染汚せられぬは尊者の境界ちや尊者許りの事ではない何人も斯うなくては叶はぬ

●眉底一雙寒碧眼 以上の二句は出入の兩息に就て頌せられ以下の二句はその眼目に就て頌せられたのであるさて内その陰界にも居せず外その衆緣にも涉らぬ尊者の眼目はドウであるかといふに一雙の眉底にある眼色は紺青色の如くにしてその眼光は日光の人を射るが如く實に寒しいものちや見てもソツとするやうちや

▲曾テ蚺蟻ノ隊ヲ趨ハズ 蚺蟻は字彙に大蟻なりとある蟻といふものは砂

糖の香いでもすれば何處へまでも嗅ぎつけて廻るものぢや彼の文字言句を逐うて煩はしく義理詮鑿を遂げる者は虻蜂の臭味を嗅ぎ廻る様なものぢやが彼の多羅尊者の看經は左様なものではない無文無字の一大經卷にて其量は三千界に等しいので文字言句に關かるものではない故に眼藏の辨道話に況や廣人の文字は萬象にあまりてなほ豊かなり轉大法輪また一塵にをさまれりとある

●看經那透牛皮 昔し藥山惟儼禪師は尋常人の看經することを許されなかつたさうして御自分には看て御座るから僧が之を怪み和尚尋常人ノ看經ヲ許シ玉ハズ甚麼トノカ却テ自カラ看玉フゾヤ師云ク我ハ祇タ眼ニ遮ラシコトヲ圖ル僧曰ク某甲和尚ヲ學ブコト還テ得テシヤ也タ無ヤ師云ク汝若シ看バ牛皮モ也タ須ク穿ツベシと答へられたその故事を引用しイヤ此の尊者は此の冷かなる碧眼を以て看經をなさるゝこともあらうけれどそれは藥山の看經と等しく只その眼を遮るまでの事にて文字言句を逐うてその書物に穴の開くほど牛皮をも突透すほど洋學者が近視眼になるほど文字葛藤にへばり付て穿索せらるゝ様な愚痴くとした事ではないほんにあつさりしたものでぢや

▲過也 イヤ最う此の尊者は疾くに一代藏經をば看破ッて御座るので天童どの左様に申さるゝほどが遅いッ

●明白心超曠劫 以下の二句は尊者の心に就て頌せられたのである三祖の信心銘に至道無難唯嫌揀擇但莫憎愛洞然明白なりとあるこの憎愛なき迷悟凡聖有無得失の雲霧なき洞然明白の心月は還々たる曠劫にも留まらぬ快活自在の境界である然らば今時門頭六塵の巷に走るかといふに却々左様なものではない

▲威音前の一箭 威音王佛以前の事は佛智を以ても究むる事が出来ぬといふ佛學上の慣語である是れは示衆の中の劫前未兆の機と同じ意義である即ち曠劫を超越したる洞然明白の心は喜怒哀樂の未だ發せざる不可思議の玄機である

●英雄力破重圍 世間の英雄が其の豪力を以て二重三重の圍みを破るが如く出世間の英雄は生死無常の強敵にも恐れず勇猛精進にして千重萬重せる煩惱妄想の圍みを破る何を以て之を破るのであるかといへば洞然明白の一箭を以て之を破る超の字と破の字に注意したがよい

▲兩重ノ關ヲ射透ス 兩重は人我見法我見理障事障見惑思惑等と見るもよ

いこの兩重が千萬重となつて居るけれど、威音前の一箭を放てば一時に射透す事が出来る

● 妙圓樞口轉靈機

此の一句は傍句と申して前にも後にも對待がない對待は無けれど以上の七言四句と六言二句とを總括してある、即ち總理大臣の様に以上の四十言を此の一句で締め括つてある、爾して此の一句は樞機の譬を借つて法を明された、この樞の字を小僧等がスツと讀むけれど、夫は誤まり、正音は姝である、而して之を門戸のクル、と訓する、故に門樞とも戸樞ともいふ、機は機輪とてクルと轉がる所のもの、妙圓の樞口とは真んまるくして少しも欠のない樞の穴といふこと、靈機を轉ずとは、その真んまるき穴の中に機輪が活々として自由自在に轉がるといふ字義ぢや底意は其の洞然明白なる、取捨憎愛のなき圓同大虛無欠無餘の大道に在りて、劫前未兆の一機なる直指單傳の靈機を運轉せらるればこそ、有縁にも住せず、空忍にも墮せず、陰界にも居せず、衆縁にも涉らず、佛界魔界に於て、轉々阿轉々、回互宛轉、開閉自在の如是經が轉ぜらるゝのである、この常時無間の如是經を轉ずるものぢやに依て、曠劫の二乘地をも超ゆれば、凡夫地の重圍をも破

るのであるとて、その根本的より般若多羅尊者の境界を讚歎せられたのである

▲ 何ソ會テ動着セン

イヤ靈機を轉ずるとあればとて、その靈機が妄りに動轉する事と思はぬがよい、この靈機はナ空劫以前より今日に至るまで、塵機の爲めに毫末も繫留せられぬから、或る方面より見るときは、一絲毫も動轉は致さぬ、故に動にして不動、不動にして動と知るがよい

● 寒山忘却來時路、拾得相將携手歸

此の二句は前句にある靈機の轉じ方を寒山と拾得とに事寄せ、巧妙に宗乘を含ませて頌せられた天童の手際である

寒山拾得の事は申すまでもなく人の皆知る所ではあるが、念の爲め此に一言して置かう、傳燈錄を案ずるに、豐干禪師が天台山の國清寺に居られた時、その庫裡に二人の僕僮が居た、それを寒山拾得といふ、或る時間丘胤といふ人が其寺に参り、豐干禪師に面會せし因み、あの靈所に變天平な僕僮が居る様ですが、ありやあり、全體何物で御座るか、と問ひたれば、豐干があれは文殊普賢の化身で御座ると聲を潜めていはれた、ソコで丘胤が驚いて左様ですかと、臺所に往いて禮拜したれ

ば何故に貴下は禮拜さつしやるのかといふから、イヤ豊干禪師より斯々に聞き  
 ましたからと申したれば二人が口を揃へて豊干饒舌餘計な事をいふ和尚ぢや  
 あの人阿彌陀の化身であるから此方等を拜するより豊干を拜せられよとい  
 ふに付さうですかと又方丈に登つて拜せんとすれば豊干の形が見えぬ、ソコで  
 再び臺所に立戻り見ればまたその二人も姿を隠して見えぬ様になつた夫から  
 して後は三人とも見えなくなつたといふ奇談がある世に寒山詩拾得録といふ  
 ものが行はれてあるその寒山詩の中に欲得安身處寒山可長保十年歸不得忘却  
 來時路とあり詩の邱風に惠而好我携手同歸とある此等の意味に依て今の二句  
 を作られたものであらう

句義は寒山と拾得とは異林同心といふ程の間柄ゆゑ寒山が仙境に遊び仙書を  
 讀んで十年も來りし時の路を忘れて居た所へ拾得が後から尋ねて來て相將の  
 二人が俱に手を取てその古郷へ歸るといふこと

さて此の二句に就て從來色々な解釋がある天桂和尚の辨解には國王を寒山に譬  
 へ尊者を拾得に喩へてあれど拙僧にはドウも感心が出来ぬ次に鼎三和尚の辨に

寒山をば文殊の智に譬へ拾得をば普賢の行に喩へて出息と入息とに合せてある  
 此方が尙だ頌意に親しい様ぢや

ソコで拙者の見込は斯うぢや寒山の一句は向去の事拾得の一句は却來の事向去  
 は即ち正位(空界)却來は即ち偏位(色界)之を向上向下ともいふ若し現時世間の用語  
 を以ていへば消極と積極とである空界は消極點にして色界は積極點である同案  
 禪師は之を還鄉破還と云はれた還鄉といふは空界無物の所破還といふは空即是  
 色とその空界より出づるのである併し乍ら此の空と色とは表裏を爲して居るの  
 て其實は一物體の進退去來に過ぎぬ前にも申した通り如是經の靈機は久遠の向  
 去邊にも坐著せず今時の向下底にも凝滯せず寒山が來時の路を忘却して孤峯頂  
 上に坐するかと思へば拾得が直に後から相將の俱に手を携へて柳綠花紅の古郷  
 へ歸るといふ様に何時も轉々轉々回互宛轉の妙機を具へて御座る般若多羅尊者  
 である依て天下の諸人も斯くなければこの如是經を受持讀誦することは出来ぬ  
 との事である又鼎三和尚の申された如く入息不居陰界と入息不涉衆緣とに掛け  
 て見ても面白い兎に角妙圓樞口轉靈機の一句をばこの如是經とし寒山拾得の二

句をば如是經の轉讀開閉と見たらば一層の妙味がある様に思はる、

▲暫時モ在ラザレバ死人ニ如同ズ 設ひ暫時でも來時の路を忘却して曠劫の二乘地に坐著するときは、向上の死淡となつて死物と同様ぢや、向上向下の往來が止まれば有氣の死人となる、次に手を携へて歸るの下に

▲須ク是レ當郷ノ人ナルベシ 法身覺了すれば無一物元是れ眞壁の平四郎到り得歸り來て別事なし、廬山は煙雨浙江は潮、その手を携へて歸つたのも矢張り古郷の知人であるといふことを知らなければならぬ、何故かといふに忘却した空界も提携した色界も、俱に眼横鼻直の人ぢやもの

この寒山と拾得との文字は、おのづと向上向下を加味して面白きところがある、イヤドウも如是經の轉讀が大層長談議になりました、先づはこれまで

### 第四則 世尊指地の話

#### 示衆

示衆云、一塵纒舉大地全收、匹馬單槍開疆展土、便可隨處作主、

### 過緣即宗底是甚麼人

●一塵纒舉大地全收 塵の字をば汚穢不淨の義に用ひるゝもあれど、今は微塵の義に用ひたものぢや、全躰この山河大地は何物の集合躰であるかといへば、微塵極微の集合躰である故に、一塵と大地とは全く別物でない、別物でなければ同躰である、已に同躰なればこの一塵中に大地を包含するといふ道理がある、して見ると一塵纒かに舉れば大地全く其中に收まると申したからとて無理な話でもない、併し是は譬喩の言辭と見て取らねばならぬ、然らば何の譬喩であるか、即ち一塵とは一念若くは一心の義、大地とは諸法若くは萬法の意である、故に天台の觀法には一念三千といふがあり、華嚴には一即萬法といふがある、是は續釋的理法であるが、若し歸納的理法からいへば、萬法歸一、一切即一といふこともある、或は心外無法、法外無心ともいふ、彼の華嚴經の中に、三界唯一心とあるは歸納的の理法、心外無法とあるは續釋的理法、心佛及衆生、是三無差別とあるは總合的理法である、故に一心の何物たることを識得すれば、山河大地も天地宇宙も悉く我が唯心の所現なることが分る、有情も非情も迷悟も凡聖も悉皆妙明心中所現の物なることが解る、され



ば天地同根萬物一體といふことも盡十方世界眞實人跡といふことも只此の一句に吞却せらるゝぢや愉快な事ではないか

● 匹馬單槍開疆展土便可

匹馬單槍とは一疋の馬と一本の鎗といふこと此

の匹馬單鎗にて疆域を開拓し土地を展延するとは如何なる意義であるかといふに大丈夫の武士ならば多数の兵士武具を用意するには及ばぬ一疋の馬と一本の鎗さへあれば四海八蠻は申すに及ばず五大洲の疆土を開展して悉く我が領分とする事が出来る事のこと

底意は出世の丈夫祖門の禪將ならば敢て三乘十二分教の武具三千の威儀八萬細行の軍勢を憑まなくとも即心是佛の馬に乗り諸法皆空の鎗一本さへあれば八萬四千の煩惱城を突破り無量無邊の妄想軍を降参せしめて大千沙界を我が手裏に占領することが出来る之を一所通れば千所萬所一時に透るとも盡大地沙門の一雙眼とも盡十方世界一顆の明珠とも向上那畔の風光ともいふ去り乍ら此は尙是れ禪者最初の一所見といふものにて若し世間普通の言辭を以て形容すれば一を知て二を知らぬ一方向の櫓板漢といふものぢや一眼は具したけれども尙ほ一眼

を缺て居るこの一眼を具し一所見を得ることは便チ可ナリ左のみ造作もなければ、と、最後の一眼を具することは難い

● 隨處作主遇緣即宗底是甚麼人

鐵砲や大砲を以て敵軍を降参せしむること

とは左のみ造作もなければ、遼東半島や臺灣を我が版圖に入れ、處ニ隨テ主ト作り、土民の主宰になつて善緣にもあれ惡緣にもあれ緣ニ遇テ事々物々我が宗家なる皇室の否な天皇陛下の大御心に即き隨はし宗ニ即スル底むることは却々容易な事ではない、若し縱使我が版圖に歸したからとて、我が政治法律及び宗教に服従せしめなければ、占領後の事業を終へたりとは申されぬ如く、縱使天堂にもあれ、地獄にもあれ、魔界にもあれ、塵中にもあれ、若くは眼耳鼻舌身意色聲香味觸法の中にもあれ、觸處く主と成つて大光明を放ち大慈悲を垂れて悉く我に懐かしめ善惡の諸緣に遇ふとも世法即佛法煩惱即菩提なりと認得する底の人は何人であらうか、一乘ニ趣カント欲セバ六塵ヲ惡ムコト勿レ六塵惡マザレバ還テ正覺ニ同ジ是くの如く認得するや差別智とも後得智とも向下却來の活三昧ともいふ、折角無差別智即ち諸法皆空の眼が開けたからとて、退歩承當特地新なりといふ自由無礙

の活用がなければ、兩手完全兩眼具足の人とは云へぬが、天下四海の諸禪者はドウである、若し未だしならば本則に就て見たが宜いとのこと

### 本則

舉世尊與衆行次、隨他脚以手指地云、此處宜建梵刹、太歲頭上帝釋將一莖草挿於地上云、建梵刹已竟、不修造世尊微笑、分明

●舉世尊與衆行次　世尊とは文字の如く世に並びなき天上天下の獨尊佛である、世尊を或る方面より見れば、教者法師の如く、説教演説者の如くに思はるれども、或る方面より見れば、亦禪僧達磨の様にも思はれる、或時大衆を引連て何處へか遊行せらるゝ次で、衆の心を試験の爲め……

▲他ノ脚跟ニ隨テ轉ズ　萬松老人傍より著語して、昔も無眼子連が多く有たものと見え、ゾロ／＼と世尊の足跡ばかり踏み行いて、人々鼻孔、遠天箇々、壁立萬仞なることを知らぬ連中のみぢや、丈夫自有冲天氣、莫向如來行處行、といふことを知

らぬと見えるとして、今時の學人に響かした

●以手指地云、此處宜建梵刹　刹は刹竿幡のこと、寺院にはこの刹竿幡を建るから伽藍のことを梵刹と稱したもので、ちや、今日世尊の素振は、勿々尋常一様でないから、格別の活眼を開き、意外の耳を傾けなくては見聞を誤まる、即今世尊の指頭上には大光明を放つて居らるゝが、諸禪徳の眼には、下の様に見えましたか、その大光明に依て、盡大地が黄金の色と變じて居る、此處宜しく梵刹を建ッべし、隨從の大衆は、ドンなに見、ドンなに聞いたか知らねど、拙者の耳には、汝等は此土を以て穢惡充滿の不淨土と思ふ、勿れ娑婆即寂光土であるぞよ、されば敢て此土を厭ふには及ばぬ、此土が直に七寶莊嚴土であるから、宜しく聞覺の大伽藍を建立し、而して此の身心を安居せしめぬかと仰せられた様に聞える、又は我、此土安穩、天人常充滿といふ様にも、佛子住此地、則是佛受用といふ様にも聞える、勿々五間や七間の梵刹ではない

▲太歲頭上帝ヲ動かサ令メス　太歲とは土地神のこと、世尊が梵刹を建立せよと仰せられたからとて、地ならしを爲たり基礎を築いたりして土木を始める事

と思はぬが宜い

●帝釋將一莖草插於地上云建梵刹已竟

帝釋は釋提桓因ともいふが是は切

利天の天主で佛道歸依の天王である併しこの天主が其の本身を現はした譯でもあるまい何故かといふに彼の天部と此の人間とは果報が異つて居るから當然ならば決して人間の眼に見える筈はない然るに若し此の事實が有たとすればそは帝釋が凡人の形を現はして大衆の中に交つて居たのであらう去り乍ら今は人物の穿鑿に用事はない只その所作に就て講究すれば夫てよい

他の大衆は何と聞いたか知らねど流石は佛法守護の帝釋だけあつて、チャンと佛意のある所を汲取り、間に髪を容れず直に一莖の青草を以て地上に挿み佛勅に依て不取敢伽藍を建立し覺りましたとスカササ伎倆を呈した併し凡眼を以て之を見、凡情を以て之を思ふときは如何にも兒童の戯事を見た様ぢや、然るに高く眼を着て見るときは實に百福莊嚴の大伽藍である、盡大地に遍滿せる寶莊嚴の一大建築である、この殿堂伽藍は勿々肉眼では見えぬ何故かといふに、世尊が地を指したまひしも、上石瓦礫の充滿せる大地の事でないからぢや、故に手を以てとあるは直

に佛眼佛智と見破し、地といふは衆生の心地と看取するが宜い、梵刹とは直に大圓覺の悟と見るが宜い、諸佛出世の一大事因縁はその佛眼を以て衆生心地の迷闇を照し、大圓覺の悟を開かしめんが爲めのみぢや、我れ佛眼を以て一切衆生の心地を照すに悉く如來の智慧徳相を具有す、此處好箇の地面であるから打捨置かば妄想執著の百草が茫々として生ひ茂る、宜しく大圓覺の梵刹伽藍を建立して早く我れ執法慢の風雨を防ぎ、汝等の身心をして安樂ならしめよとの爲人垂手である

この梵刹建立には三大阿僧祇劫の長年時を経る様に思ふ者もあらうが、それは鈍根の考へといふもの、頓機利根の衆生は建立刹那に在りと認得すべきぢや、帝釋は利根の衆生ゆゑ、初發心時便成正覺、成佛は一念頭にありと云はぬ許りに、直機點を利かせ、路邊の一莖草を拈擧し、之を地上に挿んだが、一塵纔かに擧起すれば大地全く收まる、一草僅かに拈起すれば法界全く攝まるといふべきぢや、世尊は僅かに一枝の華を拈じて法界を全提せられ、永平は纔かに一本の拂を拈じて法界を究盡せられた、故に修證といふも翻手覆手の間にある、帝釋が修證の一莖草を將て心地上に挿んだは實に好手中の好手ぢや、永平祖師が一莖草ヲ拈ジテ寶王刹ヲ建立シ

一〇微塵裏ニ入テ大法輪ヲ轉セヨと云はれたのも亦此意に外ならぬ

▲修造易カラズ イヤ建立は大走速かてあつたが何分大伽藍であるから造作が容易であるまい、一旦の悟入は出来たにもせよ其儘に打捨置かば立取りになつて何の用にも立たぬ故に悟後の修行が尤も骨が折れる大抵な者は退菩提心を起して後戻りをする、仍て信後相續の工夫が肝要ぢや

●世尊微笑 帝釋の所作が悉く佛のお氣に召したものと見える併し此の場合唯佛與佛乃能究盡ぢや

▲賞罰分明 同じ笑ひの中にも種々あれど今日の微笑は讚嘆賞譽なることが歴々分明である

### 頌云

百草頭上無邊春 夾山 猶在 信手拈來用得親 入荒田 不揀艸 丈六金身功德聚 不 等閑携手入紅塵 逢 塵中能作主 一朝權 在手 化外自來賓 看取 時觸處生涯隨分足 不從 人得 未嫌伎倆不如人 面無 慚色

最初の二句は帝釋の梵刹建立を頌し、次の四句は世尊の指地を頌し後の二句は人々の分上を頌したものでぢや

●百草頭上無邊春 昔し夾山和尚が大衆に對し關市裏識取天子百草頭上薦取老僧と會元第五卷云はれた事がある、今は天童がその古語を拈じ來つて帝釋の一莖草を頌せらるゝ所ぢや、先づ帝釋を見た様な心華開發した人の法眼から見るときは此の盡大地が黃金土と變じ、千草萬木が大光明を放つて居る故に古語にも「無邊風月眼中眼不盡乾坤燈外燈」とある如く、物外の春色は實に絶言絶慮であるから無邊の春と頌せられた言外に無盡の妙味がある

▲夾山猶在り 天童が百草頭上と云はるゝを聞けば何だか夾山和尚がまだ活きて居らるゝやうぢや

●信拈手來用得親 一寸外から見れば兒戲の様な業であるけれども世尊が眞面目に仰つしやれた言下に、勿々ドッして彼んな業が出来たものではない、それを夫れ帝釋が眞面目になつて行らかした手際といふものは度エライものぢや、帝釋なればこそ彼んな業が出来たのである、之を禪門では作家の手段といふ、何故此

んな業が出来るのであらうかといふに盡大地を以て勝伽藍と爲し盡法界を以て大道場と爲し居るからの事ぢや頭々是れ道場物々是れ全身と認得する底の人ぢやに依て下に信せ拈じ來つて用ひ得て親しい

▲荒田ニ入テ艸ヲ揀マス 荒田とは何の事であらう荒れ果てた衆生の心田地であらう艸とは妄想執著八萬四千の業識分別であらうされど帝釋を見た様な權化の大菩薩が拈じ來るときは至道無難唯嫌揀擇但莫憎愛洞然明白一つも取捨はない悉く是れ煩惱即菩提生死即涅槃ぢや

●丈六金身功德聚 釋尊といふことを大層讃めて斯くは申したものでぢや丈六とは一丈六尺の義にて釋尊の御長がそれほど有つたとの事ぢやが之を誰も日本にて現今用ひ居る金尺か鯨尺かの様に思ふて居るけれど多分走てはあるまい如何に釋尊が大男であるとして一丈六尺はなかつたらう拙者思ふに周尺では何ても此の丈六が八尺一寸許りになつたかと暗記して居る黃栗禪師も身の長が八尺有つたといふからマアその位なものであらう又佛身は紫磨黃金の色で有つたといふけれどマサカ事實なことはあるまい佛像や佛畫を皆金箔附にするから愚人

の考へにては左様に思ふて居るかも知れぬけれど其實は内證の徳相を表したものであらう功德聚とは萬徳圓滿の義である浴佛功德經の偈に淨智功德莊嚴聚とあるその意味ぢや

▲不審 支那の方語にて安否を問訊する挨拶の義になる天童和尚君は如何にも讃め散らかさるゝが佛にも三不能及び九惱十惱といふこともあるから餘んまり讃め過ぎぬ様にせられたが宜からうお互に自惚て愚來さうに思ふて居るけれど外から見れば穴だらけぢやと不審をいれた

●等閑舊手入紅塵 等閑は無造作の義世尊は萬徳圓滿なる清淨妙法身に於て一華百億の華臺に坐したまへる功德莊嚴の如來であるけれど衆生濟度の爲めには迦耶城に應現し弊垢衣を着けたる老比丘の姿となつて無造作に比丘僧を引連れ紫陌紅塵の街に往來出入して或は托鉢し或は說法せられた之を和光同塵とも憐兒忘醜ともいふ是くの如く尊を屈し卑に甘んじ世外に逍遙遊戯せらるゝも亦不可思議の活三昧である

▲塲ニ逢テ戯ヲ作ス 衆と行く次で手にて地を指し此處宜しく梵刹を建つ

べしとは兒戲の様なれど其處が夫れ塵々三昧

●塵中能作主 大悲の願力を以て五濁惡世の紅塵に入らるれど眞金は砂に混ぜざるの道理で塵中に在り乍らもその塵埃に染まず能く人間天上の教主となつて四十九年の間化縁の衆生を引導せられた

▲一朝ノ權手ニ在リ 朝は朝廷といふこと故に一朝の權とは一國統治の大權が悉く其の手中に掌握せられた普天卒士悉く王士になつたが如く天上天下唯我獨尊と崇められ三界の大導師として權柄を大千界に伸長せられた

●化外自來賓 尊釋は人間の教主として人身を現じられたれども其實は三界の教主なるが故に教化の外なる人間以外の天帝釋賓客までが自から其徳を慕ひ凡人の形になつて來り隨ひ世尊轉法輪の御補佐を申上げた

▲令行ノ時ヲ看取セヨ 宣建梵刹とは世尊の命令將一莖草挿於地上のは帝釋が其の命令を執行したのであるから學人たるものは先づその令行の時節に着眼したが宜い

▲觸處生涯隨分足

併し乍ら帝釋や世尊の噂ばかりして見た所で其は日夜

他の寶を數へて自から半錢の分無して其實は何の役にも立たぬゆゑ夫よりも自己の脚跟下を照顧したがよい人々分上會不敵自から眼橫鼻直なることを認得して見れば觸處生涯隨分足何一つ不足なことはないと直に回光返照の退歩を學せしめんとすの天童の親切ぢや

▲人ニ從テ得ズ 如何にも天童の申さるゝ通り人々具足箇々間成であるから他人より得るものは一つもない自分の鼻で自分の息をして居る人の口を借て飯は食はぬ

●未嫌伎倆不如人 天童などは既に分に隨つて満足して居るから最初より我が伎倆(智謀)の他人に及ばぬを羨む様なことはない世尊は世尊獨得の伎倆があり帝釋には帝釋だけの伎倆があつて地を指したり草を挿んだりして大法輪を轉じられたけれども天童などは彼んな眞似をする氣はないと表面には見せかけながら處に隨つて主と作り縁に逢て宗に即する底の機鋒を現はし自から今日の世尊帝釋に成り換つての梵刹建立轉大法輪である

▲而ニ慚ル色無シ

己れが伎倆智術の他人に及ばぬを嫌ふ心だに無ければ

少しも赤面することはない、短者は短法、身長者は長法、身鶴の足の長きを以て鴨の足の短さに取替る必要はない、その如く他人は他人の果報があり、自分には自分の果報が有つて此の生涯を全うして居るからの事ぢや

### 第五則 青原米價の話

#### 示衆

示衆云、開提割肉供親不入孝子傳、調達推山、壓佛、豈怕、忽雷鳴過、得荆棘林、斫倒梅檀林、直待年窮歲盡、依舊孟春猶寒、佛法身在甚麼處也

●開提割肉供親不入孝子傳 大報恩經の中に昔し開提太子が賊軍の爲めに襲撃せられたるものぢやに依て、兩親を引連れて外國へ逃亡せられた、然るに不知の他國へ逃げ走つたので一向に路の様子が分らない、時に人家はなく、食物は盡果て何うすることも出来ぬ、その時太子は己が股の肉を割いて父母に供養せられた

其が爲め漸く力を得て、其の行くべき所へ行くことが出来たとある、實に此れは孝の最も大いなるものぢやけれど、且く世孝にして佛孝でない、故にまだ佛門孝子の傳に入るゝ事が出来ぬ

●調達推山、壓佛、豈怕、忽雷鳴 又調達といふは提婆達多の事である、この提婆

が佛敵となつた因縁由來は、一朝夕の話しでないが、何うしても己が力の佛に及ばぬを嫉み、憤懣の餘り、何とかして佛を害せんと巧み居たるに、一日靈鷲山の麓なる金毘羅夜叉といへる者の宅へお出になることを知り、此時佛は耆闍崛山の麓なる石室の中に住して居られた、四人の力士に莫大の金を與へ、その耆闍崛山へ登らしめ、佛が石室より出てたまふ時を窺ひ、山上より大石を轉ばさしめた、その時佛の後には、金剛力士が居て、その石を受けて南山へ放擲致した所が、其石が七十片ほどに碎け、それが後戻りして佛の御足に當り、少し許り出血したことがある、この佛身血を出すは五逆罪の一にて、勿々容易ならぬ事である、この五逆罪を犯す者は、忽ち天雷の爲めに其身を引裂かるゝといふ事ぢやが、これとて有爲生滅の法であるから、眞實佛法の端的より見るときは、別に怖るべき程の事でもない、善の極善は孝行に超

えたるはなく、悪の極悪は不孝等の五逆に過ぎたるはない、されど善の善とすべきは大善でなく、悪の悪とすべきは大悪ではない、この善悪は有爲對待のものにて其實は浮雲の如きものぢや。

●過得荆棘林斫倒梅檀林 故に佛身血を出す如き忌はしき荆棘林の極悪をも透り過ぎ、己が肉を割て親に供養するが如き馥郁たる梅檀林をも斫り倒して、是非善惡迷悟得失の邊量を超脱し、淨裸々赤洒々と眞裸にならなくては、眞實法中の孝子順孫とは申されない。

●直待年窮歲盡依舊孟春猶寒 この洒々落々たる境界を脱落身心底の人と申す、是くの如く脱落したのが佛法の年窮歲盡である。臘月三十一日である。昔し一僧が石門の慧徹禪師に向ひ、年窮歲盡の時如何と問ふたれば、禪師の答へに、東村の王老夜錢を焼くとある。錢とは紙錢の事である。紙錢を焼て土地神を祭るのが、彼地の習俗である。併し紙錢を焼盡せば跡に何も残らぬから、好箇歲盡の時節といふもの。即ち正位は本來空界無物の當體現成である。其後又その僧が開先の善遊禪師に對ひ、年 歳 の時如何と問ふたれば、禪師舊に依て孟春猶寒しと答へられた。左

るほど本來空と悟りても雪の降る夜は寒くこそあれ、年窮り歲盡きたればとて左のみ替つたこともない。今日も矢張昨日の如く餘寒が嚴しい。是れ正しく大地自漫々の徧界不曾藏である。前答は正位の空界よりし、後答は偏位の色界よりせられたので、流石は石門、流石は開先、何れも優劣はない。實に百發百中である。さはあれど尙ほ仔細に點檢し來れば、一得一失ともいふべきか。永祖はこの二答を概括して一答に之を拈じ、今夜僧あり永平に年窮歲盡の時如何と問は、他に向つて道はん。前村深雪の裡昨夜一枝開くと、前村深雪裏は身心脱落の當體、昨夜一枝開は脱落身心の現成である。偏位を究竟すれば正位、正位を究竟すれば偏位にて、色即是空、空即是色の新陳代謝である。

●佛法身在甚麼處也 サア正當恁麼の時、法身法性の臭味が何れの處にかある。香な臭味の抜けた所が法身の脱體露現である。サアソコで脱體露現の昔話がある。青原の僧に答へられた逸話がある。これは實に青原の法身脱體の活文字である。

### 本 則



● 舉僧向青原如何是佛法大意小官多 原云虛陵米作麼價老將不

● 舉僧問青原如何是佛法大意 問話の僧も禪門の流れを汲んで居る丈あつ

て五時入教ぢやの禪定解脱ぢやの有無迷悟ぢやのとコザくしいことは問はず、極善の栴檀林も極悪の荆棘林も打超え佛法極の極妙たる世尊出世の本懐達磨西來の端的は何んなもので御座りませうかと、單刀直入に切込んだのである

▲ 小官ハ多ク律ヲ念フ 小役人といふものは何れの世に於ても痛く規則や法度の文字に拘泥して融通のつかぬものであるが問者の一僧自分では餘ほどエライ極則の處を商量する積りかも知らねど、高い眼から詠めて見るとまだく禪道佛法邊の臭味が取り切れない様である

● 原云虛陵米作麼價 上には上がある、流石は青原である、一向に禪道佛法邊の臭味がない、尊公は虛陵縣の者ぢやといふが、近頃の米相場は何んなものぢや、之が佛法の大意であらうか、尤も諸法實相の活眼から見れば米價の高下も株式の低落も皆是佛法である、我が日本にても之れに似寄つた話がある、彼の有名なる乞食桃水禪師に平素參禪に心を寄する一信徒が參禪の極意は如何なもので御座り

ませうか承りたいもので御座ると申し上げたれば、禪師は天井を詠め、去らば御座る醬油は土用の内に造り込むもの、味噌は寒中に作り込むもので御座ると許り答へて其餘は何事も語られなかつたといふ、青原の答話と同じである

▲ 老將ハ兵ヲ論ゼズ 老練着實なる大將軍になつてからは餘り八釜敷兵法軍界など談ずるものでない、機に臨み變に應じて軍機を應用するものぢやが、青原も佛法中の老將丈ありて、少も機鋒を顯はさぬ

頌云

太平治業無象 旄頭星野老家風至淳 爭如我道裏 只管村歌社飲  
窮鬼子快 那知舜德堯仁始成 活不徹也

● 太平治業無象 是れより以下の四句は始終一貫して本則の大意を頌せられたのである、天童の正覺禪師が正覺の大活眼を開いて青原大師の五臟六腑を見抜かれての拈提である、否な青原も亦腹一杯に佛法の大意を吐露して問話の僧に

答へられたのである。釋迦出世せず達磨西來せざるも佛法大地に遍ねしとも若し佛法を論ぜば一切現成ともある如く廬陵の米價が直に大地に遍ねき佛法の現成である。彼の三學であるの十二分教であるの、八萬の法藏であるのといふ紐立は、畢竟法身法性の本體を知らしめんが爲の道具に外ならぬ。さて太平の治業とは無事に治まつてある天下の事ぢや、治業とは天下の政治と申すこと、無象とは餘りに能く治まつて治まり目がないといふこと、堯舜の時などに裁判所や警察署があつたといふことを聞かぬ、井を掘ては飲み、田を耕しては食ふまでの事ぢや、天眞の佛法は無修無證無相無作で、一向に修證の迹形が見えぬ

▲旄頭星現スルヤ也々末シヤ 此星は西南に在て國亂を司るといふ、此星が

明かなれば訴訟がなく、暗ければ刑罰が濫るゝといふ、天童は無象と云はるゝが、殊によると此の惡星が天の一方に現はれて居りはせぬか

●野老家風至淳 田野に在りて耕す老夫の風俗は天下の政道あることをも

知らず、至極淳朴にして、裁判の音沙汰も罪科の輕重をも知らぬが如く、青原の境界は太平無象の家風で、因果修證の政教は無論、凡聖迷悟の階級にも墮ちぬ、直に淨

々赤酒々の家風である

▲爭カ如カン我ガ這裡田ヲ種エ飯ヲ搏メテ喫センニハ 此れは地藏主琛禪

師の語を借用して、更に淳朴なる家風を讃嘆せられたのである。問話の一作は佛法の大意として商量浩々地、青原は米價如何と遠く佛法邊の音沙汰を避けて居らるゝので地藏の境界に能く似てをる

●只管村歌社飲 只管にとは何事にも更に頓著なく、彼の田舎翁が山家村里

の草刈節で、或は山に入り、或は野に耕し、或は土地神の祭に汲ツと一杯ひつかけた時の心地は何うであらう、之が此世の極樂世界、寂光淨土の遊化三昧である、青原の境界は恰ながら此んなものであるとのこと

▲窮鬼子快活不徹也 窮鬼子とは貧乏神のこと、快活とは愉快のこと、不徹とは不盡の義、土地神もお祭に逢うて嘸かし不盡の愉快であらう、青原もその通り格

外に逍遙し、本地の風光を詠めて居らるゝ心地は、恰ながら貧乏神のお祭に逢ふた愉快よりもモット愉快であらう

●那知舜德堯仁 堯舜二帝は仁徳が廣大であるから、別に六ヶ敷い法律や政

命を布かれなかつたけれど、天下の人民が皆その徳に懐いて大忠を盡したといふ話がある、史記を見るに斯ういふ事が書いてある

帝堯天下ヲ治ムルコト五十年、天下ノ治カ不治カヲ知ラズ、億兆己レヲ戴クコトヲ願フカ、己レヲ戴クコトヲ願ハザルカヲ左右ニ問フニ知ラズ、外朝ニ問フニ知ラズ、在野ニ問フニ知ラズ、乃チ微服シテ康衢ニ遊ビ、童謠ヲ聞クニ曰ク、我が蒸民を立て、爾の極に匪ずと云ふこと莫し、識らず知らず帝の則に順ふト老人有り、哺ヲ含ミ腹ヲ鼓チ壤ヲ擊チ歌テ曰ク、日出て作す日入て息ふ、井を鑿て飲み、田を耕して食ふ、帝力何ぞ我に在らん哉ト

老子は大道廢れて仁義ありと云はれたが、堯舜の民は自から其の仁義道徳といふことを知らなかつた様である、後世に至り仁義道徳を説く様になつたのは大道が廢れたからの事ぢや、抑も佛門の中に於ても、迷悟得失や修證功勳を云ふものは、迷中の夢物語といふもの、ソコで圓覺經にも、始知衆生本來成佛、生死涅槃猶如昨夢とある、青原や、天童の様な人は大圓覺界に遊戲して居らるゝから、生死涅槃や煩惱菩提は、昨夜の夢妄想と思つて御座るから、佛法の大意など疑はけた話を相手にせ

ず、直に現成公案なる米價の活談をせられたので、恰なから堯舜の如き大聖である、と讃歎せられたのである

▲始メテ忠孝ヲ成ス 忠の忠とすべきは眞の忠でなく、孝の孝とすべきは眞の孝でなく、徳の徳とすべきものは眞の仁とすべきものは眞の仁徳とは云はれぬが、堯舜の如き大聖の徳が眞の仁徳といふべきもの、其民の如きが眞の忠出である、如く、荆棘林を過得し、栢檀林を斫倒した人でなくては、眞實佛門の忠臣孝子とは申されぬ、青原の如きが始めて眞實の忠臣孝子と申すべきであらう

### 第六則 馬祖白黑の話

#### 示 衆

示衆云、開口不得、時無舌人、解語、擡脚不起、處無足人、解行、若也、落他穀中、死在、句下、豈有自由、分四山相逼、時如何透脫

本則は達磨大師西來の大意を問答商量したものぢや、ドウせ不立文字、教外別傳と

いふ位ぢやから、教者法師の問答往復とは餘程その趣きが異つて居ると思はなければならぬまづ

●開口不得時無舌人解語 白い物を白いと云ひ黒い物を黒いと云ふのは當然の事であるから、誰でも口は開き得らるゝ、口を開いて黒白を云ふのは有舌人の解語と云ふもの、然るに鳥は白い鷺は黒いと云ふことは却々云はれるものではない、彼の經論釋の語話といふものは皆白い物を白いと云ひ黒い物を黒いと云ひ、長い物を長いと云ひ、短い物を短いと云ふたまでの事であるから、六ヶ敷いと云へば云ふものゝ道理を證じ詰めて行けば皆能く解し得らるゝけれど、祖門下の語話は其の反對であるから、非尋常では解し得られぬぢや、故に祖門下の禪語は都て裏面より觀察しなくてはならぬ、如何にあらんか、是れ佛と問はゞ、自覺々他覺行圓滿と云ふのが當然の解釋なれども、夫を乾屎橛とか麻三斤とか答へられた日には一寸窺ひが附かぬ、如何にあらんか、是れ祖師西來意との問ひに傳法救迷情とか、直指人心見性成佛とか、佛心宗を傳へて此方を救ふとか云へば一寸分り易いけれど、庭前の柏樹子とか、我が爲に禪板を過し來れとか、眞向に三十棒を興へるとか云ふ様な

事では、颯波離窺ひが附かぬ、又狗子に還つて佛性有りやと問へば有りとか答ふるのが至當であるのに、夫を無しと答へるのであるから、無舌人の解語といふものぢや、無舌人と申したからとて睡の事ではない、されば今の本則に我れ今日勞倦すと云ひ、頭痛すと云ふが如きも固より無舌人の解語と云ふものにて、說不得の處を說取して居るのである

●擡脚不起處無足人解行 無足の人とあればとて坐行の事でもなければ、兩脚を截断せられた人の事でもない、固より心地上の往來であるから、萬里無寸草の處でも、大地無寸土の處でも、自由自在に往來がデキル、去れば脚下線絶えて、自由自在であるから、十方世界は一足飛ちや、何も草駄天や、地夜叉の足を借るには及ばぬ

●若也落他設中死在句下豈有自由分 設は句を張て引き備へる所ぢや、古語に「天下英雄入吾彀中」と云ひ、莊子の中に「遊於羿之設中、中央者、中也、而不中者、命也」とある、故にこれは彀とか筈とか、陷阱とか云ふ様な意味に見たらば、宜からう、今は本則の勞倦頭痛不會等の言句を指したもので、彼の僧が勞倦不會等の言句を正直に受けたのは、句下に死在したと云ふものぢや、其んな事で、ドゥして祖師西來

の大意を會得し心地上往來の自由が利くものぞ、兎や角する内に

●四山相逼時如何透脫涅槃經第二十七卷に「我說四山即是衆生、生老病死」とある世間の俗語に禪學は面白いか、活潑であるとか云ふけれど、其んな道樂的のものではない、祖師門下の參禪學道は即心是佛を認得して分段變易の二生死を透脱し身心を脱落せんが爲めぢや、生老病死の四山を透得して無爲寂靜の大涅槃に入るが爲めのみぢや、然るに他の設中に落ち句下に死在して愚闢くして居ては、逆も生死岸頭に於て大自在を得ることは出来ぬぞとの説法ぢや

本則

舉僧問馬大師離四句絕百非請師直指某甲西來意若識這僧少

力大師云我今日勞倦不能爲汝說已有一瓶問取智藏去更添帆僧

問藏却受人藏云何不問和尚好本僧云和尚教來問可然藏云我

今日頭痛不能爲汝說問取海見去我不可作馬師僧問海根苦

海云我到這裏却不會甜瓜徹僧舉似大師索取草大師云藏頭白

海頭黑更參三

●舉僧問馬大師此僧は孰れ鈍漢と見えるされど正直ものぢや、却々法に於て親切ものぢや、今時の若僧などは天地の相違がある何故かと云ふに、今時の漢は折角良師の許へ安居して居ても、遂に自から法門上の問端を發して己れが疑點を晴らさうとは致さぬ、法益があれば睡り半分は聽いては居れど、その不審を聽きに行うともせぬ、ソコで其の法益が解つたのやら分らぬのやらサツパリ譯が分らぬ、ツマリは分らんのであらう、吾な初めから聞うといふ願心も道心もないからの事ぢや、して見れば何の爲に師家の許へ掛錫して貴重な粥飯を費して居るのやら分らぬと云ふ事になる、之を俗にひやかしかし、雲水と云ふのである、殺つぶしと云ふのである、此んな殺つぶしが多くあるから佛法が衰へたのである、仍てドゥぞ此僧の如くにありたいものぢや、次に此の馬大師とは馬祖道一禪師のことにて南嶽懷讓禪師のお弟子、百丈懷海禪師のお師匠様ぢや、勿々古今獨歩の大善智識である

●離四句絶百非請師直指某甲西來意

此僧も彼方此方と迂路くした所から見れば如何にも鈍物の様にはあれど、この問端を發した所から見れば梁の武帝が達磨に向つて聖諦第一義と問ふたより餘程氣が利いて居る、勿々ドツして一見識を具して居る併し乍ら四句百非は外道戲論の法として佛法には曾て談ぜざる所のものなることをも辨へずして如何にもエラさうに發問したのは氣が利いて間が抜けて居る然るに此僧の思う様四句百非を離れては口が開けぬであらうと煎じ詰めたのであるけれど、流石は馬大師、その位なことは百も承知、二百も合點であるからチツトも困らぬ、スポツト外された、その外されたのはドツであるかと云ふに、西來直指元無言從來妙唱不關舌とあるが如く、此宗は元來言外韻畧なることを知らしめられんが爲め下の如く答へらる

▲若シ此僧ノ問頭ヲ識ラバ人ノ多少ノ心力ヲ省カン

イヤ四句を離れ百非を絶したならば夫が取も直さず西來の直指であるかも知れぬ、故に此僧が徹底問頭の宗旨を知つて居たならば他人の心力舌頭を借るには及ばぬであらうに

●大師云我今日勞倦不能爲汝説

語路はよく分つて居る、この言中には百雷の落るが如き響があるけれど、聞く耳が無ければ聞き取ることが出来ぬ、黄葉禪師ならば直に三十棒を喰はせる所であるが、馬祖はヲトナシク老婆親切を以て斯くは答話せられたので、この答話が直に西來の直指である、馬祖の五臟六腑も此外にはない、是が無舌人の解語ぢや

▲已ニ舩中ノ月有リ

問話の僧も早已に西來の般若船に乗り込んで居る、其處へ大師の答話が有つたのは、その船中へ月の光が指し込んだ様なものぢや、惜い哉此僧には氣が附ぬ

●問取智藏去

智藏といふは大師の宗旨を了得して居るエライ和尚と見え、或は西堂和尚であるともいふ

▲更ニ帆上ノ風ヲ添フ

已に心月の光明を放ちやられた上に更に追手の風を添へてやられたのである

●僧問藏

僧は大師の語勢を聞き取ることが出来なくて、通常の語話と思ひ、夫を眞受にして、ノコノコと智藏の許へ往いて初めの如くに發問いたしたものと

見える

▲却テ人ノ處分ヲ受ク 祖師西來意とて別なことはない、自分の鼻で自分の息をすることを知り、自分の口で自分が飯を食うことを知らば夫までの事ぢや、永祖は空手還郷意、無佛法、唯認得、眼横鼻直と申された如く、自心で自心を明らむれば、何も他人の處分や指揮を受けるには及ばぬぢや、然るに此僧は迂路くして、人の口先に付き廻って許り居る

●藏云何不問和尚 智藏も流石の者であるから、寸と僧の脚下を探ッて見た、然るに此僧は探られるとも知らぬ

▲好本多同 イヤ馬師の好き手本を習はれたものと見え、その筆蹟が如何にもよく似て居るかと思はれる

●僧云和尚教來問 僧は早く脚下を探られたことをも知らず、眞面目になつて、イヤ實は斯々の次第で老師の所へ參問するのでござると、何處くまでも他に問ひさへすれば解ることの様に思つて居るのは鈍漢野郎である

▲可應靈利 如何にもエライ利口ものぢやとはヲダテ、其實はマア餘ッ程の

馬鹿ぢやと萬松より評殺されたのである

●藏云我今日頭痛不能爲汝說問取海兄去 海兄とは謂ゆる百丈懷海禪師の

事である、叢林百般の規矩を定めたのは此の海禪師で、馬祖大師の應量器である、吾な大師の嫡嗣である、智藏の頭痛と大師の勞倦とは同じ様な似せ病であらう、折角來て呉れたは大義で有ツたが、ドゥも頭痛が劇しいからその話しがして居られぬ、氣の毒ぢや海兄に問うて呉れと眞面目な顔で云はれたものぢやに依て、僧はまた眞受にした

▲我レ馬師ノ弟子ト作り得ズンバアル可カラズ

ドゥも馬祖も馬祖ぢや、弟子も弟子ぢや、我れ萬松も是非ドゥか馬師の弟子になり度いものぢや、成らずには居られぬ、何故かといふにドゥも其の答話がウマイ

▲僧問海 此僧も或る方面から見れば阿房の様なけれども、求法の精神に至つては實に熱心なものぢや、丁度臨濟大師が三度も四度も佛法的の大意を問はれた様ぢや、若し此僧が一旦窠臼を掀したることならば、度エライ者になるであらう、其の見込所があればこそ斯くも親切に提撕せらるゝのである

▲苦瓠ハ根ニ連ツテ苦シ にかい瓠はその根まで苦い馬鹿な者は何處くまでも馬鹿ぢやと抑した様なけれど其の内心では勿々根機の強い僧ぢやと揚した所がある

●海云我到這裏却不會 イヤ成る程其處は己れにも頓と分らんぞと云はれたがこの不會は達磨の不識と地藏の不知と同様ぢやこの不會は最も親切な提撕ではあるけれど問話の僧には蛙面水鹿角蜂でドウも感じが無いらしい

▲甜瓜ハ蒂ニ徹シテ甜シ 甜瓜はその蒂まで甘い大師も知藏も懐海も皆その本が一つであるから直指西來意の味はチツとも變りがない又變つてなるものでもない

●僧舉似大師 此僧は未だドウしても直指せられて居られながら西來意を他に求めて居る困つたものぢや

▲草鞋錢ヲ索取セヨ 彼方に往つては刎ね付けられ此方に往つては刎ね付けられ他の舌頭に乗つて東奔西走したのも實は馬師故であるから馬祖よりその草鞋錢だけは貰うたが宜しからうと評殺した様ぢやが其實は脚下を照順せよが

や

●大師云藏頭白海頭黒 ムンさうか智藏は老僧であるから頭の髪が白かつたてあらう懐海はまだ年が若いから頭の髪が黒かつたてあらう其方はよく見て来たかなドウぢやといふ大師の言葉であるが其僧はドの様に聴き取つたか颯波離分らなんだが其處まで穿鑿するほどの必要もないが本當ならば此處で氣が附かねばならぬ筈である昔は兎もあれ畢竟此の公案を拈擧するは古人の評判をするのではない今日天下四海の禪流をして西來意を了得せしめんが爲めなるぢやに依てドウぞ馬師の言下に於て大悟して貰ひ度いものぢや若し未だ不會ならば更に蛇足を附けやう藏頭白海頭黒これ程マア脱躰現成の直指はあるまいぢやないか徧界不會藏ぢや趙州は不取敢庭前の柏樹子と答へられた是も徧界不會藏ぢや即今拙訥ならば後園の松竹と答へるかも知れぬ或は其僧に對して智藏懐海斯くも汝が爲に西來意を直指す汝未だ之を知らずやと云つて頂上より一棒頭を與へるかも知れぬ然るに彼僧は始終他の殻中に落ち句下に死在して少しも自由の分が無かつた様子である利口ぶつて發問したは宜けれど頓と龍頭蛇尾であつた



▲更ニ參セヨ三十年 萬松思うに問話の僧にはドウも馬師の言句が合點し得られぬであらうから、マア氣長に二三十年も親參實究したが宜からう、イヤ彼僧の事とのみ思はぬが宜い萬松座下の者も矢張さうぢや、イヤ萬松座下に限つた事はない今日天下四海の禪流も亦さうぢや

頌云

藥之作病返怪良醫鑿乎前聖脈亂病之作醫以藥下藥必也其誰天莫是  
白頭黑頭兮克家之子一密燒就有句無句兮截流之機更使山堂々々  
坐斷舌頭路再活一死不應笑毗耶老古錐只得一楔

初めの二句は本則の大躰を頌し、中の二句は智藏と懷海との二人を頌し、後の二句は馬大師の應對を頌したものぢや

●藥之作病 藥は病を療するが爲の物ではあるけれど、其人に依りては還つて病となることがある、何故かといふに下劑を用ふべき所へ吐劑を用ひ、吐劑を用ふべき所へ下劑を用ひたりすれば、其藥が却つて病を引起す、或はその分量が過ぎ

たりなんどすれば大變な病となることがある、佛が空の病外道の撥無因果頑空等をを癒さんが爲に三世實有法躰恒有の有法を説かれたれば、聽く者が皆諸法實有なりと執着して有の病となつた、ソコて是てはならぬと此の有病を除き去らんが爲め、諸法皆空として、諸法本來無自性なる旨を説かれたれば、又その空に執着して因果を撥無する善星比丘の様な者が出來た、是も亦藥が病となつたのぢや、ソコて後に非有非空の中道を説いて有無邊見の病を治療せられた、故に藥が病とならぬ限りではない、今もその通り祖師西來直指端的の旨は非常な妙藥であるけれど、問話の僧の爲には一種の病と作つたことぢや、而も普旨に入居る様ぢや

▲胡人乳ヲ飲テ返テ良醫ヲ怪ム 支那では都て他國を胡國と申したものの、今は印度人の事を指したもの、故事は涅槃經にある、昔し問懸なる一人の國王が、又鈍愚なる一人の醫師をかへて澤山に俸祿を與へ、諸病を療治せしむるに純ら乳藥を用ひた、後に又聰明なる醫師があり、八種の術を以て善く衆病を療じ且つ王の爲に種々の醫方を説いたれば、王は殊の外之を信じ、舊醫の愚なるを知り、國內に布告して病があるとも乳を藥としてはならぬと申し傳へた、然るに其後王が病に罹り

此の良醫に診察を命じたるに、乳藥を用ひ給へと勧めた、ソコで王が汝は今氣が違  
うたか、先には乳は毒であるから服するなと云ひ、今は之を服せよと云ふは、奈轅ド  
ウした事ぢやと怪んだ話がある、今もその通り藥が毒と作つて病となることもあ  
れば、毒が藥と作つて病となることも有るぢやに依て、天童が藥が病と作ると云は  
れたからとて、天童を怪まぬ様にしたが宜い

●鑿乎前聖 常啼菩薩は般若波羅密が一つの病となつて東方に奔走せられ、  
善財童子は華嚴法界の法門が一つの病となつて南方五十三の善知識を訪うて行  
脚せられたといふ前聖の例もあることゆゑ能々鑑みなくてはならぬ、今問話の僧  
一人のみではない、昔より之が爲に苦んだ人は澤山にある

▲師多ケレバ脈亂ル 醫師が多ければ脈の取り方が違ひ、船師が多ければ船  
が山へ登る様なもので、大勢の前聖に許り鑑みて居ると一々皆違ふから、それより  
も自分の脈は自分で取て見るに若くはない

●病之作醫 四句百非は其人に在てこそ、膏肓必死の難病ではあるけれど、煩  
惱即菩提生死即涅槃といふこともあるので、其人に在ては又非常なる醫藥となら

ぬ限りでもない、仁王般若經の中に、菩薩未だ成佛セサルトキハ、菩提ヲ以テ煩惱ト  
爲シ、菩薩成佛ノ時ハ煩惱ヲ以テ菩提ト爲スとある、即ち病が醫藥となつたのであ  
る

▲藥ヲ以テ藥ヲ下シ毒ヲ以テ毒ヲ去ル 正師家分上の手中にある事、良醫  
が一ツの手加減で自由な治療をする如く、佛も始めは有教の藥を與へられ、後に空  
教の藥をもて、有教の藥を残りなく下して丁まはれた、趙州有時は無と説き、有時は  
有と説かれた、寶劍が手にあるから殺活自在ぢや

●必也其誰 勞倦とか頭痛とか、不會とか云はれたのは、病が四句百非を醫治  
する藥となつたので、毒を以て毒を去るとは此事であるが、そは必竟何人であらう  
かと下の句に移る、イヤ、外の者ではない……

▲是レ天童ナルコト莫シヤ 誰れであるかと云はるゝが、其れは大方天童正  
覺禪師様であらう、其次が萬松老人であるかも知れぬ

●白頭黒頭兮克家之子 殺活自在の妙用を具して居るのは先づ白頭の智藏  
や、黒頭の懷海であらう、此等二人は實に馬大師の家風を興して克くする所の孝子

順孫である

▲一密ニ燒キ就ス 密は瓦を燒く竈なるが、何うも同じ模型に入れて拵へた瓦の如く、智藏も懷海も克く同じ様に出来たものぢや

●有句無句分截流之機 有句無句とは一異有無の四句を畧稱せられたのである。截流とは衆流を截斷すると申すこと、機とは機輪とてハタラキと云ふほどの意義になる。流は流注識と申して、微細に生滅する細分別のこと、衆流とは四句百非種々無量の分別意識といふことぢや

又本録八十七則に、疎山瀉山ニ到テ便チ問フ、承ル師言ヘルコト有リ、有句無句ハ藤ノ樹ニ倚ルガ如シト、忽然トシテ樹倒ルレバ、藤枯ル、句何レノ處ニカ歸ス、瀉山呵々大笑ス、と本則の有句無句は此の類則から出た様にもある。瀉山の呵々大笑は眞に衆流を截斷せられた活機輪であるが、今もその通り、四句百非を邪魔物にして難儀がる一僧の衆流をば、勞倦頭痛不會等の活機輪を轉じて、一刀の下にスポツと截斷して遣られた手際といふものは實に千古祖門の美譚であるぞと格外に讚歎せられたのである

▲更ニ瀉山ヲシテ笑ヒ轉々新クナラシム イヤ天童和尚その様に有句の無句のと古則を擔ぎ出されると、疎山の如く再び瀉山の爲に笑はるゝかも知れませぬぞ、チト低い聲で仰せらるゝが宜しいて御座らう

●堂堂坐斷舌頭路 堂々は容貌の盛大なる貌さて、馬大師が最後に藏頭白海頭黒と云はれたのは、流石は天下の大善知識だけありて、如何にもノツシリとして、イヤ西來意として別なことはない、藏頭白海頭黒ではないか、現成公案藏すに處がない、佛法の極妙は大地に徧滿して居る何を苦にして其の様に彼處此處と飛び廻るのぢやと、鋭き舌劍を振うて、天下人の舌頭を一時に坐斷して、了まはれた、イヤ何うも惠來ものぢや

▲一死再活セズ 舌を斷ち斬られたからには、モウ息の根が絶えて、馬大師以後、誰れとて口出しをしたものはない、又到底口は開けない

●應笑毗耶老古錐 此れは淨名經の問疾品を引用せられたので、彼の維摩居士は、印度の毘耶離城(廣嚴城ともいふ)に住して居られた、老古錐とは錐の古くなつて角の取れたので、功成り名遂げて身退くともいへる大功無功の境界を形容した

ので、實は尊稱の詞である。彼の維摩は辯舌の爽かな居士で、多數の佛弟子も大いに閉口した位の難物であるが、文殊の爲に無言無説無示無識諸の問答を離ると云はれたので黙然と黙つて了ふた。可笑いわけぢや、夫れといふのが、文殊の爲に舌頭の路を坐断して了まはれたからの事ぢや、今も亦その通り馬大師の爲に舌頭の路を断ち切られたものぢやに依て天下人が残らず閉口して了ふのである。可笑いわけぢや、仔細に考へて見れば又面白いことである。爾うして又彼の雄辯滔々たる維摩が、不二門を文殊に問はれて黙然したのは甚だ笑止なことぢや、默然しなくても、馬祖父子の如く無舌人の解語を弄すれば何とも言はれる筈ぢや、然るに一言も答へが出来ないで閉口して了まつたのは、馬祖父子に比して笑ふべきであるぞと、假りに維摩を貶して、馬祖父子を褒せられたのである。

▲只一楔ヲ得タリ 靈瑞本には楔に作れども、萬松老人從容錄と題する本には概に作る。楔はカツの音、概はケツの音、今は概の方を正しきものとす。傳燈錄第十

二卷烏石山靈觀禪師の章に、師一日水ヲ引ク次テ僧有リ來參ス、師引水ヲ以テ横ニ抽テ、之ヲ示ス、其僧便チ去ル、師暮ニ至テ小師ニ問フ、適來ノ僧何ノ處ニ在ルヤ、小師曰ク發シ去レリ、師曰ク只一概ヲ得タリ、と之が其の出據である。概は木の切れといふこと、俗に謂ゆるヘラといふこと、雲門に乾屎概の話がある、只一概を得たとは其の一半を許された言葉である。概を一本の筈として見たらば、分り易いであらう、筈は二本揃うてこそ始めて用に立つ、一本では間に合はぬ、默の時に説があり説の時に黙があつてこそ、祖宗門下の大施門ぢや、然るに維摩の如く、只單に黙つて了まつたのでは不二の法門と云はれない、有語中に無語、無語中に有語といふので、眞の入不二門ともいふべきものぢや、馬祖父子の如く、口を開き得ざる時に無舌人の解語を爲し、脚を擡げ起さる處に無足の人が行くとを解するので、兩概を得たといふべき者、只默然だけでは且く一概を得た迄のと故、天童の笑はるゝも道理である。

### 第七則 藥山陸座の話

#### 示衆

示衆云、眼耳鼻舌各有一能眉毛在上、士農工商各歸一務、拙者常閑、本分宗師如何施設

●眼耳鼻舌各有一能眉毛在上

諸人者何と思うぞ、眼耳鼻舌は各々知ての通

り、互に一能力を具して夫々働いて居るではないか、然るに何の能力もなき眉毛は一番その上に在て威張て居る、その上に在て威張る所以がなくては叶はぬ、評ちや

●士農工商各歸一務、拙者常閑

士は君國の爲に奉職して毎日官省に勤めて

居る、農は年中田地を耕して居る、工は年中家屋器具を拵へて居る、商は物品を貿易して家國の融通を謀つて居る、然るに拙者どもは織らず耕さずして四民の汗膏を嘗め何事をも爲さずして、何時も閑散無事の日送りぢやが、何と夫て殺罰が當りはせぬであらうか

とは只文字面一片の言葉であるが、萬松老人の底意は、此の言外に無限の意を示された様に聞える、先づ此方の聴取るところでは斯うである、眼で見ると一代經律論の文字や耳で聞く所の講釋は、鼻と舌とはその學んだり説いたりする所の道具で一

つ缺けてもならぬ、經に經師あり、論に論師ありて、文字法師や、教者法師が、水も洩さぬ様に生より死に到るまで口も亦足らずとして働いて居る、然れども佛法の總府たる我が正傳門下より詠むるときは皆眷屬に過ぎぬ、眷屬であるから亦働かなくてはならぬ、然るに我が禪僧門下は手に經卷を取らず、口に轉迷開悟を語らず、常口打坐して身心脱落の工夫ばかり、實は眉毛の如く諸宗の上に在て閑散無事なるが如くぢやが、無事是れ貴人の行履と施設がなくてはならぬ

●本分宗師如何施設

然らば我門本分の宗師家分上たるものは、ドノ様な手

段を以て學人を接待せらるゝであらう、大巧は拙の如しといふ老子の格言もある事ぢやが、本分の宗師となれば拙者常に閑なりて、あまりエラ走りに説法は致さぬものぢや、達磨も九年面壁、魯祖も常に面壁して、文字法師の様に口軽く勸化はせられなかつた、藥山も亦本分の宗師であつた、試みにその施設を見るがよい

### 本 則

舉藥山久不陞座、如靜院主白云、大衆久思示誨、請和尚爲衆說法

便重不山令打鐘衆方集那事悠悠山陞座良久便下座歸方丈場一  
 話主隨後問和尚適來許爲衆說法云何不垂一言大海若知足山  
 云經有經師論有論師爭怪得老僧頭蛇尾

●舉藥山久不陞座　この藥山といふは遠磨大師よりは九代六祖大師よりは四代目の祖師にて、惟儼といふ青原下の方である素より夫れ遠磨門下であるから、世の經論師の如く名相を分別する様なことは成さらぬ、然らば名相佛法を知られないのであるかといふにマサカ走てはない、知てく知り扱かれたから、其んなものを何時までも珍重しては居られぬ、佛の說法は船筏を見た様なもので、渡り切て仕舞へばモウ用がない、文字を書くものが何時までも手本に縋つては居られぬ様なものぢや、扱て陞座といふは文字の如く高座の上に陞る事ぢや、高座に陞るは勿論說法の爲めである、然るにこの藥山和尚は滅多に陞座說法を致されぬ

▲動ハ靜ニ如カズ　その久しく陞座せられぬ所が、藥山の藥山たる所以ぢや、故にあまり物騒がしく法益や小參をいたされぬが却て増してある

●院主白云大衆久思示誨請和尚爲衆說法　院主とは都寺とか、鑑寺とか、又は維那とかいふ役目の和尚と見える、方丈が餘り久しく陞座說法せられぬものぢやに依て、自から方丈に登り、ドウか合山の衆が、久しく御垂誨を渴望して居りますから、御說法をお願ひ申し度いものでありますと、何ぞ珍らしい事でも聴く積りがあつたものと見える

▲重キニ便シテ輕キニ便セス　上根の坐禪は諸佛出世の事を語らず佛祖不傳の妙を悟らず、飢來れば喫飯し、困じ來れば打眠といふのが、藥山の家風ぢや、その說法せぬは上根の重きに便りして中下根の輕きに便りせぬのであるぞ、院主どのは尙だ和尚の家風を知らぬと見える

●山令打鐘衆方集　鐘を鳴らして大衆を法堂に集めるは叢林の規則である、藥山も院主があまりネダルものぢやに依て止むなく、それでは說法して聴かさうから鐘を打てとて鐘を打たしめられたれば、サア說法ぢやと合山の衆が一時に法堂法座の前方へ整列いたした

▲頭ヲ聚メ和ヲ作メ那事ゾ悠々タル　西瓜頭を澤山集めて何をすのぢや、

閑人も多く居たと見える其んなにギャツイて見ても藥山の説法は逆もく聞き取る事は出来まい

●山座良久便下座歸方丈 此處が即ち藥山眞の説法ぢや世尊座の當體と同一轍ぢや若し院主に眼があつたならば文殊大士の如く直に白槌して諦觀法王法如是を唱へねばならぬ所であるけれども無眼子ぢやから何とも仕方がない又院主の外に座良久の第一義を見て取る者が一人もなかつたものと見える若し其時此方が居たならば直に和尚の説法已に了ると告るであつたらうソコで藥山も失望の體にて方丈へ引ッ籠まれた

▲一場ノ話 一ヤ一言も云はずに歸方丈の所が禿僧門下一場の談柄即ち商量すべきの種となつた

●主隨後問和尚適來許爲衆說法云何不垂一言 藥山は憐兒忘醜して態々座良久までせられたものを如何に無眼子の院主なればとてあんまりぢや併し正直な院主ではある是が實に馬鹿正直といふものであらう

▲大海若シ足ルコトヲ知ラバ百川應ニ倒流スベシ よしや長々しい説法を

して見られた所で底抜の器を見た様なもので足ることを知る時節はあるまい若し足ることを知たならば座良久の所で知らなくてはならぬ知つたならば文殊大士の如く白槌せにやならぬぢや

●山云經有經師論有論師爭怪得老僧 院主どの其のやうに此の老僧を意地めて貰うては困まる老僧は只如來の佛心印を傳授するのが目的である世の經論師の如く佛の舌頭に乗て無駄口を利くのが役目ではない無駄口が聴き度いのなら早速送行して彼の經論師の門にても投じたがよいさうするとなあ立板に水を流すが如きの説法が幾等でも聽かるゝワ老僧が説かぬからとて何も怪むには及ばぬ

▲惜ム可シ龍頭蛇尾 スラリと歸方丈せられた所は龍頭であつたけれども經に經師あり論に論師あり云々と老婆親切に説法せられた所はドウも惜しい哉蛇尾である若し院主が後から方丈に往つた時何事をも云はず面壁でもして見せられたならば餘程面白かつたであらうに

頌云

癡兒刻意止啼錢何堪作良駟追風顧影鞭便起雲拂長空巢月鶴下樹  
底一場寒清入骨不成眠作開眼

●痴兒刻意止啼錢 馬鹿な嬰兒が八釜敷啼き叫ぶとき其母が且くその啼を止めんが爲め楊の葉の黄なるを以て是れ啼くなよく錢を遣るから泣くなよとてその黄葉を與ふれば痴兒は本當の錢かと思つてその啼を止めるされど其の黄葉は固より眞の黄金ではないといふことが涅槃經の嬰兒行品にある今も其意を取て藥山下の院主及び大衆と藥山との關係を頌せられた都て佛祖の言教は止啼の黄葉に過ぎざるものにて一つも眞實のものではないされども痴兒が黄葉を以て黄金の想ひを作すが如く藥山下の院主大衆を始め滿天下の衆生は佛祖の言教だといへば全く黄金の様な想ひを爲し意に刻みつけて居るからして佛も止むなく黄葉とは知りつゝ大小權實の説法をせられた藥山も亦止むなく陸塵良久せられたこの陸塵良久も早く是れ止啼の黄葉である

△何ノ用ヲ作スニ堪ン 天童の申さるゝ如く實にその小供だましは何の役にも立ちせぬ役に立たぬから佛も四十九年一字不説といひ祖師門下にも不立文字と説く譯ぢや

●良駟追風顧影鞭 鞭影といふのが當然であるものを影鞭と使ふたのは、顧として韻をふむに都合が悪いからの事ぢや、この鞭影に就ては阿含經四馬の譬と、外道問佛の話との故事が含まれてある、追風といふは秦の始皇帝の時七種の馬が有て第一の名馬を追風と申したさうぢや昔し佛の所へ外道が來て有言を問はず無言を問はずといふたとき佛は何とも仰せられず端坐良久せられた、スルと外道は何と想うたか、大慈大悲我が迷雲を開いて我をして得入せしめ玉へりとして禮拜し去つた時に阿難尊者が佛に向ひ、外道は何の道理を見て禮拜し去つたので御座るかと問はれたれば佛の仰せに世の良馬の鞭影を見て行くが如しと答へられた事がある

又阿含經の四喻とは四種の馬が有て第一は鞭の影を見れば直に驚いて走る、第二は其の毛に觸れば驚いて行く、第三は鞭が肉に觸れて始めて驚く、第四は鞭が骨に



徹して漸く走るとある、今も亦院主や大衆が良馴追風の如き機敏の者で有つたならば、陸座の鞭影を見るや直に大慈大悲我等が迷雲を開きたまひ、我等をして得入せしめ玉へりと云つて即ち禮拜せにやならぬ所である、然るに經に經師あり論に論師ありとて鞭を骨肉に觸れられても未だ眼が醒めぬとは、さてく氣の毒千萬な者どもぢや

▲踢起シテ便チ行カン 藥山下の院主及び大衆が若し千里の名馬であつたならば、その鞭影を見るや一足飛びに飛び去るであつたらうに、鈍馬許りぢやから仕方がない

●雲拂長空葉月鶴 さて藥山の境界を云ふて見やうならば秋の夜サ一點の雲もなく虚空が奇麗に澄み切つた時には、明月が皎々として萬象を照して居る時に高松の上に巢をかけて居る白鶴が高きにとまつて居るが、藥山の境界を形容して見るとドウもこの鶴を見た様に思はるゝ、モッ經論釋疏や禪道佛法の雲霧は一點もない

▲樹下底一場の懺懼 成るほど高くとまつて居るは皎潔の様ではあるけれ

ど樹下底、即ち向下より見るときは、孤峯獨宿の漢ともいふべきものにて、誠に早や懺懼千萬ぢや、樹上獨醒の境界も上根を接するには宜しからんかなれど、中下根には何の用にも立たぬ、向上向下回互宛轉が即ち祖宗門下の活機輪といふものぢや、懺懼とはハヂと訓す

●寒清入骨不成眠 月はサヨく〜とさゝ渉り、風はソヨく〜と吹き拂うて寒サが骨に染み入るものぢやから、眠らうにも眠られぬ、彼の無念無想なる鶴の如く、藥山は常に非思量の蒲團上に安座して居らるゝ、三祖大師も申された如く、眼若し眠らずんば諸夢自から除く、この藥山は最早一切の顛倒夢想を遠離して涅槃を究竟して居らるゝから、平常心是れ道と拈じ、事煩はしく大衆の爲に説法をもなさらぬぢや

▲眼ヲ開イテ夢ヲ作ス 併し天童その様に賞めらるゝけれども、高松の目より眺むるときは、藥山も未だ眼を開けて夢を見て居らるゝかと思はるゝ

### 第八則 百丈野狐の話

### 示衆

示衆云記箇元字脚在心地獄如箭射一點野狐涎。嚙下三十年吐不出不是西天令嚴只爲默耶業重曾有悞犯者麼

●記箇元字脚在心地獄如箭射　この文句の出處は傳燈錄の中に趙州の申された詞がある若記一箇元字脚在心地獄作野狐精とあり又碧巖錄第二十八則にも記得箇元字脚在心地獄如箭とあるさてこの元字脚とは何の事であらうか、ドウして此の元字脚を記して心に在けは地獄に入るものであらうか、或る解釋には元の字の上の二の字を頭と見做し下の凡の字を脚と見做すので凡は凡夫の凡の字であるから、少しでも凡情を認めたならば地獄に入るのであるとの事であるが、是は似て非なるもの、逆も人前に説向することは出来ぬ何ぞかといふに凡の字は音は仁にて人といふ字なれば凡の字とは全然縁のかけ離れた字であるからの事、然らば趙州和尚はドウ云ふ考へから彼んなことを云はれたのであらうか、ドウもその註釋がないから意味が分りかねる仕方がないから野僧は野僧だけの考へを

述べて置く佛法は何を根本土臺と爲したるものであるかといへば一心と云はなければならぬ三界唯一心、心外無別法と説くので萬法の根山とする所は一心である、一心を根元として迷悟苦樂の状態より宇宙萬象までを説き明すのであるから、一心は佛法の元字である、此の元字に註脚を附けたものが一代藏經の文字葛藤である、故に天桂禪師も名相言句の元字脚と申された、此んな小六ヶ敷いことを持出さなくても宜かりさうなものぢやが、此本則が野狐の語頭であるから、夫れに因んで永劫作野狐精とある趙州の言句を適用し、且ツ碧巖の言句をも適用してこの則の示衆にせられたもので、其んなに六ヶ敷い程の者でもない、萬松老人の不落因果の著語に、一句合頭の語萬劫の繫驢轡とある通り、昔しの百丈が不落因果と云ふたものも箇の元字脚を記して心に在いた一人であるといふことを知らしめんと、引合と見える併し彼の百丈は畜生界に墮したので地獄に入つたのではない、故に地獄に入ること箭の射るが如しといふは此に當らぬけれど、元々古語を適用したのであるから、地獄の文字は軽く見て置けば宜い、兎に角不落因果が萬劫の怨となつて異生に墮したとすれば氣の毒なものぢや、座下の諸人も佛祖の言句葛藤に縛

ばられぬ様元字脚を心中に留めない様に洒々落々たらねばならぬとの示意と合  
點して置けば宜からう

●一點野狐涎嚙下三十年吐不出 涎はヨダレ、嚙下は飲込むこと、チヨットて

も野狐の涎を飲だが最後、モウ三十年どころぢやない、千生萬生容易に吐き出すこ  
とは出来ぬ、とは何の事であらう、不落因果は野狐涎である、之を一點でも飲んだな  
らば、先百丈の如く五百生野狐身に墮ちねばならぬから、因果を味ましてはならぬ、  
因果ほど恐しいものはない

●不是西天令嚴只爲跋郎業重 跋は癡なりとある、犬の小さな時は何の辨へ

もない、それを跋といふ、故に跋郎とは馬鹿野郎といふ事である、結局は凡夫の事ぢ  
や西天の令とは釋尊の命令と申すこと、その凡夫野郎共が撥無因果の涎を嘗めて  
惡趣に墮するは、何も敢て佛の嚴しい命令(耶蘇教では神の嚴命といふけれど)とい  
ふ譯ではない、全く渠が惡業の重きが爲めてあつて、佛の方から何と思つて見ても、  
自業自得の墮落を救ふ譯には行かぬ

●曾有悞犯者麼 扱てその因果の法律を悞つて犯した業障甚重の者があつ

たといふ例があらうか無かるまいか否なるも、澤山にあるが其中ではまあ  
有名な話しといへば百丈野狐の因縁であるから、それは本則に就て見たが宜い

### 本則

此の話頭は古今の叢林に於て非常に入釜敷い古則公案となつて居るので、學人  
も師家も殆どこの野狐精に誑惑されぬ者はない、今この本則に掲げてあるは、詢  
に簡短であるからその因縁がチト分りかねる、依て讀者の便覽に供するが爲め  
○天聖廣燈錄に記してある因縁の全部を此に掲げ、而して後野僧の所見を述る  
ことに致さう

○百丈大智禪師懷海和尚凡參次有一老人常隨衆聽法衆人退老人亦退忽一日不  
退師遂問面前立者復是何人老人曰某甲是非人也於過去迦葉佛時曾住此山因學  
人間大修行人還落因果也無某甲對曰不落因果後五百生墮野狐身今請和尚代  
一轉語貴脫野狐身遂問曰大修行人還落因果也無師曰不昧因果老人於言下大  
悟作禮曰某甲已脫野狐身住在山後敢告和尚乞依亡僧事例師令維那白槌告衆曰

食後送亡僧。大衆言議一衆皆安。涅槃堂又無病人。何故如是。食後只見師領衆至山後。巖下以杖指出。一死野狐。乃依法火葬師。至晚上堂。衆前因緣。黃葉便問。古人錯祇對。轉語。隨五百生野狐身。轉轉不錯。合作箇什麼。師曰。近前來。與備道。衆遂近前。與師一掌。師拍手笑曰。將謂胡鬚赤。更有赤鬚胡。

此は是れ事實の因縁であらうか、又は假設の因縁であらうか、野僧は先づ事實の因縁と認める

ソコで此の公案を見るに二種の見やうがある、永平高祖も之を二様に見られたものと見えて、その見方をば正法眼藏の中に一は大修行として之を見られ、一は深信因果として之を見られたので、眼藏を閲覽した人は皆能く承知の事である筈ぢや、未だ閲覽せぬ人は再三熟讀して其の宗趣を窺ふが宜い、その深信因果の方の見方は甚だ易いけれど、大修行の方の見方は甚だ難題である、難題ではあるが兩箇の方面より此の公案を見破しなれば、この宗旨が圓明になつたとは申されぬ、それは兎もあれ

今この從容錄に於ては何等の方の見方が宜いのであらうか、萬松老人の見處、及

び宏智禪師の見處は那邊にあるかといふことを定めた上でなくては、この本則を談する譯に行かぬ、兩方を誤駁交ぜにしては容易にその落處が分らぬ、野僧の見るところにては、萬松の示衆と云ひ、宏智の頌古と云ひ、孰れも皆深信因果の方面より見解を下されてあるやうに思ふ、ソコで永祖の深信因果の卷には、コノ因縁ニ頌古拈古ノトモガラ三十餘人アリ一人トシテ不落因果コレ撥無因果ナリトウタガフモノナシ、アハレムベシ、コノトモガラ因果ヲアキラメズ、イタツラニ紛紜ノ中ニ一生ヲムナシクセリ云々と呵責せられてあるが、獨り宏智禪師の一尺水一丈波と頌せられたのをば稱歎せられてある、故にこの本則を見るには、大修行底の話し、便ち老人とは何物、此山とは何物、野狐とは何物ぞと着眼するには、及ばぬであらう、然るに天柱禪師の辯解には、眼藏大修行の卷にある永祖の拈提を持ち來つてこの從容錄中のこの話頭を辯解せられたものぢやに依て、學人が甚だ解するに困難するであらうと思はれる、否な野僧も夫が爲め大に困難した事である、されどもこの因縁を事實として見るときは、サシ／＼と不味因果の道理及びその用心が分るであらうと思ふ、ソコで翻つて萬松老人の示衆を拜見したな

らば、不落因果を撥無因果と見られたのであるといふことも自から會得せらるゝてあらう是れだけ断つてさへ置けば先づ安心である

● 舉百丈上堂常有老人聽法隨衆散去取關中一日不去 著從來疑丈

● 乃問立者何人客來須待 老人云某甲於過去迦葉佛時曾住此山

● 元是當 有學人問大修行人還落因果也無但行好事對佗道不落因果

● 落因果萬劫繫纏 墮野狐身五百生備道不今請和尚代一轉語

● 著何丈云不昧因果埋坑 老人於言下大悟狐涎

● 舉百丈上堂 此人馬祖道一禪師の御法嗣にて百丈山の住持大智禪師懐

海大和尚とて叢林開闢の大宗師である上堂とは法堂に上殿し須彌壇又は講座の上で、多くの大衆に對し說法垂誨せらるゝこととて、何時もこの儀式はある

● 常有一老人聽法隨衆散去 委しい文句は上に掲げてある、早參にも晚參にも夜參にも、何時も彼も相變らず、一人の白髮蓬々たる老人が有て、大衆と共に說法を聽聞しつゝ、あつた法益が訖れば老人も大衆に隨て散じ去り、何處へか見えぬ様

になつて仕舞ふ、又上堂の鐘が鳴れば門から這入て来る、不思議な老人も有つたものぢやが、全躰何物であらう

● 關中ニ靜ヲ取ル 三百も五百も居る大衆の中であるから、隨分騒がしいけれど、その騒がしい中に此の老人は落付き拂つたものぢや

● 一日不去 ある日のこと何を思ふたか跡に居残りをした、孰れ禪師に向つて潜かに質問でもする積りであらう或は云ふ散去は隨緣真如、不去は不變真如である、其んな無駄辯を費す程のところでもあるまい

● 從來這漢ヲ疑著ス 萬松はモツづゝと前から怪しい奴ぢやと疑ひをかけた居たのであるが、一日去らぬ所を怪しい奴であるといふことが分つて来た

● 丈乃問立者何人 夫れ其處に突立て居るものは全躰誰ぢや、何を質問でもする積りかのと咎められた

● 事交リヲ解セス客來ヲバ須ク待スベシ ドゥも百丈和尚は交際が下手ぢや、兎に角彼の老人は、尊公の說法を聽聞に來たお客ではないか、お客であるからモツと懇懃に挨拶でもすれば宜いに、其處に居るのは何者ぢやとは、餘ンまりキツイ

ではないか、禪宗坊主はドツもあら〜しいので困る

●老人云某甲於過去迦葉佛時曾住此山 大修行の卷には此處に高く眼を着けてあるけれども、今は先づ尋常に見たが宜い過去の迦葉佛といへば釋迦佛の前に出現した佛である、迦葉と釋迦との間は年代深遠にして、逆も其間の歴史は分らぬけれど、佛説に依て見れば、其んな佛も出現せられたものと信じなければならぬ、佛法の規則は過去も現在も未來も同一轍といふのが極まりである、されど一念普く觀ず無量劫六十小劫猶如半日ともいふので、昔しといへば昔し、今といへば今、ちや、老人の口調に依て見れば、この老人も曾ては坊様であつたものと見える

▲元是レ當家ノ人 餘り遠方の客でもない、實は當家の主人、乃ち前の百丈和尚である

●有學人間大修行底人還落因果也無 修行に大小があつて菩薩學人の修行は大修行である、何故かといふに廣大なる誓願を發して大菩提を求むるからの事である、さて此の大修行底の人は因果に落つるもので御座らうか、又は因果に關かぬものであらうか、ドンなもので御座りませうとの問ひぢや

▲但タ好事ヲ行ジテ前程ヲ問フコト莫レ 已に大修行の人ならば、その大修行の好事を正直に行じさへすれば、善因は善果、妙因は妙果、極まり切つた事ぢや

に依て、何も敢て前途のことを心配するには及ばぬことぢや

●對他道不落因果 ソコで私はその大修行底の人は因果に落ちぬと對へました、因果には必ず善惡がある、今謂ふ所の不落因果は惡の因果に落ちぬと思つたのであらう、見性成佛や不立文字を妄解した禪僧には、兎角すると先百丈の様に因果もなければ修證もない、又手當胸、只是々、茶に逢ては茶を喫し、飯に逢ては飯を喫す、鐘鳴れば法堂、飽擧げば齋堂、何を夫れ善惡の果報といふことやあるなど、空見識を吹き飛ばし、波々として貴重の光陰を徒消する族がある、誠に憐れむべきものぢや、此等は只平等の一邊見に墮して、差別門の如何を知らぬ、妄想佛性の妄見解といふものぢや、彼の老人も矢張この妄見に墮したもので、聊か禪定を修した力が虚しからず、畜生に墮しても宿命の業通を得たのである、永平廣錄第七卷に「學道之人莫得撥無因果、因果若撥、修證終乖、舉百丈野狐話了、乃曰、或者疑曰、野狐是畜生、那得知五百生此疑、最愚、汝等須知、衆生之類、或畜或人、具生得之、宿通有之、或云

不落不昧乃一等然而墮脫只是自然而已如是見解乃外道也と仰せられた又其次の句に今日永平著一句語若道不落因果必是撥無因果若道不昧因果未免數他隣珍とあるして見れば彼の老人は必ず不落因果と云つて因果を撥無し邪見解に墮したものと見える

▲一句合頭語萬劫繫驢轅 驢といふは驢馬のこと轅といふはクイのこと惜い哉不落因果の一句が驢馬を繫ぎつける轅となつて否な轅に繫ぎつけられた驢馬の如くになつてモウ千生萬劫の冤となつた冤となつて彼は五百生の間野狐身に墮した實に邪見解は恐しいものぢや

●墮野狐身五百生 私は大修行底の者は因果に落ちぬものぢやとの誤解に依て散々戒律を犯し放逸を働きました其過罪を償ふことが出来ず遂に五百生の間野狐身に墮落いたしましたとのこと前にも申す通り禪者は殊に依ると禪者でなくとも惡平等に墮し一たび悟りを得れば第二世なしとて因果の恐るべきことを知らぬものぢやに依て案外不行狀不道德に流れ甚しきに至ては佛とも法とも知らぬ大惡黨になつて垢の凡夫よりもモツと巧じた人面獸心人面獸行の大

黒闇に墮入る族がある之を増上慢の惡知見といふこの因縁は實に修行者の照魔鏡であるから親參實究いたさなくてはならぬ空見邪見に墮してはならぬ

▲備道フ不落因果ト 其方は當初因果に落ちぬと云つたではないか然るに今落ちたとは何事ぞと尤めた併しその不落因果は誤解であつたとの懺悔話しなればそれでよい自身の罪過少なからずと知つて發露懺悔するは先佛の教誨ぢや

●今請和尚代一轉語 此句の下に貴ブラクハ野狐身ヲ脱センといふたイヤ迷ひといふものは此んなものであらう一途に不落因果と思ひ込んだからには勿々ドウして此の眞闇黒の大深坑をば容易に飛出づることは出来ぬものぢや冥より冥に入り迷ひより迷ひを累ねて動きは取れぬ悟つた者から見れば實に馬鹿らしい程のことぢや彼の痴愛に迷ふた男女どもが痴愛に痴愛を重ねて遂に情死を遂げる此んな奴はドウせ畜生界に墮するより外に行き所はない若し彼等が一旦豁然として轉身の一路を得たならば其んな馬鹿げたことはせぬ筈ぢやけれども痴雲が深く閉鎖して一點の智光を發することが出来ぬものぢやに依て遂に貴重の人身を失するのである禪者が斷見空見の坑に這入り込で出づることの出来ぬ

も同じ事である。或は詩に凝り、歌に凝つた者が上の句丈を作り、下の句が出来ぬので、それを思ひ詰めて死んだ奴が中有の路頭に迷ひ、幽霊となつて出づる時、或者が上手に下の句を附けて遣たればほつと消失せたとはいふ話のある通り、迷ひといふものは、實に馬鹿げ切たものであるけれども、その迷ひつめ思ひ詰めて動きの取れぬ所で、側からソツと一轉語を代つてやれば、ハツタリと其の迷ひが破れるものぢや、あまり婆説過ぎるけれども、諸禪客篤と考へて見られよ、決して餘所事では無いぞ。

▲甚ノ來山ヲカ著ケン 只黙郎の業重きがためぢやもの汝が自業自得をばドゥして見やうもないと、萬仞懸崖まで突き刎ねたのであるが、是は萬松の爲人である、彼をして自から回光返照せしめんがための一轉語である。

●丈云不味因果 先百丈が向上一邊の空坑に墮在して居るものぢやに依て、後百丈は向下却來の邊よりイヤドゥして因果は歷々分明にして一點も味ますこととは出来ぬぞと一線路を通じられた。

▲一坑ニ埋却セン 餘りドゥも百丈和尚の婆説が過ぎる其んなことを云は

るゝものぢやに依て、後世不落であるの不味であるのと、學人が迷ひを起す故に先百丈も後百丈も一坑に埋めて仕舞たならば、その論量絶ゆるであらうにと、方松は何處へまでも、万仞懸崖に突き放し、學人をして一死再活せしめ様との提撕である。

●老人於言下大悟 因果不味といへる現成公案の一轉語を聞いて、成る程誤つたりと豁然として大悟し、不落因果の空穴より飛出して、即座に野狐の舊皮袋を脱落した。

全跡野狐がドゥして老人に化けたものであらうか、之を事實因縁として見るに、五百生も経た程の老野狐であるから、そは何にても變現自在ぢや、チツとも怪しむこととはない、彼は舊皮袋を脱して後ドゥなつたであらうか、人間に轉生したか、天上に轉生したか、其處までの所は穿索が肩かぬけれども、兎に角百丈の一轉語にて迷夢は覺めたものと見える。

▲狐涎猶在り イヤ大悟したとはいふものゝ、方松の眼から見ると未だく亡僧の事例に依れるとか何とかいふ所は、狐の涎を流して居る様ぢや、その涎が不



落不味なくならねば洒々落々たる境界にはならぬ

頌云

一尺水一丈波幸自河五百生前不奈何早知今日事不落不味商  
量也不断依然撞入葛藤窠腰纏阿呵呵堪笑會也按牛頭若是  
偏灑灑落落如木不妨我哆哆和和偶爾神歌社舞自成曲拍拍  
拍手其間唱哩囉細末將來

●一尺水一丈波 五百生前不奈何、以上の本則は始めから終りに至るまで因果談のみで一向に六ヶ敷いことはない故にこの二句でスツベリ本則を頌じ了られ、以下は後世の邪解を誡められたのである、扱てこの一尺の水一丈の波といふことに就て古來種々な解し方もあるといふ事ぢや、已に天桂禪師ですら一尺の水は一尺の水、一丈の波は一丈の波にして五百生前も五百生已後も只如是ぢや云々と申されたけれども野僧は其説に同意する事が出来ぬ、

野僧は只正直に小因大果の法則に依て此句を解する積りである、一尺の水一丈の波といふは一粒萬倍といふ詞と同じことで、一尺ほどの水の因があれば一丈ほどの波が打つて来る如く、不落因果といへる一念の迷ひを累ねて遂には五百生の間畜生道に墮落した實に恐るべきは一念の迷ひである、慎むべきはこの一念である、若し一步を誤まれば當面に蹉過するぢや、併し一念に依て迷うたのぢやから、亦一念に依て悟りもしたのである

▲幸ニ自カラ河清海晏 成る程左様でもあらうが、我が万松の這裡は幸に性海湛然として一點の波動も御座らぬと、因果に墮ちつゝ墮ちぬものゝあることを他の方面より一寸知らしめんとの爲人方便と見える

●五百生前不奈何 是は何も西天の令が嚴なるのではない、跋郎乃ち先百丈の業が重かつたものぢやに依て、小因大果の原則に外れず、五百生野狐身に墮したのぢや、是れは自業自得で誰がドウすることも出来ぬから不奈何ぢや、されど幸ひ百丈の時に到り自から懺悔の心が起り、あゝ云ふ大善知識に逢うて聞法し參得したから、その良縁に由て漸く野狐身を脱したのである

▲早ク今日ノ事ヲ知ラハ悔クハ當初ヲ慎マザルコトヲ 初めから五百生も野狐身に墮するといふことを知つたならば撥無因果の妄見には墮ちなかつたものを悔しい事には夫を知らなかつた許りに畜身を受けたのである

●不落不味商量也 天童思ふに昔から今日に至るまで不落因果と不味因果とは一等であるとか、一等でないとか、不落は向上で不味は向下であるとか、業報の墮墮であるとか左様ではない異類中行底の活消息であるとか、何とか彼とか勿々商量浩々地である

▲頑涎斷ゼズ 其の様に八釜敷商量するのはドウかといふに、そは矢張狐疑心といへる頑涎がスツペリと断れて仕舞はぬからの事である、故に彼等の商量は皆頑涎である

●依然撞入葛藤窠 天童が正眼を開いてその喧野狐脱野狐不落不味を論量する族の心中を點檢し見るに、依然と矢張何方も八兩半斤で、皆言句の葛藤窠に頭を撞き入れて少しも自由の分はない氣の毒なものぢや

▲腰ヲ纏ヒ脚ヲ綴フ 不落不味の葛藤が腰から脚の方まで纏ひ廻して二進

も三進もならぬありさまぢや、氣の毒なことには此の葛藤窠を脱出することが出来ぬ

●阿呵呵 天童が高い所から靜かに古今の商量を聞いて見るにイヤ早や笑

止千萬なものぢや

▲笑フニ堪ヘタリ悲ムニ堪ヘタリ 左様く萬松も天童と同感ぢや可笑い

許りではなく實に可愛さうなものぢや

●會也麼 併し四海の禪流は天童の笑ひを會したかドウぢや、會したならば墮脱の葛藤窟を出づることが出来るし、未だ會得が出来なかつたならば、汝等諸人も矢張野狐精の爲めに欺慢せられて居るのぢやぞと微悃の爲人である

▲牛頭ヲ按ジテ草ヲ喫セシム イヤ天童和尚あまり買ひ被らぬが宜い、大抵はみな無眼子のみぢや、本統に會したのは和尚と此方位のものかも知れぬ、その無眼子共に會すや也た麼やと推し付けられても、九切死牛に草を喫はせる様なもので、畢竟無益なことぢや

●若是儼灑灑落落 若し夫れ儼等諸人が流れ川て尻を洗た様に不落因果も

不味因果も墮野狐も脱野狐もスバツと脱落盡して迷悟凡聖の臭氣がなくなつたことならば………

▲蟲ノ木ヲ嚙ムガ如シ 蟲の木を喰うて居るのは何の料簡もない様ぢや、曲ツても直ぐても其んな事に分別は用ひぬ落不落墮不墮といふ様に種々の分別思量はない

●不妨我哆哆和和 法華釋籤に哆哆は行を學ぶの相嚙和は語を習ふの聲とて、是は子供が行儀を學んだり、言語を習ふたりする所の様子であるが、結局是は言語動止に過のない事ぢや、古語に終日説口無過といふことがある、その通りて、凡聖迷悟の臭氣さへ無くなれば、どの様に商量しても一向差闕はない、不落因果と云つたからとて、不落の空穴に墮ちもしなければ、不味因果と云つたからとて、不味の有爲に坐するといふ氣遣ひもない、夫といふのが不落不味の葛藤を脱して高い所から其の表裏兩面を見下すぢやに依て、その窠窟に落ちぬ、その眼が開けて見ると天童の笑ひが會せらるゝ

▲偶爾トシテ文ヲ成ス 是は前句と對である、蟲喰の木といふものは勿々文

彩があつて立派なものぢや、ドツして人間の彫刻師が種々に工夫して彫たものより餘程面白い雅致がある、偶爾とは偶然のこと、何心なくチャンと文彩を形はす、今もその通り灑落の境界になつたならば、墮野狐も一段の風流となり、脱野狐も亦禪者の行履となるであらう

●神歌社舞自成曲 彼の田舎の農民などが神社祭りに何だかガヤ／＼と歌ふたり舞ふたりして馬鹿踊りを爲して居るのは、別に曲調があると云ふでもなけれど、其中に自から面白い曲調がある、佛法の修行もその通り、格を離れて始めて格に合するのである、名相言句の格量に墮ちては文字の法師となるけれども、格外に逍遙するときは、おのづと格量に合する所がある

▲拍拍是レ令 無證矢麤に手を拍つ様なけれども、夫がおのづと拍子に合つて面白い所がある、舌大千を覆て語言三昧に入るけれども、言々句々おのづから法に合ふて行く

●拍手其間唱哩囉 哩囉を唱ふとは一方で歌ふたり舞ふたりする者がある時、其傍から手を拍てハヤシを入れる事である、この哩囉は格外超越の玄談、佛祖向

上の曲調であるから、凡聖迷悟有無得失の數量葛藤に落ちぬから無限の妙味がある、ドウぞ天童座下の諸人も是の如く洒落脱灑の境界になつて野狐の涎を舐めぬ様になつて貰ひたいものぢや

▲細末ニシテ將チ來レ 何だか嬰兒の様に哆々和々ではドウも能く聞き取ることが出来ぬから、モツと微細に音曲を分けて聞かせて貰ひたいものぢやとは何事であらう、只不落不味を丸呑にしてはならぬ、細には無間にまで入て親參實究するが肝要である

### 第九則 南泉斬猫の話

#### 示衆

示衆云、陽翻滄海、大地塵飛、喝散白雲、虛空粉碎、嚴行正令、猶是半提、大用全彰、如何施設

今日は南泉斬猫の古則を提唱するのであるが、これは随分六ヶ敷い難則である

から古へより天下の叢林に於て商量が絶えぬ、兎に角拙者だけの見込を話して見やう

●陽翻滄海、大地塵飛、喝散白雲、虛空粉碎。ドウも禪家の言論は荒ッポイから綿々密々なる教者法師や律僧などが聞くと膽を潰すかも知れぬ、又世間の學者がこの禪語を聞けば茫然自失するより仕方がない、何せかといふにそは文に依て義を解釋せんとするからの事ぢや、大地が塵の如くに飛ぶとか、虛空が粉の如くに碎けるとかいふ様なことは、到底文字に拘泥する者の解し得らるゝ筈のものではな

い併しなから此んな言語は禪者の言語とばかりに思はぬがよい、楞嚴經(第九卷)の中にも佛の御說法がある

佛阿難及び諸の大衆に告げたまはく、汝等當に知るべし、有漏世界の十二類生本覺妙明覺圓の心體は十方佛と無二無別なり、汝が妄想理に迷ひ咎を爲すに由て癡愛生ず、生發すれば徧く迷ふ故に空性あり、迷ひを化して息まざれば世界生ずることあり、此の十方微塵の國土の無漏に非ざる者は皆是れ迷頑妄想の安立なり、當に知るべし、虛空の汝が心内に生ずることは猶ほ片雲の太清裏に點するが

如し況や諸の世界の虚空に在るをや、汝等一人眞を發して元に歸すれば、此の十虚皆悉く銷殞す、云何ぞ空中あらゆる國土の而も振裂せざらん

又その第六卷には斯ういふ文句がある

覺海の性は澄圓なり、圓澄の覺は元妙なり、元明の照に所を生ず、所立すれば照の性亡ず、迷妄にして空虚あり、空に依て世界を立す、想の澄めるは國土と成る、知覺は乃ち衆生なり、空の大覺の中に生ずることは海に一漚の發するが如し、有漏微塵の國は皆空に依て生ずる所なり、漚滅すれば空本無なり、況や復諸の三有をや、元に歸すれば性は性無二なり、方便に多門あり

此等の文句に依て見るも、世界虚空は衆生一念の妄想分別に依て生じたるものと、いふので、その一念を翻して元の本性に歸すれば、世界も虚空もスッペリと皆無になるとの所論である、ソコで又同經卷の七に「阿難當に知るべし妙性圓明にして諸の名相を離る、本來世界衆生有ること無し」ともあり、又華嚴經三十三兜率宮中偈讚品の中にも、衆生妄りに分別するを以て佛あり世界あり、若し眞の法性を了すれば佛もなく世界もなしとある、此等の佛意から見ると、禪語も佛語も左のみ違つた所

はない様ぢや、滄海を踏飛し大地を轉回するとは眞の法性を了するといふことぢや、白雲を喝散し虚空が粉の如くに碎けるといふのも亦眞を發して元に歸するといふことぢや、大地が塵の如くに飛び、虚空が粉の如くに碎くれば、十方虚空悉皆銷殞である、併し銷殞したとはいふものゝ山は依然として高く、海は依然として深い、之を有りの儘の有り潰れと申すのぢや、何ぜかといふに、楞嚴經に「諸の器世間念に應じて化して無上知覺と成るとある、これが有り潰れといふ證文である、已に有り潰れてあるから十方虚空も宇宙法界も皆無上知覺である、無上知覺の顯現した處には五陰の白雲もなければ、三毒の水泡もない、證道歌に「法身覺了すれば無一物、本源自性天真佛、五陰の浮雲は空去來、三毒の水泡は虛出沒、實相を證すれば大法無し、刹那に滅却す阿鼻の業」とある、是に由て之を觀るに滄海と云ひ大地といふは先づ三毒のこと、白雲といひ虚空といふは五陰及び諸の妄分別のことぢや、之を喝散し之を喝散したのが、南泉の斬猫ぢや、故に斬猫の時は天地一枚の寶劍のみにて、虚空法界は申すに及ばず、假令三世の諸佛無量の賢聖たりとも面出しはならぬ、淨裸々赤洒々熱鐵上に寸塵を立せずともいふべきぢや、その事を知らせんがためこの示

衆に此言がある

● 嚴行正令猶是半提 前にも黙々として正令を全提すとあつた如く、祖宗門下の正令といへば端身正坐であるが、格外向上の玄機より見來れば猶是れ半提て全提ではない

● 大用全彰如何施設 然らばその全提はドンなものであらうか、南泉の斬猫は如何にも嚴重なる本分の正令ではあるけれども、そればかりでは半提といふもの、趙州の戴鞋があつたればこそ全提となつた、公案が圓明になつたのぢやと暗に本則に響かせ、その施設が見たいならば、南泉と趙州との活作畧を見よがしとの萬松の思召と見える

本則

舉南泉一日東西兩堂爭猫兒 人平不語 南泉見遂提起云道得即不斬 誰敢衆無對 直待雨 泉斬却猫兒爲兩段 抽刀不 泉復舉前話 問趙州 再來不便脫草鞋於頭上戴出 好與一 泉云子若在恰救得 刀兩段

猫兒 心斜不 覺口喞

● 舉南泉一口東西兩堂爭猫兒 南泉山の普願禪師といふは實に古今祖席の

英雄で隨徒も澤山にあつたと見える、或日の事であつたが、東堂西堂の凡僧共が大勢寄集うて一疋の猫兒を指し喧々囂々と佛性の有無を争論して居たのである

▲ 人平カニシテ語ラズ水平カニシテ流レズ 水も高低さへなければ流れぬ

けれど、その流れ出づるといふは何れ不平があるからのこと、人も不平さへなければ黙つて居るけれども、少し不平があれば直にツツと鳴り出す、佛性は元來有無の邊に墮ちぬ平等絶對のもので、猫でも杓子でも、佛でも衆生でも、更に増減のあるものではない、それを知らぬから争論が起るのである

● 南泉見遂提起云道得即不斬 南泉は凡僧共の争論が聞くに堪へられなかつたものと見え、直にその猫兒を引ツ摺みサア何とでも云つて見よ、道ひ得て適當

ならば斬らぬ、道ひ得ずんばぶち斬つて仕舞ふが、ドッぢやとの權幕洵にドゥも凄い勢ひぢや、道ひ得るとはどの様なことを云つたら南泉の氣に入るであらうか、道ひ得るも三十棒、道ひ得ざるも三十棒といふ事があるが、今もその通り道ひ得るも

即ち斬却道ひ得ざるも即ち斬却であるといふことを見て取らねばならぬ故に碧巖には、正令當行十方坐斷とある又、智劍出て来て一物も也た無しと高く眼を著けて斬却の行令を見なくてはならぬ、這裡に至つて有罪無罪、殺不殺、有佛無佛等の論量は無用ぢや、之を祖門下に於ては劍刃上の一句といふ正當恁麼の時佛に逢ては佛を殺し、祖に逢ては祖を殺すのみか、山河大地十方法界も亦一刀兩段、生死涅槃菩提煩惱も亦一刀兩斷の大智劍であるからウンともスンとも云はれたものではない、故に斬の時徹底斬である

▲誰カ敢テ鋒ニ當ラン 云ひ得ばといふた南泉の舌劍にはドンな者でも寄り付くことの出来るものではない

●衆無對 夫はその筈ドンな富樓那の辯があつても此處で何ともいふことはならぬ、彼の維摩ですら閉口したてはないか、併し作家の淡ならば南泉の一刀を奪却するであつたらう、或は南泉の横面でもボンと張つける所ぢやけれども、凡クテ許りであつたものと見えて満堂は實に水を打つた如く、黙つて仕舞つた、ツイぞ是れまで經驗のないことであるから大衆も實は南泉のために膽玉を奪はれたの

である

▲直ニ雨ノ頭ニ淋クヲ待ツ 前から何の催しもなく出し抜けに大雨が降つて来たものぢやに依て何れもビシヨ〜になつた

●泉斬却猫兒爲兩段 何とも彼とも對へがないから一旦抜いた劍を鞘に收めることはならぬ、更に進一歩してその猫兒を斬却せられた、ソコで喧しかつた兩堂の爭論もピツタリ止んで仕舞つた、流石は南泉の大機大用すさまじい者ぢや、然るに事を解せざるものは、出家でありながら殺生するとは餘りな事ぢや、南泉に有るまじき所業ではないかといふけれど、左様な譯のものではない、よしや一疋の猫兒を斬却したとするも、罪性不可得の南泉に、可得の罪性を以て論ずる場合でない

▲刀ヲ抽イテ鞘ニ入レズ 抜いた劍刀を鞘に入れぬが南泉の南泉たる所以である、断ずべきに當つて断ぜざれば却てその亂を招く、一刀に兩段したから天下太平ぢや

●泉復舉前話問趙州 南泉が猫を斬つた時には趙州和尚が他出ても爲て居

たものと見える。趙州の從諗は普願の一の弟子にて師匠よりも器量の勝れた人である。その和尚が夕景になつて外より草鞋がけて歸つて來られた。ソコで南泉和尚が件(くだん)の話をして趙州にその意見を問はれた。

▲再來半文ニ直ラズ 南泉も猫を斬殺したのが氣にかゝるものと見え、趙州の歸り來るを待つて、その所見を問はるゝけれども、堪(こ)は明かぬであらう。

●便脱草鞋於頭上戴出 趙州和尚も變(ま)天平なることをせられたものぢや、師匠が師匠なら弟子も亦弟子ぢや、

或者是妄解して、師匠が僧にあるまじきことを致したから趙州はその顛倒なることを諫言したのぢやといふが

それこそ没交涉ぢや、其んな妄分別は何の役にも立たぬ併しながら趙州は何故その草鞋を脱ぎ、而もそれを頭上に戴いて立出でられたのは如何なる譯であらうか、古人は未だその理由を辨じて居られぬやうぢや、只その大躰に就て却來の消息なることは辨じてあれど、その所作に就ての辯がない

理屈佛法になるかは知らぬけれど、迂(ま)禪試みにその理由を辯じて見やう、南泉の

一刀斬斷にて大道が平々坦々となり門裏門外草茫茫たりし小徑が一刀のため  
に萬里無寸草となり、一道清平となつたものぢやに依て最早草鞋を穿つに及ばぬ、赤脚にして無礙自在に往來が出来るやうになつた、ソコで草鞋を頭に戴いたのみならず、南泉斬却の所に足を据るでないとて、早速進一歩せられたのであらう

兩堂の雲衆水衆が初めより一道清平の地を知り無物の真域を知て居たならば、ゴタクと爭論するには及ばぬ

▲好シ一刀兩段ヲ與フルニ 萬松にも亦一刀がある、若し此方が南泉であつたならば、猫兒と共にこの趙州をも一刀兩斷するであつたらうにと、是は萬松の一刀ぢや

●泉云子若在恰救得猫兒 此は趙州の所作が至極南泉の氣に入つたものと見え、證明せられたのである、尊公が居たならば猫兒も助かるであつたらうに、居なかつた許りに、猫の野郎は飛んだ災難に遭つたは、是れは南泉の獨語と見える  
▲心斜ナレバ口ノ喞ムヲ覺エズ 如何に南泉和尚でも吾子は賞めたいもの



と見える海に早や外から聞いて居ると聞き苦しいものぢや、萬松などはあまり感心が出来ぬ

### 頌云

兩堂雲水盡紛拏在高聲 王老師能驗正邪明鏡當臺 利刀斬斷俱亡像多消得龍王 千古令人愛作家不肯一人 此道未喪死猫兒頭 知音可嘉只是少無鑿 山透海兮唯尊大禹功不鍊石 補天兮獨賢女禍一不趙州老有生涯 無信手拈來草鞋頭戴較些些 且信異中來也還明鑒難設 只箇真金不混沙難是真

●兩堂雲水盡紛拏 南泉門下兩堂の雲水共が偶々一疋の猫を捕まへ佛性があるとかないとか争論して恰も絲の亂れた如く、手を引張り合せた如く取り亂れて、何時まで立てても議論が益々沸騰して始末の付かぬありさま  
▲理有ラバ高聲ニアラズ 双方互に道理があるならば靜かに論じて分る、

然るに無眼子ばかりの寄り集りてあるから、聲ばかり高くて喧しい、それ故南泉和尚が癩癩を起して猫兒を斬斷せられたのかも知れぬ

●王老師能驗正邪 南泉和尚の俗姓は王氏なるが故に王老師とは申したものの、老師とは古佛なるがゆゑ尊稱せられたのである、兩堂の雲水がガヤ／＼と論議して居る處へ立ち出で、その猫を引ッ攫んで、サア有とても無とても云ツて見ろ云はなければ此の利刀を以て一刀に斬斷して仕舞ふぞとスゴイ勢を示したのは實に能く正邪を試験せられたのである、この照魔鏡を掲げられた所が、兩堂の雲水残らず化の皮を照らされ、是れまで惠來さうに饒舌て居た奴等もモウ何とも云ふことが出来なかつた

▲明鏡臺ニ當テ物來レバ斯ニ鑑ム 胡來れば胡現じ漢來れば漢現ず、南泉の明鏡臺に當ツたる兩堂の雲水は臟腑の底まで照らされてモウ一言も吐くことが出来ぬ

●利刀斬斷俱亡像 兩堂の雲水共が何とも云はぬものぢやに依て止むなく鞘から出した利刀を其儘收める譯には行かぬ、ソコでスバリと斬り殺して猫はか

りの像を亡ぼしたのではなく、猫と俱に有無迷悟の妄分別は更なり、十方虚空までも悉皆消殞して一微塵ばかりも蹤跡を留めぬ、故に俱の字に眼を着けねばならぬ、この俱亡像の三字は一則の大綱にして一頌の眼目である

▲龍王多少ノ風ヲ消シ得タリ 龍王が風雲を起すときは勿々すさまじいもので寄ても付けるものではない、南泉の利刀を抜いた時の勢ひはそれと同じ様ぢや

●千古令人愛作家 イヤ何うも南泉の手際といふものは立派なもので、千古萬古天下後世の人をして南泉の好作家なることを愛せしむるであると、天童非常に賞められた

▲一人有テ肯ハズ 天童は南泉を指して作家なりと愛せらるれども、この萬松ばかりは承知が出来ませぬ

●此道未喪 ドゥして何時までも南泉斬猫の端的を愛せしむるのであるかといふに、それは何も昔し物語ではない、この因縁は天下叢林の公案となつて幾多の人を迷悟せしめて居るから、斬猫の此道は今尚儼然として喪びない、喪びないから

して愛せしむるのである

▲死猫見頭何ノ用ヲ作スニ堪ヘン 已に兩段された死猫見頭ではないか、天童はそれを如何にも珍重せられると、萬松などは一向物の數とも致さぬと抑しなから、矢張裡面より卓上して居らるゝ、何ぞかといふに用もなきものならば萬松も寧ろそのことに黙つて居たがよい、それを彼れ是れといふのは矢張天童と同じく珍重して居る仲間と云はねばならぬ

●知音可嘉 此道の知音ならば俱に嘉すべき好箇の因縁である、天童や萬松は南泉の好知音ぢや、併し天下に知音はなからうか、有るならば共に珍重して商最すべきである

▲無シトハ道ハズ只是レ少シ さらば南泉の知音がないとも云はれぬけれども、ドゥも少ない様ぢや、眞箇の知音は趙州一人位なものかも知れぬ

●鑿山透海兮唯尊大禹 この一句は南泉の手際を讃歎せられたのであるが、流石は天童も學者であるから、禹王の故事を巧みに使はれたのである、昔し禹王といふ聖人は世人が洪水に苦しむを憐み、山を鑿り穿つて海に開通せられ、莫大なる

社會の公益を謀られたといふことぢや、今もその通り南泉が天下雲霧の有無得失の洪水に困つて居る處を一刀兩段に斬り開いて本來無物の大海に開通せられた功といふものは、禹王の功よりも尙廣大である(史記の故事)

▲功浪リニ施サズ 大禹や南泉であつたればこそ世出世の大功をも現はしたのであるけれど、並々なものでは容易に出来ることではない、實に大したものぢや

●鍊石補天、獨賢女媧 此れは淮南子にあること、共工氏といふ者の兵が大走強くて、堯帝と戰爭をしたが遂に敗戦した、夫が悔しさに頭を不周山の石にツツ附けて死んだれば、天柱が折れて陰陽度を失ふた、戦亂の後には天地の氣候も其度を失うて饑饉の起ることもある、時に女媧氏といへる聖人が五色の石に精神を鍊てその天柱を補ふたとは、五倫五常の道を以て天下人に教へ、人氣が善くなるに随つて天地の氣候も定つたといふ事であらう、今もその其の通り趙州が草鞋を戴いて出られた好箇轉身の作畧は、恰ながら女媧氏が天柱を補ふた様なものである、南泉の一刀で賊軍をば斬り拂ふたけれど、夫がため天下が大荒れに荒れた所を趙州

が天は是れ天地は是れ地、君は上に位るし、臣は下に位るすと諸法實相の法令を布かれたのは、女媧氏の功ともいふべきである

▲一ヲ闕テハ不可ナリ 南泉の正令も必要ではあるが、趙州の行令がなくては公案が圓明ならぬ、掃蕩ばかりで把住がなければ片輪佛法といふものぢや、正位は本來空界無物、偏位は色界有萬象、形斯うなくては天下が治まらぬ、南泉は放倒趙州は扶起、それこそ明暗雙々ともいふべきぢや

●趙州老有生涯 イヤ何うも趙州は老練なものぢや、並々な者と同日の論には行かぬ、この趙州は六十一にして出家し始めて南泉に參じられた、而して二十年の間南泉に隨侍し八十の時、趙州の觀音院に住し、夫から四十年の間、人天を化導せられたとある、最初出家の時誓て申さるゝには、七歳の童子たりとも我に勝るゝ者をば之を師とし、八十の老翁たりとも我に劣るゝ者には之に教へんとて、一生懸命に三學を修せられたものである、實に好生涯である

▲手ニ信セ拈シ來ツテ不是ナシ 南泉の作畧は實際理地一塵不立、趙州の大用は佛事門中不捨一法である

●草鞋頭戴較些些 些々とは少々のこと、有佛の處に住する勿れ、無佛の處急に走過すべしと云はぬ許りに草鞋を戴いて出て去た所は實に洒々落々たるものぢや、ソコで子若し在らば恰も猫兒を救ひ得んものと趙州を讚められたのは少々、南泉の氣に入つたからの事である些々とはいふものゝその實は十分氣に入つたのであらう

▲且ク一半ヲ信ズ 天童は大走趙州を讚めらるゝけれども、萬松は然らず、十分とは云はれぬ

●異中來也還明鑑 流石は老趙州、他の有佛無佛を論量して居る雲水共とは異なつたものぢや、その異中の異より現はれ來た非凡の人であるから還て明鑑、ハツキリと南泉の言句を聞き取られた

▲衲子は設じ難し 南泉の語に、龍蛇は辨じ易く、衲子は設じ難しとある、龍蛇を辨別することは敢て難きことにはあらざれど、衲子の境界は、向上向下回互宛轉の活作用がある、殊に異中來の人は格別である

●只箇眞金不混沙 ドウも天童の讚め方は非常なもので眞金は趙州のこと、

沙は兩堂紛拏の雲水共である、趙州ばかりは眞金であるから、雲水共の土沙には混雜いたさぬ實に變つたものぢや

▲是レ眞ニ滅シ難シ なる程天童の申さるゝ通り、眞の眞金は土泥の中に在ても、タ、ラにかけても消滅するものではない、人々具足の眞金もその通り、如何に猫の皮袋に入つたからとて消ゆるものでもなければ、佛の皮を破つたからとて色が善くなるといふこともない、斬猫の當處に於ても、戴鞋の拈處に於ても、眞金は何處へまでも眞金である

### 第十則 臺山婆子の話

#### 示衆

示衆云、有收有放干木隨身、身能殺能活、權衡在手、塵勞冤外盡付、指呼大地山河皆成戲具、且道是甚麼境界、

●有收有放干木隨身 宗師家分上となつて爲人度生するときは色々な手段